日本一のエースと天才バッター

四つ葉

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

その年全国軟式野球選手権大会にたった１０人で制した長野県の大門中

そこには二人の天才と言われたプレイヤーがいた

目次

プロローグ　1
青道高校副部長高島さん　12
青道へ行く仲間　20
日本一のピッチャー　31
監督と先輩たち　39
起爆剤　49
地味　59
背番号　64
沢村　72
意識　77
結果と実力　84
一年ＶＳ二三年　94
ＶＳ沢村　104
奇策　112
インコース攻め　124
ベンチ入りメンバー　131
武器　139
一球　151
負けられない物　160
合宿７日目　172
リード　184
ピンチの時こそ　191
狙い打ち　199
俺と美帆　209
アクシデント　221

勉強 233
夏の始まり 240
開会式 249
一回戦 260
期待 276
勝負 281

プロローグ

7回裏2アウトランナー2，3塁
カウント2―2
「……ふう。」
ここでバッターは三番の太田か
全国中学校軟式野球大会決勝戦はここまで0対1と均衡した試合が続いていた
俺の背番号には4。
しかし今はセンターとして守備についていた
「後一人だぞ。羽島。打たせてこい。」
声を張り上げ必死に声をかける
そして羽島が思いっきり腕を振って投げる。アウトローいっぱいのストレート。スピードは100kmいかないがコントロールのよさはピッチャーの中でずば抜けていた
本当このチームじゃなければエースなんだよな
背番号8をつけた羽島を見てそう思う

そして見逃す相手バッターに俺はその瞬間を待ち続ける
審判は高らかに手を挙げコールする
グラウンドでは少しながらの観客が歓声をあげ歓喜を喜ぶ
そして整列
相手ベンチは１８人きっちりそろっているが俺たちチームはたった１０人
しかしとても個性的な選手の集まりだった
背番号サウスポーで１２０ｋｍのストレートとカーブとチェンジアップを扱うエースで幼馴染の前田美帆
今大会全国大会で唯一の女性ピッチャーでありコントロールもいい投手
小柄ながらスタミナもありこのチームの創設者でもあった。
また自分が守備を守るときはライトを守っていた
初戦と準決を投げ１２回被安打１０失点２と言う完全にエースと言っても過言ではない
中学通算防御率は１．５０
背番号２キャッチャーの茅野誠司
肩が弱いものもリード面でチームを支え、このチームの要だった
コントロールのいいピッチャーだったで非安打数が少なく抑えられたのも茅野のお

かげだろう
背番号3ファーストの大山海斗
当たれば飛ぶ。しかしランナーがいないところしか打たない
背番号4内外野どこでも守れるユーティリティープレイヤーの俺こと砂田健斗
自分でいうのもなんだが中学通算打率５１２出塁率は7割、盗塁成功率9割といういかれた成績だった
しかしその全てがヒットであり、長打を打ったことは一度もない
そんなおかしな選手だった
背番号5、サードの美山清太
守備がうまく肩は高校生レベルはあると思われる
またバントがかなりうまくこいつが失敗したところは俺もチームメイトも見たことがなかった。
背番号6、ショート兼抑えの檜山公司
守備はもちろん。ピッチャーに、回っても確実なピッチングをする。３回を投げ被安打1という完璧なリリーフだった
この打たせてとるムービングボールが特徴の選手だったのが特徴だった
派手なプレーはないものも、確実に守れる選手だった

背番号７レフトの前田春成
特徴は何もない。
苦手なことも何もなく。全て平均並みの選手だ。
背番号８ピッチャー兼センターの羽島清史郎
コントールがよく打たせていくピッチングが持ち味。防御率は１１回を投げ被安打１５２失点
また足が速く俺についで出塁率が高かった
背番号９ライト兼セカンドの小柴海
肩は弱いがバッティングセンスに定評があり得点圏打率４割超えのチャンスに強い選手だった
まぁ得点圏にランナーがいないと打てないのがねっくだが
背番号１０マネージャーの大島京子
まぁ人数合わせで入れているのだが、人当たりが良くチームの助けになってくれた。
たった１０人で全国制覇
そのニュースは全国の高校スカウトの間で駆け巡った。
「ん～疲れたわね～。」
「……お前な。」

部活の祝勝会途中に俺は美帆に呼び出され店の外に来ていた
お気楽なエースに俺は苦笑してしまう
「だって負けて当たり前の試合じゃない。私たちのヒットの本数見ればわかるでしょ。」
「……まぁな」
俺たちのスコアボードには点数の右に０という文字
ヒット０本で一点
俺が四球を選びすかさず盗塁
次の美山がバントをし三番の小柴の犠牲フライで１点
その一点を俺たちは守りきった
打率は俺以外は１割台
守備さえきちんとすれば勝てるという監督の指導のもと守りきる野球を実践してきた
なので大会通してのエラーは全国大会決勝まででたったの１
バントが１５盗塁が１２得点が９
何とも打高投低の中学野球では珍しかった
「……まぁ、この野球部はこの年で終わりなんだろ。それを頂点まで上げることができたのなら十分だろ。それに美帆はこの夏で俺らと一緒にやれるのは最後だしな。」

高校野球連盟のもと甲子園への出場は男子生徒のみ
つまりは女子の美帆はもう俺たちと一緒に甲子園を目指すことはできない。
「……そういや、健斗はどこ行くのよ。」
ショートカットの美帆が言う
「ん～。今の所声がかかってきてるのは栃木の白龍高校が一番の強豪でつぎは四国の明徳、名古屋の中京、和歌山の智弁かな。でもまだ未定だな。」
「えっ、そんなに声かかっているの？」
「まぁ、今大会は調子よかったし、青葉中の本郷相手に2本打てたしな。あぁいうピッチャー俺得意だし。」
準決勝の相手は北海道の青葉中という中学一のピッチャーと言われるバケモノを相手に戦った
美帆は本郷に3打数3安打を打たれたが全て次のバッターにゴロを打たせゲッツーを量産
俺たちは俺のセンター前のタイムリーと小柴のタイムリーで2点をあげ
2対0で逃げ切った
俺は3打数2安打1打点2盗塁
「あの日からスカウトに声かけられるようになったんだよな～。小柴はお前去年西東京

ベスト8の薬師から声かかっているって聞いてる。」
「そうなんだ。」
と興味なさそうにしている美帆。
お前が聞いてきたんだろと愚痴を言いたかったけど何とか堪える
まぁこいつ本当に他人には興味ないよな
「美帆は?お前野球は続けるのか?それかソフトボールに転向するのか?」
「……えっ?私やらないわよ。」
「……は?」
美帆の言葉に少しおどろく
「だって私は健斗と野球がしたかったから野球してただけだから。」
「ちょっと待て。お前そんだけの理由で野球やってたのか?」
「ん?ダメなの?」
「いや。お前。」
と少し頭が痛くなるようなことを言う
こいつの野球センスに関しては本当に息を巻くほどすごい選手だった。
ものすごく早い球も投げれない。変化球もそこそこ六年になっても補欠のままだった

しかし中学に入ってから今の監督からコントロールという武器を磨きあげ
大門中を中学二年の時に初の全国出場。そして今年の夏に初めてで最後の全国優勝へ導いた
「それに母さんから硬式は痣が残る可能性があるからやってほしくないって。」
「……あぁ。」
多分そっちが本当の理由だと判断する。野球もソフトも正直安心できる競技とは言い切れない。今は軟式だからいいものの硬式に変わると女子は一変する
「ならどうするんだよ。進路。」
「……それだから聞いてるんでしょ。」
「……あぁ。そういうことか。」
俺はいいたいことの全てを理解する
「……マネージャーか。」
「そう。一応そういった仕事も京子から教わったもの」
「そういえば、よくお前たちの掃除に付き合ったりしてたしな。俺。」
大島と美帆は真逆の性格で美帆は元気でムードメイカー的存在
大島は静かだが周りに気を使えるマネージャー。
しかし不思議と仲がよく、仕事を共有していた

「てか又同じ学校選ぶつもりなのか？」
「悪い？」
「いや。悪くはないけどさ。」
こう見えて美帆は成績優秀テストでも優秀で、野球知識もあるし俺以外には気を使えるいいやつなんだよなあ
「……はぁ。まぁ決まったら連絡する。でも監督の昔いた高校が気になっているんだよな。」
昔、今の監督は元々甲子園準優勝へ率いた監督らしくその当時の教え子が監督をしている高校へ進んでみないかと言われていたのだ。
「えっと確か青道高校だったよね。」
「あぁ。俺たちも覚えてるだろ。青道高校を準決勝へ導いた片岡鉄心がその後を引き継いでいるらしい。」
青道高校野球部
全国大会へここ五年は進んでいないが西東京地区で3強と言われている強豪校だ
「まぁ、うちと異なる点はその攻撃力。一度勢いで止められない打線と二遊間の堅い守りは西東京一。今年の西東京ベスト4の高校だ。」
「…」

「ぶっちゃけスカウト来たならそこに行こうかって思ってる。……お前も気になるだろ。あの片岡鉄心だぞ。」
　ぶっちゃけ俺がみた中で一番打ってみたい投手の一人だ。
　１５０ｋｍ超えるストレートに大きく曲がる変化球
　気持ちで押していく投手で闘志に溢れているピッチャーだ。
「……って話ししたらマジで青道高校に行きたくなったじゃねーか。監督に頼んで連れて行ってもらおうかな。」
「そういえば、今度の秋の地区予選私もみてみたいピッチャーがいるから一緒に東京行く?」
「そうだな。お互いにいい刺激になりそうだし、母さんに頼んでついでに青道高校を見に行こうぜ。一応監督と相談してだけど。」
「そうね。私も寮見とかなきゃ。」
「お前入る気満々だな。」
「そっちこそね。」
　俺と美帆が頷きあう
「……健斗、美帆何してるの。」
　母さんの声が聞こえる。

「んじゃ、お互いに検討を祈る。」
「ラジャー。」
と急いで駆け込む俺と美帆。
その姿はお互いに子供のようにはしゃいでいて
俺と美帆の日常だった

青道高校副部長高島さん

「健斗お客さんよ。」
「……またか。」
俺はため息を吐く。全国大会決勝から二ヶ月。
俺はうんざりするほどの勧誘を受けていた。
俺と美帆はあの後青道高校に見学に行きたいと監督に言うとその時はスカウトマンに紹介すると言われたが
しかしある通知が来てそのことは叶わなくなった
その理由とはＵ１５の世界選抜メンバーに俺と美帆そして羽島が選ばれたのだ
そしてキャプテンに俺が指名され世界を相手に一ヶ月の間戦ってきた
その結果が俺は一番バッターとして３９打席１５安打２打点５四死球１０盗塁盗塁成功率１００％で大会ＭＶＰを獲得した
国際大会初の女子のピッチャーで美帆は中継ぎとして５試合を投げ１失点という無難な結果だった。
しかし唯一の心残りといえば決勝で５回５失点をきっした羽島だろう

唯一の二年生投手でこれまでも大きく崩れたことは滅多になかったのだが
今年はもう試合はできないし少し不安だな
今年の大門中は三年生は俺と美帆そして小柴に大島だったのでたった6人の野球部は新入生が入るまでは試合はできない。
まぁ、守備に関しては鉄壁なのでそこはなんとかなるだろう
まぁ身内話はそれくらいにして世界大会の影響は大きかった
まずは多くの有名名門校から声が掛かるようになった
郁栄、山守学院　更科総合　清正社　浦島学院など多くの声がかかっている
もうそろそろ決めないとまずいんだけどなぁ
俺はため息を吐く
期限は十一月には出さないといけないのでもうそろそろ絞る先を考えないといけない
「……さてと。」
俺は下に降りるとするとカーンという音が聞こえる。
ウチは昔からバッティングセンターを経営しており、俺と美帆の練習場所となっていた。
最近では俺専用の硬式ボールのバッティングコーナーができている

そして客間に入ると女性が一人座っていた
……？スカウトじゃないのか？
メガネをかけたクール系の女性でどちらかというと美人の類にはいるだろう
「んっと失礼ですがどちら様ですか。」
全く見覚えのない人に俺はただ不思議に思う
「えっと遅れました。私はこういうものです。」
と名刺を渡される。どうやらスカウトの方らしい。内心少しイラつきながら俺はその高校
「……青道高校。」
思わず声がでてしまう
「はい。私は青道高校副部長の高島礼と言います。砂田くんをぜひ我が校の野球部へと思いまして。」
俺はただ声を失ってしまう。ずっと志望していた高校。
「……あのひとついいですか？」
「はい。なんでしょう。」
「見学することって可能ですか？」
すると青道の副部長は驚いている。それもそのはず。俺はこのスカウトが始まって

から一度も見学など全てを断ってきていたからだ。
「それはもしかして。」
「一応第一希望は青道高校だったんです。一応コーチに頼んで見に行く約束を取り付けていたんですが、世界大会の影響で見学を断ってしまった時は本当にすいませんでした。」
「……っ」
　すると少し顔色が変わる
「あれ？」
「まさかね。」
　すると高島さんは俺の方を向き
「それで見学することは可能ですが……しかし。」
「まぁ秋季大会ですよね。」
　十月になり明日は都大会準々決勝。
　俺はそのカードを美帆と見に行くことになっていたので知っていた
　帝東と青道
　甲子園出場経験のある2カードに俺は少し楽しみにしていた
「いえ。俺が知りたいのは冬休みの基礎練習、体作りのためのトレーニングを見る。い

やできれば参加できないかと思いまして。」

　すると高島さんはこっちを見る

「正直に言うと俺は冬のこの時期トレーニングする場所が取れなくて少し困ってるんですね。長野の雪の量じゃノックは受けられないし、さすがに硬式のバッティングセンターも雪じゃ使い物になりませんから。それに見学と言っても実際ボールに触りたくなるので。」

　ただ見るだけじゃ誰にだってできるそれよりも

　その練習が自分とあって尚且つそこで上を目指せるか

　そこが一番重要視したいところだった。

「あと青道って投手不足で困ってましたよね？」

「ええ、確かに今は投手が不足してるけど…」

「それじゃあ赤城中の沢村っていうピッチャーって知ってますか？」

「えっ？」

「いいムービングボールを投げてましたよ。肩の関節が柔らかく野球は初心者ってところですがピンチでのピッチング、ちょっとうざいくらいの掛け声。変化球型のピッチャーだと思いますが最後の一球。美帆以上にスピンがかかって伸び上がりましたからね。あいつは育て方次第で怪物になりますよ。」

俺たちが3回戦を勝ち進んだ後次の相手になる中学の試合を見てたのだが
俺は全く気付かなかったのだが美帆が沢村をみて
赤城中に化け物がいる
と言っていた。どうやらビデオで見直すとチョコマカ動く多分天然物のムービング使い。
俺たちと当たっていたらどうなるか分からなかった。
「……まぁ、美帆が気づいたことなんですけど。」
「美帆っていうのは前田美帆さんのことよね。」
「はい。あいつ選手の目利きはチーム一でしたから。」
そこが俺が天才とあいつを天才と言える場所だった
選手に関しては過小評価も過大評価もしない
ただ的確に才能を見抜く。
「……その必要はないわ。沢村栄純くんは青道高校に入学することが決まりました。」
「……あいつ本当見る目あるなぁ。」
青道が注目する選手を見抜くとかやっぱお前は天才だよ
だからこそもったいなかった
美帆を敵に回したくない

的確にチームを見抜き失点しても明るく振る舞うエース
そんな姿に俺たちの心は一つだった
美帆を全国の舞台へ
努力を怠らず基礎練もしっかり行いプレーでは俺たちを頼って打たせるピッチングをしていた
そんな選手と一緒にプレーできたのは本当に嬉しい事だった
エースの大切さは俺は分かっている
「とりあえず冬場のトレーニングを見て怪我しない体作りができてるか知りたいですね。俺たちのチームでも冬場の練習はかなり重要視してたので。それと学校のカリキュラムや授業も見ておきたいです。」
「……えっ?授業ですか?」
「はい。もし、俺は自分でもいうのはなんですがユーティリティープレイヤーを武器に野球をしている分、練習量や怪我をする可能性は他の人より多いんですよ。それに俺は美帆をみてきましたから。」
日頃の態度は正直プレーに大きくかかわりがある
そのことを認めさせてくれたのは美帆だった
「……あいつには見習う点がよくありましたから。」

シンプルに俺は美帆ほどエースという言葉ふさわしい選手を見たことがない
あいつは俺たちにとっての誇りであり、目指すべき選手だ
「……ええ。分かったわ。じゃあ授業見学の案内も出しておくわ。」
「はい。お願いします。後青道行きの件は前向きに考えさせてもらいます。」
「ええ。そういえば一人の野球人として聞きたいのだけれど。前田さんの進学先についてしらないかしら？」
するとずっと聞きたかったのだろう高島さんが少し前のめりで聞いてくる
「……多分すぐにわかることになると思いますよ。」
と少しだけ俺は笑う。そして今度の週末を楽しみにするのであった。

青道へ行く仲間

「え～青道から声掛かったの？」
　帝東と青道戦を見るために俺と美帆は神宮球場にきていた
「あぁ、昨日な。」
「ちょっとなんで言ってくれなかったの？」
「お前昨日言おうと思ったら夜間バスで爆睡してただろうが。」
　話しながら試合二時間前にくるとすでにチケット売り場では長蛇の列が並んでいた。チケットを買って席を確保してるするとほとんど満席になっている席を見て
「うわぁ。さすが強豪校同士人はいってるな。」
「うん。でも青道の秋の大会ってどうなの？」
「今年も同じ投手力不足って感じ。全試合コールド決めてるものの失点も多いな。」
「…へぇ～。」
「……でもエラーの数がかなり少ない。特に二遊間のコンビプレーはアライバを思い出すな。」
　本当に守備は硬い。青道ベンチもそこまで悪い雰囲気じゃなさそうだしな。

「……そういやお前が言ってた沢村ってピッチャー青道入りするらしいぞ。」
「……えっ？本当。」
「あぁ、決め手はやっぱり最後のあの一球だったらしい。綺麗なスピンをかけたストレート。あんなもん初見で打てるわけないだろうが。」
あんな伸びがあるボールなんて俺も見たことがなかった
長野の今年廃校になる赤城中の沢村
俺たちはその試合で名前を覚えるほどのインパクトを持っていた
「そういや。そっちは受験勉強捗ってるのか？」
「もちろん。ってかそうしなきゃ帝東戦なんかみにこないわよ。」
「……さすが学年次席ってとこか。」
俺はただ苦笑してしまう
「……それでどうするの？」
「まぁ、俺は練習が良ければ青道にするつもり。」
「……それ本当？」
「あぁせっかくの第一志望校なのに。逃すはずがないだろ。」
俺はあの時から青道野球について色々調べてきたんだ
「ってかもう他の高校には断りの電話入れたし。」

「……もう何も言わないわよ。」
　呆れたように俺を見る美帆
「それにやっぱり結構有名どころの選手も来てるぞ。」
　俺は青道側に座っている選手を指差して
「松方シニアの東条と金丸、三島シニアの高津。南西中学の金田。帝東にも花北シニアの向井とかな。」
　と俺は美帆の隣を指差して
「陽光中学の小湊だろ。」
「えっ？」
　俺が指差す先に赤髪の髪で目が隠れている特徴的な目
　中学二年で遠征で戦った小湊春市がいた
「中学打率６割越え。出塁率も８割を超える天才バッター。軟式で全国大会に出たことはないが木製バット使っているせいか一部のマニアで有名なんだよ。」
「そうなんだ。」
「お前本当他人には興味ないな。」
　息を吐き俺はため息をつく
「えっと。」

すると小湊が俺たちを見て少し戸惑ったようにしている。
「あぁ、悪い。自己紹介が遅れた。大門中学の砂田健斗。こっちは同じく大門中の前田美帆だ。」
「……えっ？」
すると驚いたようにこっちを見る小湊。
「それって今年の全国優勝校の。」
「あれ？知ってたんだ。」
「お前、結構今俺たち有名なんだぞ。お前が推薦受けないって聞いて先生も大混乱してるんだから。」
俺たちの１０人で全国制覇したなんて初の快挙だ
「えっと、もしかして砂田くんも青道に？」
「あぁ。その予定だな。後こいつもな。」
「えっ？」
「私はマネージャーとしてだけどね。」
すると苦笑する美帆に俺は少しだけ息を吐いてしまう
「こいつ、硬式だったら１３０ｋｍ投げるのに両親の願いで野球は軟式で終えるらしい。」

「えっ？１３０ｋｍ。」
「あぁ、しかもスライダーとスクリューを覚えるしコントロールはいいし、俺硬式結構苦労してるのになぁ。未だ少し指が引っかかる感じがなれないし。」
「でも、健斗は私の球簡単にセンター前に弾くじゃない。」
「……お前の球どんだけヒットにするの難しいと思ってるんだよ。」
「……あはは。」
　なんか突っ込みどころが多いって顔されているけど
「でも、本当美帆が甲子園予選に投げられたのならエース問題は解決なのにな。小湊は対戦した時は３―１だったよな。」
「……覚えてたんだ。」
「唯一こいつがホームラン打たれた奴だからな。しかも１打席を犠牲にしてまで。」
　小湊は誘いうちが得意なバッターだった。１打席目をセカンドゴロに打ち取った後２打席目アウトロー難しいコースを攻め三振。これでアウトローを苦手だと思った３打席目２―２と追い込んでからの５球目完全に流し打ちでライトスタンドへ運ばれた
「……もしかしてあの時のバッターなの？」
「あぁ。お前くやしくてあの後グラウンド５０周してたしな。覚えてたと思ったけど」
「……忘れないわよ。」

すると美帆は思いっ切り小湊を睨む。
「忘れるわけないじゃない。私のベストボールを運ばれたのよ。」
「……まぁ、あの時以来だもんなお前。」
変化球を磨きはじめたのは
「……悪いな。こいつもピッチャーなんだ。負けん気が強くてさ。」
「……あぁ。うん気にしないで。」
「んで、そういう小湊も青道にはいるのか?」
「うん。兄貴もここで野球をやっているから。」
すると思い出す。青道不動の二番バッターであり守備の名手小湊亮介
「……なるほど、バッティングセンスも守備も兄貴譲りか。」
俺は苦笑してしまう
「整列」
すると小湊と話している隙に試合開始時刻まで来たらしい。
さてお手並み拝見といきますか
「……まじかよ。」
俺は青道高校対帝東の試合を見て息を呑む
試合は予想通り乱打戦になったのだが

9―3
青道の攻撃型野球が止まらなかった
隙目ない攻撃型打線
全ては初回の攻撃で決まったのであろう
一番倉持が出塁し盗塁を決め
二番小湊が粘って四球
三番伊佐敷がセカンドへのボテボテの進塁打でランナーを進め
四番結城のフェンス直撃の2点タイムリーツーベース
五番増子もライト前ヒットで出塁し
六番御幸のレフトへのスリーランホームラン
ここで相手のエースを引きずり下ろした
その後も点数を稼ぎ青道高校が勝利した
「……すごいね。」
「私もあの打線相手にどう抑えたらいいのか分からないんだけど。」
さすがに美帆も驚いているのかグラウンドを見て黙り込んでしまう
「あぁ。さすがにこんなワンサイドゲームになるとは思っても見なかったけど……それよりも俺が驚いたのは投手陣の酷さだよ。」

「……」
「あのピッチャーかなりピンチに弱いよな。丹羽っていう人。」
　俺はただ冷静に分析する
「それに中継ぎの川上って人も少し甘いコースが多い。ボール2、3個ずれてるだろ。打者の打ち損じで助かってるけど。」
　サイドスローのピッチャーはボールが甘い
　おお振りしてくれてるから助かっているもののコンパクトにスイングされたらすぐ打たれるだろう
「……それに守備も私たちのチームからしたら少し物足りないよね。」
「えっ？」
　小湊は驚くが
「あぁ、エラーにはなってないが細かな送球ミス。中継の縺れもあったしカバーの入り方は完全にうちの方が上だ。唯一優っているのはキャッチャーと二遊間ぐらいじゃないのか？」
「うん。それに一回のバントの処理私たちセカンドで刺してたよね。」
「サードのスタートが遅れたからな。このようじゃ多分青道は準決勝止まりだろう。次は市大だろ。今年の市大は打線のチームだから完全喰われるな。」

冷静に分析すると問題点はいくつも浮かんでくる
「……やっぱり投手不足に悩まれることになりそうだな。来年は。」
「守備も甲子園に行くチームだったらもう少し硬い方がいいよね。特にライトとレフトは。」
「……すごいね二人とも。」
すると小湊は俺たちを見てそういう
「ん？これくらい普通だろ。俺と美帆は守り勝つ野球をしてきたからな。」
「ううん。そうじゃなくて。本気で甲子園のこと考えているんだって思って。」
「……まぁ、俺は純粋にどこにも負けたくないってだけだし。」
俺は苦笑する
「それに俺はこいつを甲子園に連れて行くからな。」
美帆の頭を軽く叩く
「……絶対後悔させたくねーんだよ。こいつが選手を諦めてマネージャーの道を選んだのも後悔だけはさせたくねぇ。最低でも甲子園出場、いや甲子園優勝を本気で狙いたい。」
俺は両親の事を考えてマネージャーの道を選んだことは未だに納得できない。
でもそれならば俺が納得する理由を出したいのだ

甲子園優勝という最高の結果を美帆にプレゼントしたい
そのためだったらなんでもしてやる
「……本当バカね。」
「うっせ。正直いうと俺だってまだお前と野球がしたかったんだよ。同じチームで日本一を目指してな。」
でもそれができないなら同じ景色を最高の舞台で
「まぁ、まずは一年でスタメンになれるように冬場振り込まないとな。美帆トレーニング付き合ってくれないか？」
「もちろんいいわよ。」
「あの。それ僕も参加していいかな？」
すると小湊がそんなことを言い出す
「……僕も負けたくない人がいるから。」
すると小湊は目をギラつかせる
「……もちろんいいけど、俺長野だぞ家。」
「大丈夫。ぼくがそっちに行くから。ぼくも冬休みに僕も振り込もうと思ってたから。」
「……ううん。それなら私たちが行った方がいいわ。私たちの地区は冬休み中は雪が多いから。」

「お、おい。美帆」
「……いい機会じゃないかな?二人だけでできるメニューなんて限られてるじゃない。」
「……まぁそうだけどさ。」
「それに私が小湊くんともう一度勝負したいの。」
　すると俺はこの時点であぁ止まらないなって判断する
「……それなら。ちょっと待ってろ。東条と金丸って奴も誘ってみるわ。硬式経験者いた方が守備面はいた方がいいだろ。」
「うん。そうね。」
「あはは。なんか大掛かりになってきたね。」
「ちょっと行ってくるから頼む。」
　と俺は全速力でまだ席に残っている金丸と東条を目指して走っていった。
　高島さんにまた謝罪の電話と青道に行くという結果をもって

日本一のピッチャー

青道行きが決まってから早い事で四ヶ月
「ほら、美帆ちゃんと高島さんが待ってるわよ。」
「……うっせ。分かってるよ。」
俺は笑い急いで靴を履く
野球道具と最低限の道具を持って俺は荷物をかつぐ
そして俺は仏壇に手を合わせる
「……んじゃ行ってくるわ。親父」
そして俺は席を立つ
「んじゃ行ってくるわ。」
「えぇ。頑張ってきなさい。美帆ちゃんを甲子園へ連れて行くのよ。」
「……おう。」
「あんたのことは全部美帆ちゃんに任せてあるから、後正月には一度帰ってきなさいよ。」
「何度も聞いたって。」

と母さんの言葉に苦笑してしまう

「それに今度会うときは甲子園の切符を掴んで勝ってくるさ。そんじゃあな。」

俺は住み慣れた家の玄関を潜る。今日は青道高校の寮への入寮日。

そして美帆が東京で一人暮らしを始める日でもある。

「……来たわね。」

俺はタクシーから降り長野駅に着くとそこにはすでに多くの人集まりができていた

「遅い!!」

美帆が少し怒ったようにしているがまだ集合時間１５分前だぞ

「わりわり、そんでなんの集まりだ。」

「えっと沢村くんの同級生が見送りに来たんだって。」

「……へぇ～。スゲェなあいつ。俺の部活の後輩全て卒業式に労いの言葉書かれただけだったぞ。」

「嘘つき。」

「……何むくれてるんだよ。お前。」

「別に～。」

と俺はため息をついてしまう。本当乙女心って難しいよな。

「そんで、お前どうするんだよ。料理。」

「うっ！」
「お前の料理スキル最低だし姫路さん並みにひどいんだから。」
「だれが王水肉じゃがを作るのよ。」
「お前が作った肉じゃが食ったら俺四時間ぐらい気失ってたらしいじゃねーか。」
「うっさいわよ。結局青道の寮で野球部として食べることになったのよ。」
「……まぁいいんじゃないか？栄養士さんの監視のもと健康のいい食事ができるらしいし。ちゃんと野菜も取れるからな。」
　よく自炊することになると食生活が悪くなるって聞いてるから少し一安心だ
「……後悪いけど朝の清掃少しだけ手伝ってくれないか？さすがに先輩に手伝ってもらうわけにはいかないだろうし。朝の自主練や勉強も付き合ってほしいんだけど。」
「……でも青道って練習量は多いんでしょ？そんな暇あるの？」
「青道に行っても大門の頃とやることは同じだろ。勉強の時間は少なく効率的にだけど他人への気遣いは忘れず家の手伝いは怠らず。食事や睡眠で健康面を作る。まずは日々の態度、姿勢をアピールしないとあんな青道の野手にアピールの暇さえもらえないからな。」
「……なるほどね。」
　するといきなり高島さんが納得するようにしている

「高島さん聞いてたんですか？」
「えぇ。最初から。どうやら、本当に君をスカウトしたのは間違ってなかったようね。」
　俺は少し苦い顔をしてしまう
「それはプレーを見てから言ってください。」
「でも砂田くん前会った時よりも身長伸びなかった？」
「はい。５ｃｍ伸びて１８３ｃｍになりました。体重も８０ｋｇ代に載せましたし。」
「本当男子はいいよね。軟式の時は転がせって指示があったからシングルしか打てなかったのに最近じゃ私の球を１００は飛ばすでしょ？」
「……まぁ、それは真ん中でフリー打撃してるだけだろ？俺の持ち味は足と守備なんだからそこからアピールしていかないと。なるべく低めの打球を確実にセンターへ返すのが理想だろ。それと追い込まれてからのバッティングもだし。」
「あなた、本当に高校生なの？」
　高島さんの言葉に苦笑してしまう
「でも結果が全てなんで。口だけじゃなんとでも言えるんですよ。目の前の試合を一つずつ勝つこと。それが一番大切ですから。それに俺名目上はまだ中学生ですよ。」
「……責任感が強いんですよ。昔から。」
　美帆が笑う

「だから一年生の秋から監督の指名でキャプテンをしてたんですよ。日々の態度もよく野球に関しての向上心もありましたから。」
「…そういうお前だって日々の態度からエースを掴み取っただろ。負けん気の強さ、それと女性であることのディスアドバンテージを見事プレーで払拭したんだし。」
「好きなことについては妥協したくなかったのよ。」
「俺はお前に負けたくなかっただけなんだけどな。」
今でもこいつだけには負けたくねぇ。努力も態度も野球も
人知れず天才で野球センスがずば抜けており
俺が初めて負けを認めたから
小学校のころは俺はエースだった。
早いストレートで押していきチェンジアップで三振をとるそんな投手だった
しかし中学にはいり美帆がピッチャーで少しずつだが活躍するようになった
早いストレートも、大きく曲がる変化球もない
でも誰よりも走り誰よりも投げ誰よりも努力をしていたことを俺は知っていた
だから俺も必死に食らいついた
今まではエースとして。ピッチャーとして
こいつに劣ると気づいた俺は野手として美帆を支えたいと思った

その後はノックをぶっ倒れるまでやり、血豆が潰れるまでバットを振りそれでいて美帆の練習に付き合った

お互いに幼馴染で、頼れる仲間であり、ライバルであることが俺たちが強くなった理由だった

「本当美帆が男だったらよかったのに。」

つい本音が漏れてしまう

「……砂田くん。」

「こいつと一緒に甲子園でプレーしたかったんです。こいつの後ろでずっと守っていたかった。」

そう思える選手だった。頼りになり俺の片腕として支えてくれたのは美帆だった

「……こいつは俺にとっての目標であり、目指すべき選手像なんですよ。」

こいつはエースとして一人の野球人として

「……すいません。ちょっと暑くなっちゃいました。」

「本当よ。こっちが恥ずかしいじゃない。」

「……うっさい。俺だって恥ずかしいんだよ。」

さっきから沢村たちだってこっち見てるし

「でも美帆は俺にとっての日本一のピッチャーだよ。」

守りたいと思わせるようなピッチング
俺が一番魅せられた選手だった。
「日本一の投手。」
隣から沢村がそう呟く
こいつもピッチャーでありそこを目指しているんだろう
「……本当バカ。」
「バカでいいよ。ほら泣くなって。」
「……」
と泣き出す美帆に俺は軽く頭を撫でる
「……あの、このタイミングで悪いんだけどもうそろそろ電車が来るわ。」
「……はい。」
「お前本当昔から泣き虫な性格変わんねぇな。」
「……仕方ないでしょ。」
「そだな。」
俺だってこいつに言われたら結構くるもんがある
そして駅の構内に入ると電車が来たところだった
「あ～あ。じゃあ行くか。久しぶりに春市と信二と秀明に会えるしな。」

「あれ？松方シニアの二人と知り合いなの？」
「はい。一応帝東との試合を見た後に冬休みを使って合同練習することになったんですよ。あの時見学断ったのはそう言った理由だったんですよ。」
「……」
かなり驚いている高島さん。でもそれくらいしないと俺たちは一年からレギュラーになれない。
あの打線を考えると俺が入れるポジションはライトとレフトの二つ
「……俺は本気で一年の夏からレギュラー狙ってますから。」
先輩後輩関係なく背番号を取りに行く。
それが俺ができる最大のパフォーマンスだからだ

監督と先輩たち

「ここが青道高校よ。」
「……すげぇ。」
　俺が青道高校について発言した言葉がそれだった
「……室内練習場完備にバッティングマシンや寮もついているって聞いてたからかなりの広さだと思ってたけど。想像以上だな。」
「えぇ。でもしっかりパンフレットには書いてあったと思うけど。」
「……美帆に貸してたんですよ。」
「あぁ、なるほど。」
　俺は少しだけ見てまわる。室内練習場にウエイトルームなど多くのトレーニング施設が充実している
「すいません。寮に案内してもらってもいいですか？」
「……えっ？」
「自分で案内頼んでおいて悪いんですけど……早く体を動かしたいんですよ。長野じゃまだ雪が残っててノックも雪上ノックしかして来ませんでしたから。」

俺は大規模な施設を見てすぐに体を動かしたいと思ってしまった。
「……えぇ。わかったわ。君の部屋は２０７号室よ。」
「うす。」
と俺は寮へ駆け足気味に向かう
……やべぇ。超楽しみ。
俺は少し笑ってしまう。
俺たちは全国大会出場したとはいえグランドにはサッカー部と陸上部と場所が割り当てられたせいでバッティング練習はいつもティーバッティングとうちのバッティングセンターのみとなっていた。
どんな練習するんだろう。
あんだけの攻撃型チームの打撃練習が気になっていた
そして階段を急いで上がると２０７という文字が見える。
「ここか。」
俺は一度息を吐きノックを二回する
するとドアが開きメガネをかけた人がいた。
おいおい、マジかよ。
俺は少しだけたじろいでしまう

俺はその人を帝東戦を見て知っていた
御幸一也かよ
思わず苦笑してしまう
「えっと、今日からお世話になる。砂田健斗です。」
「あぁ。話は聞いてる入れよ。」
俺は頷く。部屋に入ると2人掛けベッド二つと机が3つそして小さな家具が数点おいてある。そしてもう一人のルームメイトらしき人がいた。
「えっと、俺は御幸一也。ポジションはキャッチャーをやってる。それでこっちは宮内先輩。俺と同じくキャッチャーをやっている。」
「ふす。よろしく。」
「はい。よろしくお願いします。」
と手を握ると肉刺だらけで硬くなった手だとすぐに分かる。
やべぇ。この人もかなりの実力者だ。
つい笑みがこぼれてしまう
「…えっと。それでなんだけどとりあえず寮のルールはパンフレットにまとめてあるからそれ読んどいてくれ。」
「はい。分かりました。」

「まぁ、他は説明するより慣れた方が早いからな。分からないことがあったら俺に聞いてきてくれ。」
「……なら。素振りできる最適な場所って分かりますか？」
「……は？」
「いや。少し施設見てたら体動かしたくなってしまって。」
「それなら俺も今から素振りをするつもりだが。一緒に来るか？」
「はい。お願いします。」
俺は頷く。俺は少ない荷物の中からジャージに着替え家から持ってきたマスコットバットを持ち出す。
そして宮内先輩の後ろをついていくと室内練習場の少し奥に行った先に
素振りを行なっている明日からのチームメイトがいた。
「……よう宮内。お前も素振りをしにきたのか？」
「あぁ。いつまでも御幸の奴にスタメンの座を取られてばかりじゃいられないからな。」
俺はその面子を見て
「アハハ。」
笑うしかなかった。
「あれ？宮内その子誰？」

「ルームメイトの砂田だ。」
「……へぇ～その子が？」
なんでこんなところに集まってるんだよ。
「ほう。」
すると一人の体格のいいこの学校にいる人なら誰もが知っている選手
「キャプテンの結城哲也だ。よろしく。」
と手を出される
宮内先輩に案内された場所は三年生がいつも素振りをしている場所かよ。
いきなりのエンカウントに少し驚いてしまうが少したって笑いに変わってしまった
面白すぎるだろ青道高校
「……大門中出身砂田健斗です。よろしくお願いします。」
俺は出された手を握り返す。
すると握った瞬間分かった
この人がどれだけ努力してきたのかを
かなり固い手は毎日何百回もの素振りをかかさずに行なってきた証拠だった。
「……すげぇ。」
声が漏れてしまう

……すげぇよ青道。
ここならもっと俺は上手くなれる
施設、環境、人材
やばい。
「早く野球がしてぇ。」
すると手を握っていた先輩が笑う。どうやら俺は試されていたらしい。
「すいません。素振りしたいんで手を離してもらっていいですか？」
「あぁ。でも冬休み中かなり振り込んできたな？」
「一応、俺は硬式は初めてなんで。でも一応家が室内バッティングセンターなんでボールを硬式に変えて打ち込みましたね。後はイメージトレーニングしながら素振りをしたらかなりはかどりました。」
「そういや、日本選抜チームに選ばれたんだろ？どうだった？」
「はい。かなり凄かったです。軟式とは思えないほどの早い球１３７ｋｍって表示されてましたが体感速度がもっとはやかったり。ボテボテのピッチャーゴロを内野安打にしてしまう選手とかいました。正直でもそこまで肩が強い選手はいなかったのが助かりましたね。でもかなりのいい刺激になりました。」
俺は疼いてしまう

息を吐き想像する。
まずは東条の左バッターから逃げていくシンカーを逆らわずに打ち返す。
一度振るとイメージを崩さずに次のピッチャーへ切り替える
成宮さんなどの西東京のエースピッチャーに中学に対戦したピッチャー
海外遠征に出かけた時に対戦した世界選抜の選手など
どのように打砕くのか明確に
そして息を吐く約５０人ほどのイメージトレーニングを終え最後の一人
……いつも真剣勝負をしてくれた美帆を思い浮かべ一番あいつのウイニングショットのチェンジアップを思い浮かべる
そしてアウトローに逆らわず流し打ちのイメージでバットを振り抜く
「ふぅ～。」
イメージトレーニングが終わり息を吐くと
三年生と見知らぬサングラスを掛けた男性が高島さんと一緒に俺の方を見ていた。
「……あれ？」
俺なんかやらかした？
そんなことを考えていると
「……凄い集中力だな。」

サングラスを掛けた人が俺に向かっていう
「入寮日に素振りをする奴なんか六年監督をやってきたが貴様が初めてだ。」
「……」
俺はその一言で全て分かってしまう。この人が青道野球部監督の片岡鉄心だと。
「……大門中出身の砂田健斗です。」
バットを置き頭を下げる。
「素振りは毎日やってないと少し落ち着かないので。」
「手を出してみろ。」
俺は言われたとうりに手をだす
するとしばらく触った後
「……なるほどな。本当に毎日振っている手だな。」
「こんなことで嘘ついたって意味ないですから。」
「砂田、明日の体力測定終了後一軍の練習へ合流しろ。」
……は?
一瞬固まってしまう
「……ちょっと片岡監督さすがにそれは。」
もう一人の男性から声がする。それもそのはず。

テストもなしに俺は一軍行きを言い渡されたのだから

「結城から見て砂田はどう思う?」

「……正直一年とは思えないほどバットを振り込んでいます。正直レギュラー争いに加われば。俺たちにとっても刺激になるかと。」

「……結城!?」

「……砂田希望ポジションはあるか?」

「キャッチャーとピッチャー以外はどこでも守れます。」

「「……」」

すると全員が凍りつく。

「中学のころは二遊間とセンターを基本に守っていましたが、公式戦では全ポジションでの出場した経歴があります。海外遠征時はファーストとサードを守っていたので実力はあるかと。」

高島さんがメモ帳を開き読み上げる。でもキャッチャーなんて一年の秋に1試合だけでただけだぞ

「ただピッチャーとキャッチャーはもう二年近くやってないので一軍レベルに届いてないと思います。でもそのほかのポジションでは自分の全力を出すことができます。」

「……マジかよ。」

すると先輩の一人が声を上げる
「……分かった。それで希望ポジションは。」
少し考える守れるポジションではなく希望を聞いてるってことがわかった。
それなら
「それなら外野手を希望します。」
去年帝東戦で見た守備の弱点。
そこに俺がいればと何度も思ったことはない。
中継プレイの乱れを見ると俺がこのチームでできることは外野強化だ。
「分かった。それと宮内、砂田にサインを関東大会の始まるまでに教えてやれ。」
「は、はい。」
「……砂田。」
「はい。」
「……期待してるぞ。」
すると片岡監督は去っていく。
無言の三年生とただ少しの間呆然とする俺を残して

起爆剤

「……ふん。」
といいながらボールを投げてくる宮内先輩に俺は両手でとる。
「ナイスボールです宮内先輩。」
今は練習開始２０分前だが部員がちらほら集まってきていた。
美帆はマネージャーで集まるらしく俺のアップをした後に去っていった
しかし宮内先輩は俺がアップしている途中に朝練に加えてほしいと言われたのでキャッチボールをしているのだが
……この人が控えってすげぇな
投げる球がどんな距離でも胸元に収まる。
肩もそこそこ強いし強豪校でも並大抵のところじゃスタメン取れるぞ。
少しずつ離れていって今は７０ｍくらい離れてるがお互いにまだ暴投は０
……緊張感のあるキャッチボールになっていた
「……あれ？宮内と砂田じゃないか？」
「あっおはようございます。伊佐敷先輩。」

「あぁ。宮内ずりーぞ。俺も混ぜろや!!」
「……」
この人球高いんだよなぁと内心思いながら言い争っているのを見る
なんか思ってたよりも上下関係が楽でいいな
そう感じてしまう
なんかもっと堅苦しいイメージがあったんだけどな
「しかしいい球投げるな。砂田。」
「いや。キャッチボールは基本中の基本ですから。大門中はキャッチボール一度誰かがミスするとペナルティーで１００ｍダッシュをその場で全員やらされましたから。」
「……それ本当か?」
「はい。キャッチボールは守備の基本だからってことで平日は一時間。休日は一時間半はとってましたから。」
どんな距離でも胸元に投げ込む
それが俺たちのポリシーであり鉄の掟だった
まぁ、俺も硬式慣れたきたばっかりで握り変えが少し遅いけどな
「……それに俺たちには頼れるエースがいたんで一点とれば守りきることができたんですよ。」

「あぁ、あの女性ピッチャーか。」
「知っているんですか？」
「知ってるも何もコーナーに投げるピッチングに緩急をつけた。変化球。ピッチャーのお手本みたいな投手って言われてたからな。」
「それで同じチームにいたお前はどう見るんだ？」
「……そうですね。一言で言うなら守りやすいっていった方がいいですかね。コーナーを突き無駄な四球をださず、守っている正面にボールが集まってくるんですよ。それにランナーを出しても図太く投げますしクイックも牽制もうまかったです。中学で打たれたホームランはたったの一本ですし。」
　しかも春市に打たれた一本だけ
「それにエースとしての自覚がなによりありましたから。礼儀正しく文武両道。野球をやっているからって言葉が大嫌いなやつですからね。俺もかなりの影響を受けてます。」
　今でも野球をしてるから、夜遅くどんだけ疲れていても宿題を忘れることは一度もないし成績はいつも上位を保っている
「結果を求めるなら日々の生活を見直せってなんども口すっぱく言われましたよ。……でもその姿は間違いなくエースでした。全世界選手権でエースナンバーをつけるくら

いでしたから。」
　世界大会は先発をやりたかっただろうがチーム事情を考え自分から中継ぎに回るなど本当に頭の上がらないやつだった
「正直言うなら男子だったら青道でも即戦力ですよ。俺と一緒に自主練してましたがあいつシンカーと縦スラとスライダー覚えましたし。急速も平均１３０ｋｍは安定して出せるようになりましたから。」
「……おい。それシャレになってねえぞ。」
「……それに変化量はそこまでないんですけどキレがすごくて、追い込まれたら当てるだけでも精一杯ですよ。あいつ今年入学する一年３人相手に３打席勝負して７奪三振しましたから。」
　冬の合同練習で春市と信二と秀明が打席にたったのだが
　信二と秀明を３打席３三振に抑え込んだのだ
　あの時の球の勢いは今でも忘れることはできない
　過去最高のピッチングだった
「……怪物だな。」
「ただ女子で今日からうちのマネージャーですけどね。」
「「は？」」

「……はって言いたいのは俺の方ですよ。今でさえまだもったいないって思っているんですから。」
それでもあいつが決めた道ですから仕方ないんですけどね。っと付け加える
「すいません。宮内先輩もう一旦区切りませんか。朝練１０分前なんで。」
「分かった。」
でもやっぱ外野手だったら今のところは多分大丈夫だな
後は実践で慣れれば内野も問題なく元の硬い守備に戻れるはずだ
硬式ボールの握りを確認すると違和感がなくなったが送球がまだ少しシュート回転気味なんだよな
今週の課題はもっと低めにいい送球をかな？自主練でスローイングとキャッチボールの練習と内野手との中継プレイの確認。宮内先輩からサインも覚えないと。
やること覚えることが多すぎる
「……やっぱ楽しいな野球。」
俺はただ笑う。それに今から始まる練習に期待を高めながら
「……先輩たちは別のグラウンド集合なのかよ。」
俺はため息を吐くと肩を軽く伸ばす
「あれ？砂田くん？」

後ろから声をかけられる。
「おう。久しぶり春市。」
「うん。冬休み以来だよね。」
「……あぁ。あの後どうだ？硬式には慣れたか？」
俺と春市に信二と秀明は冬休みに全部を使って合宿を行っていた。
「う～ん。やっぱり軟式と違って打球が速いのにはまだ苦戦してるかな？」
「俺は握り変えの速度がやっぱ落ちてるんだよな。まだ芝で硬式扱ってないから芝でも一度練習しておきたいし。でもバッティングは俺は硬式の方が手応えあるんだよな。」
「僕もバッティングには苦戦してないかな？後は軟式野球で見られなかったフォークとスプリットの対応はしたいけど…」
「同感。そういやお前ショートとセカンドどっち守るつもりなんだ？」
「セカンドにしようと思ってるけど砂田くんは？」
「俺は基本外野。足と肩を生かすには内野より外野の方がいいし。できるならセンターかライトがいいなって。」
「でも昨日金丸くんと東条くんにあったけどかなり振り込んできたみたいだった。」
「まぁ、あいつに3三振くらったのが相当悔しかったんだろ？あいつもまた小湊に2安打されてめっちゃ悔しがってたぞ。」

俺は東条から3打数3安打、美帆から3打数2安打だったけど

「そういえば汗かいてるけど……朝練してた？」

「あぁ、アップしてたしからな。これから体力測定だろ？それなら少しでもいい測定値に持っていけるようにしないと。……多分監督はこういったところを見てると思うし。」

「……なるほど。」

「春市もこれからやるか？今なら食堂の清掃券もついてるぞ？」

「……いらないよ!!」

と軽口を叩きながら

「お前も朝練と午後の素振り付き合え。お前ならもう理解してるだろ。ここでは結果だけが求められることを。そのためになるべくアドバンテージは多くとっておいた方がいい。」

「……まぁ、そうだね。うん。付き合うよ。」

「あぁ。後から連絡するわ。まぁ俺は昨日からもう監督にアピール済みだけど。」

「……そういうところはちゃっかりしてるよね。」

「まぁ、でも昨日はこの施設早く使いたくてちょっと素振りしてただけなんだけどな。」

「そういうところは砂田くんらしいよ。」

と軽口を言い合っている。
すると
「整列。」
と結城先輩の声で俺と小湊も整列する。
はっきりと聞こえる声は緊張感を出すには十分だった。
「「おはようございます!!」」
すると昨日見に来た片岡鉄心がいた。
「監督の片岡だ。これで入部希望者は全員か?」
「「はい。」」
「順番に自己紹介をしてもらおうか。」
「「はい」」
すると五十音順に始まる自己紹介に少し退屈に思う。
全部がテンプレートだと思う言葉に少し飽き飽きしてしまう
守備が得意とかそんなことはどうだっていい。
次と俺の番になると俺は息をすう
「大門中学校出身砂田健斗。希望ポジションは外野手。一年生の夏からスタメンを取りに行きますので先輩方は覚悟をお願いします。」

簡単で完結な挨拶に先輩から睨みつけられる。
生意気とかそんな声がかかるがそんなことは知らない。
でも俺は嘘もつかない
完全に宣戦布告をしたのだ。
「……アピールポイントは学校生活や日々の生活での態度です。以上。」
「ちょっと砂田くん。」
「……春市こういったのはインパクトが大事なんだよ。これで完全に先輩方も監督も名前を覚えてくれるだろ?」
「そうだけど、でも…」
「…悪いけどここに来た以上プレーや日頃の行いでアピールするしかないんだよ。そのことをわかってる先輩はあん中にも数人はいるぞ。」
監督なんか一瞬笑ったしな。
でも片岡監督が求めてるのは多分そういったことだ。
結城先輩もあぁ言った俺たちにとってもいい刺激になると
つまり俺の最初の役割は起爆剤だ
でも起爆剤程度で収まるわけがない
ダイナマイトになって周りを巻き込んでやる

「……まぁ宣戦布告だよ。先輩方には悪いけど本気で最初の夏からスタメンを奪いに行くからな。」
「……」
　その後遅れてくるバカが一人いたがそいつはほっとこう
「一年はＢグラウンドで体力測定二、三年はＡグラウンドでシートノックの後フリーバッティングだ。それと砂田は体力測定終了後二、三年と合流。以上だ。」
　するとグラウンドが騒めき始める
「……春市行くぞ。」
「えっ？ちょっと砂田くん。一体何をしたのさ。」
「……俺が素振りをしてたら監督に見られて一軍合流を言われた。以上。」
「……ちょっと意味がわからないんだけど。」
「……俺も正直なんで一軍に呼ばれたのかわからん。アップ行こうぜ。」
「あっうん。」
　と小湊と一緒に俺は少し急ぎ足で向かう。
　……そうして俺の高校野球は始まるのであった

地味

「……流石にやりづらいな。」
青道の青いヘルメットを付け軽くスイングしていると視線を感じる。
う～ん流石に言い過ぎたかな？
そんなことを少し考えてしまう
でも何もおかしいことは言ってないはずだ
自分は日本一になるために青道に来たんだ
俺は目をつぶる
……大きく息を吸いこみ
そして吐き出す
それを3回ほど繰り返す
「次砂田。」
監督から俺の名前を呼ばれる。今日はフリー当番の選手ではなくマシンが投げるボールだ
左バッターボックスに入ると足場を整え俺は最後に一回大きく深呼吸をし

「……お願いします。」
そして集中力を高める。守備位置は中間守備。今回はケースバッティングじゃないけど色々と考えて打ったほうがアピールにはなるか。それと昔のポイントを思い出しながら確実にボールを外野に運ぶことが目標だ。
そしてボールがマシンから放たれるとボールをギリギリまで引き寄せ
鋭く振り切る
カキィィィン
パシャン
そして鋭い当たりが人が誰も動く暇を与えずに一二塁間を抜けていく
これでいい。
俺は少しだけホッとするが集中力を切らさずに
…そして最初に一二塁間に次に9球センター返しに9球、その後に三遊間に9球少しずつポイントをずらしながら打ちそして最後3球はバントに使う
「ありがとうございました。」
一礼してバッターボックスをでる。
基本は早い打球を低弾道でヒットコースに飛ばすのが俺の強み
派手さはないがきっちりアピールできただろう

「……なんや普通のバッティングだったな。」
「あぁ。あれじゃスタメンレベルには届かないやろ。」
と笑っている先輩だが
「……ねぇ。砂田くんもしかして狙ったの？」
「うわぁ。」
急に出て来てびっくりしてしまう。そこにはピンク髪の先輩がいた。
「あれ？驚かせちゃった？」
「い、いや大丈夫です小湊先輩。」
と言いながらも内心本気でびっくりした
「……それで狙ったでしょ？ヒットコースを。」
「まぁ、狙ったっていうよりはマシンで打つときはいつもこうしてるっていうか。」
少しだけ笑ってしまう
「俺みたいなパワーのない選手はバットコントロールないと出塁するのが難しいですからなるべく鋭い打球とポイントの位置で打つようにしてるんです。はランナーが一塁にいると仮定して一二塁間への低い打球を9球。相手の嫌なセンター返しを9球最後はバッターボックスを一塁側によって逆らわず流す練習を9球ってところですかね。」
「それで最後にバントもできると三塁線上にバントを3回決めてアピールしたってこと

だよね。」
　あっこの先輩多分全部お見通しだと本能的に語ってしまう
「でも、一つ言えることは君のバッティング地味だね。」
　ぐさっと刺さる言葉だった
「まぁ、俺は塁に出てからが仕事なので地味だろうがどんなに泥臭い出塁でも塁にでたら自分の足が活かせますから。」
「……でも俺はそのスタイル嫌いじゃないよ。」
　するとそれじゃあねと言って去っていく小湊先輩に少し苦笑してしまう。
　多分あの人も俺と同じ投手を虐めるのが好きな人だと理解してしまったから
「砂田、この後はライトの守備につけ白州はレフトへ。」
「「はい。」」
「それと砂田後から背番号をとりに監督室まで来い。来週末の市大戦に先発させるからな。」
「はい。」
　するとざわざわと騒ぎ出すグラウンドだが、俺も理解が追いつかない
　いきなりスタメン？
　さすがに少しどういうわけか分からなくなる

しかもいきなりの市大戦
真中さんのボール
「……どんな球投げるんだろう?」
いきなり選抜ベスト8のピッチャーと対戦できるのか
そんな期待が入り混じる
……でもそれよりもまだスタメンは確約されたわけじゃない
それならまずは高望みはせずに自分のできることをきちんとするしかない。
もう俺は大門中ではない
青道高校野球部の一人なんだから

背番号

「……ご馳走様でした。」
一日が終わり夕食に入っているのはいいんだけど
一年思ってた以上に酷いな
色が細い奴が多く食べきれない人が多いし
体力作りを怠っていたのか練習についていけないやつも少なくない
プロテインを飲んでから俺は小湊の方を見る
「小湊先行ってるぞ。」
「……えっ？あぁうん。」
「それとゆっくりでもいいからよく噛んで食った方がいいぞ。無理やり飲み込んだら余計に腹膨れるから。」
「わ、分かった。」
俺が食べ終わり席を立つとすぐに視線が集まる
しかし一日目を終了したんだが
練習量に限ったら中学時代とほぼ変わらない

てか人数が少なかった中学の方が練習量に限ったら多いんだよな
よく考えたら体力作りだけでへばってるのはオフに走りこんでなかっただけだろ
日頃の行いや練習への姿勢って本当に大事なことだと思う
オフはかなり走りこんできたからな
怪我の防止のためにアにップ二時間ダウンに一時間体力作りも兼ねて走ってきたかいがあったってわけか。
「ご馳走様でした。」
すると美帆も食べ終わったのか食器を下げる
「練習付き合おうか？」
「いや。これから監督室に行くからいい。お前マネージャーの仕事は？」
「大丈夫。もう終わらせてあるから。」
「そっか。んじゃ俺監督に呼ばれてるから。」
「うん。じゃあまた明日ね。」
「あぁ、また明日な。」
そう言って軽く拳を合わせる
俺は食堂を出るとあることを思い出す
「……監督室ってどこだ？」

単純なことを忘れるのであった
「失礼します。」
探すこと5分やっとのことで監督室につくと
「……」
「……」
結城先輩と御幸先輩がなぜか監督室に同席していた。
うわぁ。これなんか絶対嫌な予感がする
それに何か重要のことか
気を入れ直すと俺は少し息を呑む
片岡監督の言葉を待っていると
「失礼します。背番号持って来ました。」
「……あぁ。ご苦労。」
すると背番号１９番が縫ってあるユニフォームが一着置かれてあった。
「ユニフォームだ。受け取れ。」
「…ありがとうございます。」
俺はその背番号を受け取る。
１００人以上いるこのチームでの背番号１９

それは選ばれなかった先輩の分まで戦うというわけだ
重たい
そのことを自覚する
やっぱり背番号を受け取るのにはどこのチームでも同じこと
少人数でも強豪校でも
その学校の代表になることを
覚悟はしてたが先輩を押しのけて背番号をもらうっていうのは正直プレーするよりもくるものがある
「さすがに砂田も重たいと感じるか？」
すると御幸先輩の言葉に頷く
「重たいですよ。一、二年もここで野球している人を差し置いてこのユニフォームをもらうのは。重たいです。今日のシートノックを見てればどれだけオフに鍛えてきたのかすぐに分かりました。帝東戦の時に見た記録にないエラーの数も少なかったし何よりも一年と態度が違いましたから。」
「……へぇ～。分かるのか？」
「流石に分かりますよ。一応これでもキャプテンマークを二年つけてましたから。」
チーム全体の雰囲気、一人一人の行動

それを中学の監督は重視してスタメンを決めてたし
「それに、俺だって刺激受けてますから。先輩方には。」
今日のノックでも掛け声や声援は明らかに劣っている
だからこそ次の試合ではまず結果を出したい
結果を出して俺が試合に出て間違ってなかったことを証明したい
「それにどんなペナルティーでも真剣に投げたあいつのことを笑いはしませんから。」
外野ノック一旦区切ったと思えば沢村が遠投をしていた。
投手をかけての大一番
それには失敗したもののそれでも
「遠投推定８６ｍは俺と確か降谷そして東条に次いで４位だったはず。……それもストレートではなくムービングボールですよね。……ぶっちゃけ遅刻とタメ口を使ったペナルティーでそういう結末になったのは仕方ないと思いますが。その姿をただ笑ってた一年よりかは見応えがあると思いました。」
「……お前、沢村の球質に気づいてたのか？」
「長野大会であいつらが一回勝てば俺たちと当たる予定だったんですけど、俺と美帆が沢村が投げた最後の一球。……あんなムービング初めてでしたよ。ボールが浮き上がって見えるのは。」

無意識にフォーシームそれも火の玉ストレートと言われる伸びたジャイロボールに俺も美帆も少しだけびびった

「まぁ、今頃言っても後の祭りなんですけどね。」

「……サウスポーのムービング使い。砂田ならどう攻略する?」

監督の言葉に少しだけ考えて

「バットをコンパクトに待って鋭いゴロを狙いますね。打席もギリギリ前に立って変化する前に叩くって感じだと思います。それで後は足やバントで揺さぶりますね。ムービングボールはコントロールするのが難しいってきくので投手の自滅を狙いスタミナを着実に奪っていくところでしょうか。」

「……今の沢村にもその攻略法は使うのか?」

「当然使います。一度負けたら終わりのトーナメントで少しでもやられる口があったら強豪でもあっさり潰れるので。」

「……なるほどな。」

結城先輩がうなづく。

「……合格じゃないですか?」

「……えっ?」

「あぁ、合格だ。」

全く意味のわからない言葉に俺は困惑してしまう
俺は困ったように御幸先輩を見るとニヤニヤして笑っている。
まぁいいや。俺は俺のやることをやるだけだし
「すいません。あと聞きたいことあるんですけど、市大のビデオって見られますか？素振りの後真中さんの球確認したいんで。」
「それなら一緒に見るか？俺もイメージしておきたい。」
「はい。お願いします。」
結城先輩の言葉に頷く
「後監督。盗塁のサインってないって本当ですか？」
「あぁ、各自自分が行けたら各自でスタートしていいが。」
「……」
「あまり無茶するなよ。真中はクイックも十分早いからな。」
「はい。」
「それと明日は実戦形式の練習とする。ピッチャーは丹波その後に川上、控えメンバーは守備につかせろ。」
「「はい。」」
「以上だ。」

俺は少しだけ息を吐く
美帆に残って貰えばよかったな

沢村

「えっ？スタメン。」
「あぁ。打順はわからんけど今度の市大戦に俺を使ってくれるらしい。背番号も昨日もらった。」
「……早すぎない？」
「うん。俺もそう思う。」
　食堂の清掃が終わり、俺と美帆が朝練を行うためにグラウンドに向かう
「まぁ、監督にとって何か意図があると思うし、俺もチャンスだからいいんだけどさ。昨日少しだけ寝不足。」
「さすがに緊張してるの？」
「いやようつべで真中さん以外の選手も見てたからな。二番手投手の三崎ってピッチャーも第二先発の天久さんも攻略口は少ない。その数少ないチャンスにどう切り込むかが課題だな。」
　真中さんも天久さんも立ち上がりが悪い。だからそこをどう狙い撃つかがキモになってくる

ということになると
スライダーかストレートか一本に絞った方がいいな。
「イメージはできてる。それをどう攻めるかが問題だな。」
「……クス。」
「なんだよ。」
「なんか楽しそうだね。健斗楽しそうだね。」
「当たり前だろ?あんなピッチャー早々いないからな。」
俺は真中さんの球を早く見てみたい
「まぁ、バッティングはすごい地味だけど。」
「失礼な。」
と軽口を言いながらグラウンド前に着くと
一人のユニフォームを着た奴が走っていた。
「あれ?昨日は誰もいなかったよな。」
「うん。でもこんな早くに誰が。」
俺は目を凝らしてみると
一定のペースで走っている沢村の姿がいた。
「……あいつ。」

俺は少しだけ笑ってしまう
昨日のことがあってまだ諦めてなかったのか
「……悪い。俺も走ってくる。」
「うん。いってらっしゃい。怪我だけ気をつけてね。」
「分かってるって。」
俺は沢村の方へ走る
そして並走し沢村の隣を走る。
「……なっ？」
「いいから走れ。話はその後だ。」
俺はただ走りこむ。沢村より少し早いペースで。
「負けてたまるか!!」
そういってペースを上げようとする沢村だが、俺は止める
「沢村。ピッチャーなら自分のペース保て。他人に影響されるのはやめろ。」
「……えっ？」
「遠投見てたけどいい球だったな。気持ちのこもった。」
すると沢村は悔しそうに顔を歪める。
「…お前は笑わないのか？」

「アホ。真剣にやってる奴のことを笑う方が失礼だ。それでだが、お前がやらかしたことについては理解してるか？」
「……でもあれは。」
「言い訳はするな。遅刻や監督にタメ口を使ったのはお前の責任だ。」
あえてここは厳しい言葉をかける
「いいか。ここは結果だけじゃない。日頃の態度も見られてるんだ。お前なんかまだグラウンドに立てるだけマシなんだ。俺だったらランニングすら禁止してたぞ。」
「……」
何も言い返してこない。自分でも理解してるんだろう。自分がやった行為の馬鹿さ加減について。
自覚をしてるだけマシだな。こいつ
「……その悔しさ、反省を生かせ。一旦日頃の態度から見直せ。お前はまだチャンスがあるんだ。そのチャンスがくるまで腐るんじゃねーぞ。沢村。」
「えっ？」
「機会をまってそれまでは体力作り。ゆっくりでもいいから食事は必ず3杯以上。機会がくるまでは下半身の強化と怪我の防止を兼ねて走りこめ。お前のその投手に対するこだわりは絶対監督にも伝わってる。だからいつか絶対にチャンスがくるはずだ。そ

れまでは力を蓄えろ。」
覚悟に関したら俺以上。俺と同じ地方出身の身だ。そのプレッシャーをどう使うかが試される。
「二軍で待ってるからな。」
俺は一気にペースを上げる。
……俺だって負けてはられないんだ。
こいつにも、自分にも。

意識

青道高校に入って一週間生活に慣れてきた。入学式が終わり学校の授業が始まったんだが

「はぁ。おい起きろ沢村。」

「グーガー。」

「……なんで俺はこいつの席の隣になってしまったんだろう。」

俺はもう入学して間もないのに学校では疲れが溜まっていた

「いつもすまんな。砂田。」

「いや。こいつも部員なんで。いつも授業の妨害してすいません。」

青道野球部の俺は文武両道を口にした以上日々の積み合わせをしてるのだが

「……沢村カードな。」

その声を入った途端こいつは一気に起き上がる

カードとはペナルティーの数で一個増えるたび昼食に食う白飯の量を一杯ずつ増やすということだ。

「おい。健斗ずりいぞ。」

「信二これで何杯目だ。」
「えっと今日は3つだ。」
「これで朝昼晩4杯ずつになったわけだが。お前な学校の授業おろそかにするのはやめろ。期末テストの補修や追試で練習時間潰れたらどうするんだよ。」
　俺はため息をつく
「なんか練習よりこいつの面倒見る方が疲れるわ。」
「砂田も大変なんだなぁ。」
「先生も同情しないでください。沢村お前次寝たらここの掃除一人でやってもらうからな。」
「……げぇ。」
「はぁ。」
　といいながらノートを二つ取っていく。
　俺も少し甘いよな。
　そんなことを考えながら授業を進んでいく
「でも、っよく砂田も見習い部員の面倒を見てるよな。お前一軍だろ。」
「……おい。見習い部員ってどういうことだ。」
「沢村。」

少し強い声で止める。こいつがしでかしたことはそれほどにも大きいことだから。
「くそ。」
「ほら、ノート。わからんとこあったら聞きに来い。わかる程度なら教えてやるから。」
「……」
でも実際口だけの奴よりかもこいつの方が今はマシである。
今の発言には正直俺もかなり切れそうになっていた
…一旦一年は痛い目を見た方がいいかもしれんな。
そんなことを考えながら俺はノートを書き進めた
「分かっているなお前ら。」
監督の言葉に耳を傾ける
「選抜を決める秋の大会、本戦となる夏。その二つに比べて決して高くはないだろう。だが今日の相手は秋の大会で敗れた市大三校だ。受けた屈辱は十倍にして返すぞ。」
「「はい!!」」
さすがに市大戦とあって士気が高い。これならよほどのことがない限りは大丈夫だろう
「結城いつもの奴いけ。」
「はい!!」

と円陣を組み右手を左胸に持ってくる
「俺達は誰だ？」
『王者青道!!』

「誰よりも汗を流したのは？」
『青道!!』
「誰よりも涙を流したのは？」
『青道!!』
「戦う準備はできているか？」
『おおおおおおおおおおお!!』
「我が校の誇りを胸に、狙うはただ一つ、全国制覇のみ!!」
そして
「行くぞォォォォ!!!!」
『おおおおおおおおおおおお!!』
それが青道の掛け声となって青道のグラウンドに木霊する。
俺は試合のことで集中したいのに
他人事になっている一年が目についた

「……」
「どうしたんや？」
「…前園先輩。」
「なんや集中しきれないみたいやが。」
　あのフリーバッティング以来少しずつ先輩から頼まれごとをしたり相談を受けるようになったんだけど
「……いや。少し一年の態度が気に入らないですよ。」
「……どういうことや？」
「ただこれが全国制覇を狙うチームなのかってことです。」
「……」
　一年が不甲斐なさすぎる
　いい加減甘えた考え方は卒業してほしい
「俺が今日バスに野球道具を運ぼうとした時に、ベンチ入りしてない先輩が俺たちにやらせてほしいって言われたんです。普通は後輩である俺たちの仕事なのに。」
「……」
「先輩たちの態度は確かに立派ですが……一年はなんだよ。俺以外呑気に先に集合場所に集まって軽口叩いて……いい加減自分がその試合で自分は何ができるのか気づいて

ほしいんですよ。もう俺たちは青道野球部員ってことに。」
　するとつい口を滑らせたことに気づく
「……すいません。ちょっと愚痴を吐いてしまいました。」
「いや。ええ。俺も少し考えが回らんかった。……しかし、お前そんなことまで考えとったんか？」
「……全国のてっぺんを一度経験すると全てが欲しくなっちゃうんですよ。同じ景色をもう一度見たいので。」
　全国の頂点に立ったあの時
　俺は自分がキャプテンでありながら信じられなかった
　何も考えられなくなりそして気づいた時にはチームメイトの笑顔
　もう一度日本一へ
　すると
「あれ？沢村？」
　俺は沢村がバスとは反対方向へ向かうのを見る
「……あいつ来ないのか？」
「あぁ、そうらしいぞ。」
　すると倉持先輩が代わりに答える

「こんな時にやらないとそっちにはいけませんからって言ってたぞ。全くプライドが高いのかただ目標にまっすぐなだけなのか。」
「……多分両方じゃないですかね。」
俺は少しだけ笑ってしまう。
なるほど
「……分かっている奴は分かっているんだな。」
「……ん？何がだ。」
「いや。あぁいうバカで前向きな姿勢だけは見習わないといけないなって思いまして。」

結果と実力

……まさかこんなにも早くここに立てるとは思わなかった

俺はベンチからグラウンドの全体を見回す

シートノックが終わり、試合開始まで5分を切っている

「……さすがに緊張してるのか？」

結城先輩にそう話しかけられる。

「はい。でもさすがに初スタメンが春季大会準決勝で対戦相手が今年の選抜出場校ですし緊張しない方が厳しいですって。」

さすがに緊張するなって方が無理がある

「でもこういう時に一本でると守備も気持ちよく入れますからね。できれば初回の先頭打席初球から狙っていきます。」

長打はいらないから確実にセンターへはじき返しておきたいところだな

「……力んではいなさそうだな。」

監督の言葉に頷く

「……大丈夫です。毎日振ったバットは裏切りませんから。本来のバッティングができ

れば真中さんも十分打てます。」
　てか打ち下さないといけない
「おいおい言うねぇ。スーパールーキー。」
　伊佐敷先輩が茶化すが
「でも打ち砕かないと全国制覇なんて夢のまた夢ですから。」
　俺の発言に全員が目を見張る
「まぁ、今の俺は生意気なことを言っているただのガキです。だからこそ今は結果と勝利。試合に対する姿勢。それを示さないと俺は一軍にいる意味はありませんから。言葉を示すには試合と日々の態度で語るしかない。大門中キャプテンなんて全国制覇したことだって過去の話です。そんなことにこだわって俺は先輩方の足手まといになる気はさらさらありません。」
　そう実際のところ追い詰められているのは俺の方だ。
　技術でも精神も今の所足りないことが多すぎる
　それでも遅れを取るつもりも足を引っ張る気もさらさらない
　俺には俺のできることをしてチームに貢献するしかないのだ
　このユニフォームをきれなかった先輩方やこの人たちに認められるために
「初球から狙っていきましょう倉持先輩。」

俺はネクストバッターサークルで声をかける
今日は先制点欲しいですよ。倉持先輩
この人が出塁すると先制点がほとんどの確率で入るんだよな。
だから出て欲しいところだけど
明らかに力んでいるんだよなぁ
先頭バッターとして塁に出るって気持ちが出過ぎてるな
多分内角へのスライダーを引っ掛けられる
そしてカウント2―2で迎えた5球目
真中さんのインコースのボール球のスライダーを引っ掛けられセカンドゴロに打ち取られる
それでワンアウトランナーなしになる
二番ライト砂田くん
とアナウンスがなる
結構切れてたな
打席に立たなくてもやっかいなスライダーだなと思う
……まぁ初見で打てる球ではないだろうし
それにまだ収まってないみたいだからな

スライダーは捨てて様子見のストレート一本狙い
ということになると絞り球はあそこか
「お願いします。」
俺はバットをわざと極端に短く持つ
……ふぅ
そして一気に集中力を高める。
誘いに乗ってくれたらラッキー程度
甘いコースは強く叩け
そしてピッチャーが振りかぶった瞬間バットをいつもの位置に持ち替え
初見の相手に様子見のアウトローのボール球
これ以上に狙いやすい球はないだろ
カキィィィン
ジャストミート振り抜いた瞬間俺は走る
一塁へと走りながら打球を見守るとレフト線に落ちるのを確認する。レフトがボールを追いかけるのを見て俺は二塁ベースへと向かう。この打球は俺にとったら三塁打になりそうなので一気に加速しセカンドベースまで突っ切る。
セカンドベース直前でサードコーチャーの坂井先輩を見ると大きく腕を回している。

もちろん二塁ベースを蹴り三塁ベースへと目指す。
スライディングで滑り込み俺は息を吐く
ウォォォとどでかい歓声に包まれ苦笑する
これが高校野球か
注目度の高さがよくわかる
「やっぱ。気持ちいいなこの歓声。」
もともと注目されるのは好きなので俺は笑ってしまう
左中間を狙ってもよかったがレフト線にスペースが空いてあったので狙い打ちしたのだ
流れを掴んだな
新人それも入学して一年に三塁打を打たれたんだ
さすがに真中さんも驚いているし
とりあえず先制点をどう取るかだな
俺はリードを一塁ランナー並みに取る
原則はサードランナーは牽制死を避けるべくあまりとらないのが定石だが
でもあえて大きくすることで俺はピッチャーに揺さぶりを掛けていた
さすがにこのリードには観客どころか味方のランナーコーチさえ驚いている

でも真中さんにとってはいやだろう
すると牽制が一度くる。それには頭から戻るけどまだ余裕がある
牽制は俺にとってはありがたいリードをこれ以上出せるかどうかのつなぎ目になる
そして分かる
この人からはもう半歩大きく出れると
そしてさっきよりも広くとるリードに球場内はさらにざわめく
常識はずれでも無謀とも言われたが
これは相手投手へのプレッシャー
俺の強気の走塁
そして案の定牽が来るとヘッドで普通に戻る
ね？気になるでしょ？
気になるよね？
でもやめないから。
また同じ感覚でリードを取るこれ以上まだ行けるけどそうしないと二次リード取れないしな
悪いけどとことんいじめるから
足の速さに限っては軟式硬式関係なく武器になる

……まぁ、キャッチャーから牽制来るかな
小湊先輩は左バッターだし二次は少しだけ小さめ
ピッチャーが振りかぶるのと同時に俺はリードを大きくでる
そして思惑通り外角に外しサードに牽制しようとしたが俺はすでにサードにも戻っていた
バレバレだよ。今足をとっさに外そうと足が投げる体制にはいってたからね
そしてサインを確認しもう一度大きなリードを取る
そして牽制が二回また続く
分かりやすいからすぐに戻れるけどね
そしてピッチャーは投げるとストレートが高く浮いてしまっていた
それを見逃さずに小湊先輩は捉え鋭い打球がセンター前へ落ちる
俺は落ちたのを確認してゆっくりとホームに帰る
「ナイスバッティング。」
「ありがとうございます。」
俺はベンチに戻るとそこには
「ナイスバッティング。」
「ひゃっは!!狙ってたな。」

「それよりも本当に足速いな。あれ普通なら二塁打だろ？それを三塁まで行くところができるなんて凄いな。」

初安打を祝福してくれる先輩たちがいた

９回裏

「……オーライ。」

最後の打球をしっかりと丁寧に両手でとる

「アウト。ゲームセット。」

１２対７

スコアボードに記載してあったスコアを見て少しため息をつく

疲れた

その一言だった

打席は５打席４打数２安打１四球２盗塁２三振

しかし４打席目は相手の真中さんのスライダーを当てることすらできず３球三振

全国レベルのピッチャーとのレベル差を痛感することとなった。

「……」

それに勝ったは勝ったでいいものの７失点

守備は機能してたはず

しかし丹波さんが初回にツーラン二回に四球でだしたランナーをエンドランでランナー一三塁そしてライトへのタイムリーツーベースヒットとセンター前への2点タイムリーヒットを浴び3失点。
4回も四球で出した球を置きに行った甘いボールを捉えられ1失点ずつで4回被安打8四死球4自責点6
川上先輩はよく踏ん張ってくれたと思うがそれでもエースの弱いところをとことん相手に見せてしまった結果となった
そのせいか勝ったのにベンチの雰囲気は重かった
「おい。反省会は後から食堂で行う。いいな。」
「「はい。」」
はぁ。一度ため息をつく
絶対的エースの不在
それは誰もが実感していることだった
「それと砂田。」
「はい。」
「来週末に一年対二軍の紅白戦をすることを一年全員に伝えろ。」
「俺がですか?」

「あぁ。但し砂田と沢村以外の全員を使うこと。実戦で使える選手を見てみたい。」
「……はい。分かりました。って俺も試合に出たらダメなんですか？」
沢村はまだ分かる。しかしなんで俺まで
「あぁ。お前は出る意味がないからな。」
それってどういうことだ
戦力外ってことかと一瞬考えると
「お前は二週間後関東大会で使う。他の一年とは違い姿勢が違ったからな。これからは大事な場面での代打や代走、守備固めを中心に起用する。」
「は、はい。」
またチャンスを与えられることにホッとする。
これでまだ先輩達と野球ができると思うと嬉しい気持ち、スタメンに届かなかったという悔しい気持ちが入り混じる
「……」
でもそれだけ力が足りてないってことだ
そのことを素直に受け止める
それでも悔しいという気持ちだけはまだ消えなかった

一年ＶＳ二三年

「砂田。次こっちに。」
「はい。」
と俺は伊佐敷先輩にトスをだす。リズム良いテンポで打っていく伊佐敷先輩
俺は今三年の先輩たちとの自主練習に参加していた
「でも砂田本当にいいの？あっちにいかなくて。」
「……あぁ、紅白戦ですか。」
トスを投げながら小湊先輩の言葉に頷く。
「試合見てても体を動かしたくなってどっちにしろここに来ますから。まぁ気にならないって言えば嘘になりますけど。それならできるだけ動かしてから様子見程度で観に行こうと思ってます。ぶっちゃけると見るくらいなら出たいです。」
「……まぁ気持ちは分かる。」
「それにせっかくのアピールチャンスに俺が出たらまずいですよね。俺だって試合に出てアピールしてレギュラーに入りたいですけど今回はやめておきます。それに俺は昨日の稲実戦でしっかりアピールしましたから。」

昨日の春季大会に決勝俺は最終回に川上先輩の代打で出場しヒットと盗塁そしてサヨナラのホームを踏んだ。
「あぁ。見事な盗塁だったな。」
「……そうだね。スタート完璧だったし相手キャッチャー投げられなかったしね。」
「……誰もバッティングについては褒めてくれないんですね。」
内角の球をセンター前にはじき返したのに
「でも、砂田って長打も打てるのになんで長打狙わないの?」
小湊先輩が不意にそんなことを言い出した
「長打ですか?」
「そうだな。インコースのストレートをセンターに弾き返せるスイングスピードがあれば十分に長打は狙えるんじゃないのか?」
結城先輩の言葉に俺は考える。そういえばそうだな。
冬場のウエイトトレーニングで長打を狙える体にしてきたのに長打という考えはなかった
ということになると
「まぁ、中学の時の癖ですかね。なるべくシングルヒットを打って足で揺さぶりをかけろと口すっぱく言われてきたんで。それに多分中学の時投手事情にあると思います。

長打狙いだと分かると変化球でゴロ打たされるのでコンパクトに鋭く振るのが当たり前になってるんですよ。ムービング投げるピッチャーもいましたし。」
「あぁ。それはやっかいだな。」
「それだから今でも無意識に鋭く低い打球を飛ばすのが当たり前になってきてるんだと思います。。あっ伊佐敷先輩ラスト１０球です。」
そして１０球伊佐敷先輩が打ち終えた後片付ける
そして全部片付けた後
「健斗いる？」
美帆が室内練習場に入ってきた
「ん？どうした？紅白戦で動きあったのか？」
「うん。３回が終わって１対０。一年生チームが先制したわ。」
「なっ？」
「まぁ秀明、先輩の苦手なコースを徹底的に調べてたしな。それで先制点の内訳は？」
「東条くんがヒットを打ってその後に金丸くんのタイムリーツーベースだって。ついでに東条くんは二軍に合流が決定したわ。」
「……朝練組頑張ってるじゃん。春市はまだ出場してないのか？」
「うん。全員出場の機会があるから出番は来ると思うけど。でも金丸くんと東条くん以

外はやっぱり動きが固いわ。」
「まぁ、この試合の意味を理解してる二人だし信二も二軍合流はあり得そうだな。」
「へぇ～。今二、三年生負けてるんだ。」
「は、はい。」
黒い笑みの小湊先輩に美帆がひいてるし
「仕方ねぇちょっと喝を入れにやってやるか。」
こっちはこっちでなんかやけになってるし
「……俺打ってないんだけどなぁ。」
「私が後から球出ししてあげるから。」
「……頼むわ。」
そういいながら俺たちは室内練習場を後にするんだった。
「……へぇ～。」
俺がシャワーを浴びＢグラウンドに着くと６回の裏になっていた
８対２
「……なんで一時間で８点も取られるんだよ。」
俺はため息をつく。
４回に７点５回に１点

そしてピッチャーは
「おっ？沢村投げるじゃん。」
今沢村がピッチング練習をしてるところだった
「おう。きたのか？」
「御幸先輩。はい。一応冷えたらいけないと思いシャワーだけ浴びてきました。」
と一応この後また体を動かすつもりだったので練習着とアンダーシャツを変えてきたのだが
「……その人は？」
「……ん？」
とそこには見覚えのない奴が一人いた。
「……だれですか？」
「降谷暁。この試合で唯一丹波さん以外に一軍の合流が決定した奴。」
「……ってことは一年か。俺は砂田健斗。一応同学年だよ。」
「……でも試合に。」
「あぁ。俺もう一軍合流してるから。監督にでる意味がないって言われてんだよ。ついでにポジションはピッチャーとキャッチャー以外な。ってか俺かなり目立ってたはずなんだけど。」

「……別に興味ないから。」
「あ、そう。」
俺は沢村の投球練習をみてると相変わらず変な動きをしてあがる
「……今日沢村良さそうですね。相変わらずグニャグニャしてる。」
「あぁ。」
「……？」
「こいつの球ただのストレートだと思ったら痛い目みますからね。ど真ん中だと思って初球打ちするのは悪手ですよね。」
すると2、3年生チームの先頭打者がバッターボックスに立つ
「さて、普通は1球見ますよね甘くても。どれくらいの球なのか見ておきたいですし。」
「あぁ、これが普通の試合だったらな。」
と御幸先輩の言葉に頷く。その一言でもう結果は決まっていた
カキィィィンと音を建てたバットはレフトへと飛んでいく
「……カット気味に曲がりましたね。」
「あぁ詰まったな。」
そして打球は伸びずにレフトのミットに収まる
ワンアウトか。

「これこの回3人で終わりそうですね。真ん中のストレートだと思って頭に血が登ってますし。それに沢村のテンポもいい。考える隙を与えてませんね。」
「お前ほんとよくみてるな。」
「あぁいうピッチャーはほんと打ちづらいので。」
　そして予想どうりすると次のバッターがサードライナーに倒れるとその次のバッターは詰まらせてセカンドゴロ。
　3球でスリーアウトになった
「……はぁ。気合いに乗りすぎてフルスイング。それじゃあ沢村の思う壺ですね。」
「まぁ、自覚してないっていうのが沢村らしいけどな。」
「砂田!!」
　すると監督が大きな声で俺をよぶ
「はい。なんですか?」
「お前次に二、三年側の代打だ。準備しておけ。」
「……はい。」
　ってことは沢村の球を打つってことか。
「……まぁ、ど真ん中しか投げてこないんなら大丈夫か。」
　さっきから真ん中しか投げてこないし。

このボールがアウトローかインコースに集められると本当に厄介だけど。
「すいません。呼ばれたんで準備してきます。せっかくのチャンスなので。」
「はいはい。」
と俺は二、三年生側のベンチへ走る。
「すいませんが誰かヘルメット貸してくれませんか。」
バットは自主練のため持ってきてるが、ヘルメットは未だに部室に置いてきている
「……そんならわいの使い。」
すると前園先輩が俺にヘルメットを渡してくる
「……ありがとうございます。」
「それで、沢村の投げている球はなんや?」
「……気づいてましたか?」
「あぁ。何かなければ先輩方があんな簡単に凡退するわけないやろ。」
まぁそれはそうかと思い出し
「ムービングです。天然の。」
沢村のストレートの正体を言った
「ムービングやと?」
「はい。多分野球経験が少ないんでしょうね色々な方向に曲がってます。多分一球見れ

ばわかりますよ。沢村の球質がどれだけ厄介なのかが。」

すると一年チームの先頭が倒れる

「……それにあいつは今までずっとチャンスを待ってきた。それだから気持ちの乗ったいいボールが投げれてます。このままだったらそのまま沢村のペースですよ。」

そして俺は軽くなるべくコンパクトにスイングする

「対策はバットをコンパクトに待って鋭いゴロを狙いますね。打席もギリギリ前に立って変化する前に叩くって感じだと思います。それで後は足やバントで揺さぶりますね。ムービングボールはコントロールするのが難しいってきくので投手の自滅を狙いスタミナを着実に奪っていくところでしょうか。ただしムーピングのバントはかなり難しいですので基本はエンドランで攻撃するのがベストです。」

「……なるほどな。つまりはストレートって言っておきながら変化球やったちゅうわけか。」

「いや。沢村の場合普通に投げるストレートの方が変化球なんだと思います。」

「……どういうことや？」

「多分あいつフォーシームの握り知りません。」

「は？」

「遠投あったじゃないですか。それで確信に変わりました。あいつの球は曲がるのが普

通であり曲がる握り方しか知らない。だからあんな大勝負で変化球なんか投げるんですよ。自分が直球だと思っているから」

それがあ８０ｍ以上投げれるんだから尚更イラつくんだよ

「しかも皮肉ですよね。ストレートのいろはを知らない奴がピッチャーとして最大の原石であることが。少しは俺も欲しかったです。あいつの才能。おれもピッチャーとしてマウンドに立ちたかったので。」

肘肩指の柔らかさ

ピッチングフォームを見ただけで分かる

技巧派、本格派のエースになれる条件が揃ってることに

だから俺はそんなお前が本当羨ましくて嫌いだよ。沢村

ＶＳ沢村

「アウト。」
相手の攻撃を終えた声が聞こえてくる
「……」
俺はこれから打ち倒すべき。投手を見る
「よーし。打てるようになってきたぞ。全然通用しないわけじゃねー。この回もばっちり抑えるぞ。」
そう言ってチームの士気を高めてる
本当いいピッチャーだよ。
こういうピッチャーは本当に手強い
そんなことが分かっているから手加減なしでいくぞ
俺はいつも打っている左バッターボックスに入る
息を吐き。そして深呼吸をする
「お願いします。」

そしてバットを構えると集中力を高める
こいつの球は気を抜くと詰まってしまう
力んでもいない
でも意識してしまうこいつのピッチング
沢村が1球目を投げるそれを俺は1球見逃がすと
ボールが変な方向に変化する
「ストライク。」
監督の声が聞こえてくるがすぐに状況を理解する
厄介だな。これ本気でミートできるか分かんねぇぞ
俺はスイングスピードのために９００ｇの軽いバットを使っているのだが
こいつ本当にキレがいい。
「すいません。」
と俺は一旦間をおく。こいつのペースにさせてはダメだ
バッドをギリギリまで短く持って強いゴロを打つしかない
それにステップをする間もなさそうだからいつも追い込まれてからやってるノーステップ打法に切り替えるほうがいい。
バッターボックスギリギリまで前に来て俺はバットを構える

曲がる前に叩く
俺はそう判断する
大きいのはいらない
次のバッターにどう繋げるかだけ考えろ
そして沢村が投げる
真ん中へのボールいつもならギリギリまで引き込むところだがこいつの場合は悪手だ。
強いゴロを一二塁間へ
鋭いスイングでいつもより、前でボールを捉える
……手応えあり。でも重てぇ
すると鋭い打球ががファーストの右を抜きライトへと転がっていく
「しゃー。」
そうしてライトが捕球体制をみてこれ以上は進めないと判断する
「ナイバッチ。砂田」
ランナーコーチの先輩が俺に言う
プロテクターを外しその先輩に渡す。
「ありがとうございます。やっぱ相当厄介ですよ。あいつの球質。手元で曲がるから余

計に分かりづらいですし……正直結構ギリギリでした。」
形をこだわらないで打ったのは本当に久しぶりだった
「……なぁ砂田。あいつの球そんなに打ちづらいのか？」
するとファーストの選手が俺に話しかけてくる。
「……天然もののムービング。ど真ん中に投げる分先輩の打ち気を誘い手元で曲がるボールに引っ掛ける。それも無意識でやってる分余計にタチが悪い。あれほどに打ちにくいボールなら１５０ｋｍのストレートの方が打ちやすいわ。しかもクソ重たいし。」
球質自体は軽い方だけど気持ちが乗ってる分重たくていいボールだった
「……お前らは沢村の評価見直した方がいいぞ。一回は投手を諦めろと監督に言われたにもかかわらず前だけを見てしっかりと一歩ずつ課題をクリアしてチャンスをもらえたんだ。いい加減中学のプライドを捨てて青道野球部である事の自覚を持て。」
「……」
俺はそう言うとリードを取る。悪いけどこの雰囲気じゃ逆転される可能性がある。
沢村が足をクロスさせた瞬間俺は二塁へと走る。
「スチール!!」
俺は走りながらキャッチャーの方を確認するとやっぱりキャッチャーを球質に気づ

いていなかったのか後ろにボールをそらす。
それをみて俺は二塁をオーバーランしてキャッチャーの捕球をした後に二塁へと戻る。
盗塁成功かパスボールだな
「ナイスラン!!砂田!!」
すると先輩たちの声が1声大きくなる。悪いけど沢村この回で試合を決めさせてもらうぞ。
「……相変わらず早いね。」
「悪いけどそれ以上そっちのペースに持っていかれたら最悪逆転あったからな。早めに一点取っておきたかったんだよ。」
「それにしてももしかしてムービングボール？沢村くんが投げてるの。」
「あぁ。本人は気づいてなさそうだけど。でも相当キレてるぞ。」
と言って俺はリードを取る
バッターは増子先輩どうやら増子先輩も沢村の球質気づいたらしい
俺と同じようにコンパクトに振り抜くつもりらしい。
ここだぞ沢村。
この回が大事なポイントだ

踏ん張れるかどうかでお前は次第だぞ
てかこいつ本当ランナー見てないなそれなら
投げる前に俺はスタートをきる
「スチール!!」
これで三遊間破りやすくなりましたよ増子先輩
しかしカキィィィンと打ったボールは大きく切れファールボールになる
「……」
せっかく走ったのに俺は苦笑してしまう
ここで真っ向勝負を選ぶのかよ
俺は小細工して工夫しながらライトに引っ張るしかなかった
しかしこの人は力と力のぶつかり合いを選んだのだ
本当そのパワー羨ましいですよ増子先輩
でもそれが今では心強い
「……はぁ。仕方ねー見守りますか。」
俺は苦笑しながら二塁ベースに戻る。さっきとは打って変わってリードは小さく盗塁はなし。
任せますよ。最悪センターに飛んだらタッチアップ行きますから

一つ一つのプレーをしっかりこなす
それが今の俺に出来る事だった。
「増子先輩タイミング少し早いです。もうちょっと引きつけてください。」
声を出せプレー示せ
そして第３球目
コンパクトに振った打球がセンター方向に飛んで行き
スタンドへと運んでいった。
詰まった打球なのにホームランかよ
俺は三塁を回りホームまでゆっくりと帰る
こりゃいくらなんでも沢村でもダメージでかいだろ
と思いマウンドを見ると
笑っていた。
子供が新しいおもちゃを買ってもらったように笑っていた
「……」
もっと投げたいって気持ちが伝わってくる
「……やっぱ投手だよお前は。」
こっちも笑ってしまう

やっぱこういうの無名ピッチャーがいるからこそ面白い
「ナイスバッティングです。増子先輩。重かったでしょ。」
「あぁ。気迫のこもったいいボールだった。」
「まぁ、普通は強いゴロを打つのが正解なんですけど。それをホームランに持っていきますか普通。」
俺は苦笑してしまう
「増子、砂田。お前ら次の回から交代だ。増子は後から監督室にくるように。前園と渡部は準備しろ次の回から出すぞ。」
「は、はい。」
「はい。」
「気をつけて下さい。かなり気持ちの乗ったいい球なんで。」
と俺はこれでお役御免になる
後は声を出していくだけだった

奇策

関東大会一回戦
青道対横浜港北学園との試合は７回の表が終わって６対２で青道高校が負けていた。
「お疲れ様です。丹波さん。」
「あぁ。ありがとう。」
俺が水を差し出すとそれを飲む丹波さん
……本当嫌な戦い方をするチームだな
６回までの丹波さんの球数は１０９でかなり投げさせられていたしな
粘って粘って後半にしぶとく攻撃してくる
こういう時本格派の投手がいたらいいんだけどな
「……砂田この回からライトには入れ。」
「はい。」
と準備はしていたので
「そしてピッチャーは降谷に変える。」
その一言でベンチが少しだけ凍りつく

「降谷?あの時御幸先輩といた人でしたよね。」
俺は小声で御幸先輩の方を話す。
「……どんな球投げるんですか?」
「まぁ、見ればすぐに分かるさ。」
「?」
まぁ俺は守るだけだしいいんだけど。
そして降谷がマウンドへと向かうとチンタラチンタラと歩いて
……あいつ。
少しだけ青筋が立ってしまう。
俺はこういったプレイヤーはあんまり好きではない。
できる限りは走るべきだし、特に守備を待たせることが嫌だった
あいつ後から注意しとかねぇと
まぁ問題は投球内容だからいいんだけど
でも一軍に上がるくらいのピッチャーってどういうことだ
そうして迎える一球目
ズバンと唸りをあげるストレートが御幸先輩のミットに収まる
「……」

さすがに俺も声を失う
まじかよこの速さで同学年かよ
そしてテンポよく投げる降谷に言葉を失う
でも思った以上に早く弱点は見つかった
バッターが振ってくれているがストライクはほとんど入っていない。
それに指先から放たれるボールはかなり指に負担かかるはずだ
……まぁでもこの試合まではなんとかなるか
俺はため息をつく
投手問題解決とはいかないけど
継投でやりすごせばなんとかごまかしながらやっていけそうだな
後は点数取ってやるか
８回の攻撃は俺からの打順である
そして降谷が三者３球三振で抑えると球場中が湧く
……認めたくはないけど
「ナイピッチ。」
ベンチに戻るさいに声をかける。
そうして先頭バッターなので俺はヘルメットとグローブをつける。

せめて先頭バッターの俺は出ないとな。
3球の投球練習を投げた後
バッターボックスに入る。野手の位置は
「……は?」
ライトまでもがかなり左に守りレフトはほぼライン上に近い。引っ張り無視の流し打ち専用シフトに少し戸惑ってしまう。
これには観客もざわめき戸惑いの声が隠しきれない。
「……一年相手にここまでやるかよ。」
といってもこれは本当に打ちづらい。とりあえず一球見よう
そうして俺はバットを構える
そして一球目
外角の低めのいいコースに初球は決まりワンストライク
これ相手外角で勝負する気かよ
「すいません」
いったん間をあけるベンチの方を見ると
ただ見守っている監督の姿があった
……いったん仕方ない。

ギャンブルするか
俺は打席に入るといったん内外野の位置を確認してみるとあることに気づく
内野は引っ張り警戒シフトかよ
本当厄介だ
力んで引っぱったボールは内野が裁き
落ち着いて流したボールは外野に任せる
よく考えられている
だから一つだけ空いているスペースそこを狙おう
ピッチャーが振り返ると俺はバントの構えを取る
セーフティーで三塁線ぎりぎりにそしてコツンと音がなるそして分かる
やばい勢いを殺しすぎた
そのまま全速力で走り俺はそのまま一塁へ走るここで先頭バッター出塁と出塁しない場合はかなり違う
しかし俺が一塁を駆け抜けた時にはファーストグラブにボールが収まっていた
「アウト。」
俺は少しだけ点を仰ぐ
観客からはなんで引っ張らないんだよとかヤジが聞こえるが

俺はベンチに戻る
「……やられたな。」
結城先輩に声をかけられる
「ええ。ちょっと勢い殺しすぎました。」
俺はため息をつく。まさかここまで警戒されていると思ってなかった
「……大丈夫だ。多分このシフトはもう使えないからな。」
結城先輩もそう思うか
「多分無理やり引っ張らせて内野で抑えるシフトだったんですけど。俺が弱点ときましたからね。でも塁にはでときたかったです。」
少し弱すぎたセーフティーバントに少しだけ反省してしまう
ちょっとだけプッシュぎみにすれば良かったな
「でも、ここまでする必要ってありましたか。点差4点差ありますけど。」
「いや。ここでランナーを出したら勢いを持って行かれるからな。この時だけの特別なシフトだろう。どうしても流れを切りたい時のためのな。」
「……それにまんまとしてやられたわけですね。」
考えすぎたっていうのもあるか
クソ。ここで引っ張ってどうすんだよ。

次のプレーに切り替えないと
と俺は少しだけベンチに座り込む
打ち取られるのが悔しい。
思い通りのバッティングができないことが悔しいんだ
「……やべ。こんな悔しいと思ったこと久しぶりだ。」
「……あぁ?」
すると笑ってしまうやばい。
「……やば。めっちゃ楽しい。」
そんなことを呟いてしまう
「……お前どMか?」
「なんでそうなるすか。」
「いや。やられて喜ぶって。」
「……だって本当に楽しいんですもん。最近絶好調でちやほらされてたし、。なんか久しぶりに負けたって思いましたし。」
あの市大戦以来か当たりが出なかったのは
「なんかこういった時ってすげぇ燃えません?」
「……お前やっぱ変だろ。」

伊佐敷先輩が俺を呆れたように見る。
「それと降谷。お前マニキュア持ってるか？」
「マニキュア？」
「お前その豪速球かなり指先の負担かかるだろ？もし持ってなければ一つ買っておいた方がいい。多分今の指先はお前のストレートについていけないだろうしな。お前も爪が割れて途中降板とか嫌だろ？」
「……」
するとコクリと頷く降谷
「だから試合前には絶対塗っといた方がいい。まぁ今日は仕方ないけどな。」
すると倉持先輩がセカンドフライを打ち上げスリーアウトになる。
「……怪我だけは気をつけろよ。お前はセンスにまだ体が追いついてないんだから。」
グローブを持って俺は守備に行く。
「まぁ、後一イニング抑えたら先輩方と俺が初勝利を取ってやるから頑張れよ。」
「……（こくり）」
「おい。砂田。」
「だって負ける気ないですし。このまま2点で終わっていいんですか？」
俺が笑う

「それに、やられた側としてはやり返さなければ気が済まないですし。」
「お前絶対そっちが本音だろ。」
「…まさか。」
「おい。今一瞬の間があったぞ。こいつ。」
でもほんとうにやり返さなければ気が済まない
……チームとしても、さっきの借りも
最終回2アウトランナー一塁
6対5で青道が怒涛の後ろについていた
ランナーの俺は最終打席でもう一度セーフティバントを試み成功
見事にやり返すことに成功した
バッターは九番の白州先輩
サインは初球エンドラン
俺はリードをとるこの人はクイックも牽制もそこまで上手くはないことはランナーコーチをやっていて分かっている
ファーストランナーコーチをやらせてほしいっていったのもこの為だ。そうすることによってクイック牽制を見ることができる
そしていつも通りスタートを切る瞬間投手が投げる

「スチール。」
俺はバッターの白州先輩を見ると堅実に一二塁間を抜いていき俺は三塁へ到達する
最近この組み合わせ多くなってきたよな
俺が塁に出て盗塁かエンドラン
バントが殆どない積極的な野球がこの8、9番で展開していた。
てかこの人とかなり平均だけどもこのチームでもクリーンアップ任せてもいいくらいに上手いぞ
俺はヘルメットを一度触ると白州先輩と倉持先輩が頷く
監督のサインはなくこのチームでも俺と白州先輩そして倉持先輩しかできないプレー
初球からいきましょう
「スチール。」
白州先輩が走りだすと俺は大きく二次リードをとる。どのタイミングでスタートを切るかが問題になってくる
そして倉持先輩がバントした瞬間に俺も走り出す
エンドランスクイズ
俺たちが中学校の時やっていたオリジナル作戦だ

条件は足の速いランナーが3人揃っていること
倉持先輩のセーフティバントはプッシュぎみにする為にピッチャーとファーストの間を狙った絶妙なバント
……あの人セーフティーうますぎるだろ。要求通りのバントだぞ
思惑どうりに進むそしてファーストが掴むがファーストカバーは誰もいない
普通はセカンドがいくのだがそれはできないはず
なぜならサードランナー牽制のためにピッチャーとセカンドカバーしにいったのでカバーにいけないのだ
そうして俺はホームに帰ると横学の守備はどこにも投げられずオールセーフとなる
「うぉぉぉお追いついたぞ!!」
「……今のすげぇ狙ってたのか?」
と俺はベンチに戻る途中
「……ねぇ。これ考えたの砂田?」
小湊先輩に話しかけられる
「はい。中学校の時に俺が一番されて嫌なことを自分達のプレーに取り入れたんですけど……ここまで上手くいくとは思いませんでした。」
「…うん。性格の悪さが滲みでたプレーだったよ。」

「…それはどーも。後はお願いします。」

言いながら俺はベンチに戻る

この回に試合を決めないとこの回に降谷に代打だしたから今のベンチには川上先輩しか残っていないはず。

カキィィィン

「……考えるだけ無駄だったか。」

小湊先輩の打球はセカンドの頭上を抜けていった

青道高校７対６横浜港北高校

青道高校関東大会一回戦突破

インコース攻め

「はぁ。」

関東大会二回戦後ミーティング後食堂俺は少しため息をつく

前橋郁栄相手に９対７で負けた

完全に投手陣の脆さを痛恨してしまった

「……はぁ。まさか話を聞いてなかったとはな。」

先発の降谷が爪をやり２回途中で降板その後連投の丹波先輩が３回４失点。そのあと引き継いだ川上先輩も打たれ全員で９失点

打線の方も奮起はしたが結局力負けた

俺はスタメン起用で３打数１安打１死球

それで６回に坂井先輩と交代になった

「打高投低の高校野球だけど投手力って本当に大事なんだよな。」

こういった時エースの不在は本当に厳しいことがある

降谷は今日の件で二週間の二軍降格

俺は坂井先輩とのレギュラー争いが始まった

ぶっちゃけ一年の夏に一軍のスタメン争いをしている俺は異例らしい
御幸先輩でさえ試合に多く起用されるのは夏大会前でのスタメンが怪我で離脱したのがきっかけらしい
それにインコース攻めが多くなってきたな。
外角が得意コースだとわかってきたのだろう。インコースも俺は苦手ではないが打者の正面のライナーが多い。
もっとウエイトつけなくちゃいけないかな。
俺はため息をつく
パワー不足
この学校に入ってから痛いほどおもいしらされる俺の壁
長打が打てるようになってきたのは俺はボールに力を加えることが上手くなってきたからで自分にパンチ力があるからじゃない。
「……はぁ。」
「なにため息ついてんのよ。」
すると美帆が隣に来ていた
「あぁ。インコース攻めのこと考えてたんだよ。俺が外角得意っていうのがバレてきたからインコースの対応の仕方を考えてたんだよ。」

「なんで？内角が苦手ってわけじゃないじゃん。」
「まぁそうだけどさ。なんていうか欲が出てしまってるっていうか。」
「……欲？」
「なんか少しずつ長打出るようになっただろ？でもインコースのボールに押し負けてるように感じるんだよ。外角のボールは面白いように飛ぶから。」
　俺は外角の球には力が入りやすくてインコースの球が力が加わりにくいんだよな。
「だからポイントが掴みづらいっていうか。フルスイングするのは俺の強み全部消えるしスイングスピードを生かして引っ張る方法はないのかって思ってな。」
「……ふーん。」
「なんか素振りでも上手くイメージ湧かなかったしどうしたらいいのか分からねぇんだよ。」
　特に俺は左バッターだ。もし強く引っ張ることができれば進塁打やゲッツーになる確率が全然減る。
「うーん。でもマシンバッティングじゃあ引っ張る事できるんだよね。」
「あぁ。でもやっぱり変化球とか対応しているとなんかなぁ。てかお前ってインコースにはあんまり投げなかったよな。ほとんどアウトコースの球ばかりで。」
「うん。私の緩急にとって最大の弱点って引っ張られることだから。」

「……どういうことだ？」
「私って中学の時緩急でゴロを打たせてたでしょ？でもねインコースになげると自然にライナーやフライになりやすいんだ。」
「……どういうことだ？」
「私の球ってコントロール重視だから芯に当たればそれなりに飛ぶでしょ？」
「あぁ。だからボール半個分したとか外に外してたって言ってたな。クイックやリズムでもタイミングを外してたっていってたし。」
「うん。でもね一番嫌なのは前で捉えられることなの。私のピッチングはカーブやチェンジアップでタイミングを外して差し込ませるピッチングだったから。」
「おかげでセカンドにはボテボテの打球処理が難しいボールばっかり飛んできた。」
　……ってあれ？それって数日前どこかで聞いたような
　そういや小湊が沢村がマウンドに立った時難しいボールがよく飛んでくるって
「それって沢村のムービングと」
「うん。似たような感じ。だから私は絶対にフライを上げられるのを嫌ったの。だからアウトコースに固めて時々アウトハイで三振を狙う以外は高めの釣り球も投げなかったでしょ？軟式だから低めに少し動く球でタイミングをはずせばゴロになるの。」
「……ちょっと待てお前もしかして。」

「うん。三年の春からツーシームも少しだけ混ぜてたの。取材やチームメイトには黙ってたけど。」
「……」
　こいついつのまにか味方まで騙していたのかよ
「……つまりどういう事だ？」
「つまりね。沢村くんの打席みたいとはいかないけど少しだけポイントを前にすればいいんじゃないかな？あの時ムービングでもきっちりと芯で当たってたでしょ？多分だけど健斗にとってそこが一番ボールに力が加わりやすいんじゃないかな？あの時の沢村くんの球カットボールに近かったから多分内角でも通用すると思うけど。」
「……」
　あの時のポイントは確か
「……悪いけど美帆。」
「うん。いいよ。」
　それだけで分かる関係。本当頼り甲斐のある相棒だよ。お前は。
「……」
　カキィィィン
　俺が川上先輩から打ったボールはラインを切れる

「……まだちょっと早い。もう少し引きつけて。」
「……」
球出ししている美帆からアドバイスってかヤジが飛んでくる
「……」
言われた通り少しだけ修正して振ると
少しバットからボールの重みが伝わってくる
そしてライン線ギリギリに鋭い打球が飛ぶ
「……うん。まだ正確ではないけどいいんじゃない？」
「まぁ、５本に３本は入るようになってきたしな。」
インコースを思いっきり引っ張ることが少しずつできるようになってきている
「ありがとうございました。川上先輩。」
「いいよ。俺も少し投げたかったから。」
と自主練に付き合ってもらった川上先輩にお礼を言う
俺は一息いれると
「そういえばお前、マネージャーの仕事は？」
「もう終わってるわよ。ついでに吉川さんの仕事も減らしてきたわ。」
「あぁ、確かドジっ子マネージャーの？」

と電話で愚痴をこぼしていたので覚えていた
「うん。私も球拾い手伝うわ。」
「サンキュー。」
と外野にとんでいった球を拾いに行く。
「……お前ら仲良いな。」
そんな川上先輩の声も届かずに

ベンチ入りメンバー

「狩場もう一球頼む。」
「あ、あぁ。」
俺はオフの日に内野ノックを受けていた。
捕球、握り変え、ステップに送球
全てを丁寧に行っていく
「ふぅ。１０分休憩したらまた１０セットいくから。」
「……」
すると狩場が座り込む
「悪い。こっちが限界だ。手にもう握力が残ってねぇ。」
俺は時間を見るともう１２時。ノックをはじめて三時間経過していた。
「……ん。謝るのはこっちだろ。悪い。お前のこと考えてなかったわ。大丈夫か？」
とスポーツドリンクを狩場に投げる
「あぁ。でもお前いつもこんなことやっているのかよ。」
「ん？何が？」

「いや、だってもうノック三時間受けているだろ。それでもまだやるとかお前どんだけ体力あるんだよ。」
　そうはいうけど
「アホか。体つくりは冬にしてきたに決まっているだろうが。怪我をしないように冬場は体づくりを基本に毎日四時間は走ってきたんだ。これくらい余裕なんだよ。」
　オフの日はさらに二時間地道に下半身の強化に当て続けた
　さらにウエイトと有酸素運動を一時間
　とことん体をいじめ抜いてきたのだ
「……まぁ、でもさすがに上がるか。昼飯くわねぇと。」
「……お前すげぇな。」
「あっ？」
「いや。本当にそこまで野球に真剣になれるのは本当にすげぇよ。」
　その一言にため息を吐く
「でもな、そうしても俺はまだスタメンになれないんだよこのチームは。センスも才能もある人が努力している。ここには１００人以上の部員がいる。でもグラウンドでプレーできるのはたったの９人だけなんだ。これに入りつづけるには努力するしかないんだよ。それはたとえ先輩の席を奪い取ることになってもな。」

「……」
「俺は譲る気ねぇぞ。その為に俺はここにきたんだから」
そうやって俺は認めさせてきたんだから
「ありがとうな。練習付き合ってくれて。」
飯食った後はBグラウンドで五時間ほどの軽めのランニングして上がる
来週からは合宿
まぁ無茶をすることはないだろう
スポーツドリンクを一気飲みし俺は息を吐く
そういえば二軍戦今日で最後か
明日からは一軍中心のメニューだし練習量も格段に増えるだろう
ふぅ。
タオルで汗をぬぐう
そして今日言われたことを思い出す
凄いか
俺は確かに練習量は多いだろう。でも一日５００球近くも投げ精密なコントロールを手に入れたあいつに比べると
「別に凄くなんてねぇよ。」

肩肘を壊す可能性があっても手に入れた武器
男子に勝つは努力するしかない
あいつはそういっていた
……まぁ、オーバーワークだからオフに何度も連れ回しに野球観戦しにいったりやカラオケ連れ回しにしにいったけどな
だからこれくらい普通だって思う自分がいるんだよな。
野球で妥協するな
貪欲で飢えろ
足りないものは全部欲しがれ
野球だけはどうしても負けられないんだ
あいつの分まで
まぁ今日は疲労を抜く為に軽いランニング
ここで怪我するのは避けたいし
「……お～い。砂田くん。監督が集合って言ってるよ。」
すると一年のもう一人のマネージャーが来る。えっと
確か同じクラスの吉川さんだったはずだ
「あぁ。場所は？」

「えっと、あれ？どこだったかな？」
「……」
少し青筋が立ちそうになる。でも呼んでいるってことはそういうことだよな
「……まぁ室内練習場か食堂だろうから行くか。……あと吉川。覚悟しとけ。」
「えっ？」
「……これから見るもんはかなりくるからな」
俺は覚悟を決めまずは室内練習場へと向かう
するともうほとんどの部員が整列していた
俺も整列し監督が来るのを待つ
一軍昇格メンバーは二人
多分春市は最近の成績から見れば確定だから残り後一席
その背番号を誰が受け取るのか
さすがの俺も緊張してしまう
先輩方にはティーや素振りなど色々なお世話になったから一人は選ばれてほしいという気持ちはある
ただしそれは多分厳しいってことも俺は分かっていた
そして片岡監督、太田部長、高島さんの首脳陣がやってくる

「今から一軍昇格選手を発表する。」
俺は息を呑む。これで夏の予選のベンチ入りメンバーが全員決まるのだ
そしてその時を待つ
「一軍昇格メンバーは一年小湊春市。」
すると春市の名前が呼ばれる。ここは分かっていた残り後一席
そして監督の言葉から聞こえたのは意外な言葉だった
「同じく一年沢村英純。」
……さすがに目を見開く
沢村は二軍だったが最近の調子は最悪だったはずだ
だから完全に今年は外れたと思っていたんだが
「以上だ。」
「……」
誰もが無言。沢村が騒ぎそうだったが以外にもおとなしい。
「この二人を加えた一軍２０人でこの夏を戦う。明日からの練習に備え今日は解散だ。
選ばれなかった三年生だけここへ残れ」
「……」
俺は少しだけ息を呑む。今日の二軍戦の結果の上の判断だろう

沢村がどんなピッチングをしたのかが気になる
俺はただそれだけが気になっていた
俺は解散しようとした時に沢村の姿を見た
どこか納得のいかないような。そして泣きそうな顔
……あのアホ
「……沢村出るぞ。」
「……」
「今は堪えろ。三年の前では涙は出すな。」
それだけ言って俺は室内練習場を出る。
……分かっている
ここがどれだけ厳しい場所なのかってことは
俺はここにきてすぐに一軍に上がった。
その重さは分かっていた。でもやっぱり
重てぇよこのユニフォームは
俺は改めて感じる
強くあり続ける
そして

日本一長い夏を目指して走り続けるしかないんだと

武器

俺はいつも通りフリーバッティングの順番を待っていると
「砂田、少しいいか？」
すると話しかけられたことのない先輩から急に話しかけられる
「はい。なんでしょうか？」
「少し手伝って欲しいことがあるんだがいいか？」
「……えっと内容によると思いますけど。」
俺は少しだけたじろぐ
俺もこの一軍にいる限りはやれることをやっておきたい
……スタメン争いにも響くしな
「……沢村と降谷のことなんだが。」
沢村のことを言うってことはもしかしてこの人が
昨日の二軍戦のスコアブックを御幸先輩に見せてもらったら初回三者連続四死球が
あったもののキャッチャーが変わった途端空気が一変した
4―2―9のダブルプレーと

キャッチャーからの三塁ランナーへの牽制アウト
たった3球でそのピンチを潰した立役者であるクリス先輩か
「沢村と降谷に外野の守り方を教えてくれないか？」
「……はい？」
思った以上に変な言葉に俺はただ驚く
ただ少しだけ分かったことがあった
この人野球かなり詳しいな
外野ノックで走らせ同時に遠投させるわけか
大きなフォームと体力をつける為に美帆がよくやっていた
「あのすいません。俺教えるのはどうも苦手で。やって慣れていったとしかいえないんですよ。基礎とかも死ぬほどやって体が自然と覚えていったとしか。」
「……そうなのか？」
「だから沢村や降谷も数やって体が覚えるまでやるしかないんですか？あいつらバカだから多分頭で考えたら逆効果だと思いますが。」
「……確かにそうだな。」
いや俺あいつらのことバカっていってるけど突っ込まないんだな。まぁバカだけど
「まぁ、でもあいつ大丈夫ですかね？教室で珍しく授業受けてたし、なんか背負いすぎて

るっていうか。」
「授業受けているのは普通じゃないのか？」
　あっそこには突っ込むのか
「いや。あいつ基本寝てるんで。」
「……」
　あっこの人青筋浮かべてたな
「まぁとにかく体に覚えていくのが一番の練習なので死ぬほどやらせるのがいいと思います。できれば最初は硬式テニスボールで型を覚えさせるのがいいんですが本質はスローイングの方ですよね。」
「……よく分かったな。」
「同じトレーニングをしてた奴が中学の頃にいたんで。」
「あぁなるほど。」
「話は戻しますけどあいつこのままだったら背負いすぎて潰れませんか？最近オーバーワーク気味だし。」
「……気づいてたのか？」
「ええ。俺合宿のメニュー御幸先輩から聞いているので一年のみ朝練最近はサポートする方に回っているんですけど沢村に禁止令出しましたから。あいつこのままだったら

怪我すると思って倉持先輩に引き渡したんですけど。まずかったですかね？」
「いや。助かる。俺ももうそろそろ言おうとしてたところだ。」
「……なら良かったです。」
　と俺はほっとする
「少しいいですか？俺二軍戦見てないから分かりませんがあいつの球どうでした？受けてみて。」
「……」
「俺は監督は将来有望の選手程度だったらベンチに入れることはないと思います。だからちゃんと試合で使えるから沢村を一軍に呼んだんだと思っているんですが……実際のところどうなんですか？」
　あいつの武器は柔軟な体とくせ球と気持ちのみ
　それなら悔しい思いをした方が後々の秋大で使えるようになっていたはずだ
　しかし監督が起用したってなると
「……俺と一緒で何か掴んだんですか？」
　あの時の感覚で俺はバッティングで柵越えを連発できるようになった。すると守備や走塁もなんかわからないが視野が広がりいつもよりも動きが良くなったっていうか勝手に体が動くようになっていた。

化ける時は一瞬で化ける

中学の監督から言われた言葉が身に入る

「……それは見えば分かる。」

「……えっ？」

「夕食後バットとプロテクトを持って室内練習場にこい。」

すると去って行くクリス先輩に俺はただ呆然と見送るしかなかった

夕食後

「あれ？春市と前園先輩も呼ばれてるんですか？」

「あぁ、クリス先輩に頼まれたんや。」

「うん。僕は付き添いだけどね。」

「…へぇ～。」

俺は少しだけ驚く

「そういえば春市一軍昇格おめでとうさん。まぁ二軍成績みれば当たり前の結果だとは思うけどさ。」

「あ、うん。でも東条くんと金丸くんはやっぱりショック大きかったみたい。」

「まぁそうだろ、俺だって二軍成績みたら沢村より東条か金丸をあげたし。でも監督が上げるくらいなんだから何かあるとしか考えられないだろう。俺はそれをみにいくん

だから。」
　と室内練習場に入ると
　あたふたしている沢村と眠たそうにしてる降谷そして御幸先輩とクリス先輩がいた
「……なにしてるんですか？」
「いや、チームプレイの大切さについて教えてたんだが。」
「……あぁピッチャーは誰よりも野球について詳しくならないといけないってはなしか。授業中寝てるこいつがそんなこと言われたらな。」
「ちょっとその話後から詳しく聞かせてもらおうか。」
「……うす。」
「ちょっと。健斗!!クリス先輩？」
　慌てる沢村。それなら授業中寝るなって
「ってかチームプレイの強化だったら俺もつき合いますよ。どうせ内野練習するときにピッチャーとの連携は確認しておきたいですし。」
「えっ？健斗くん内野もやるの？」
「てか俺キャッチャーとピッチャー以外どこでも守れるし怪我人がでたら大変だろ？それにスタメン取れる可能性が増えるじゃん。最近俺セカンドとショートとサードとセンターとライトのノック入っているけど。その分バッティング練習減らしているけ

ど。」
「……それもこいつ憎ったらしいほどに上手いんだよなぁ。」
「まぁそれが俺の唯一強みですし。」
「……それ他の奴に言わない方がいいぞ?」
御幸先輩の言葉に首をかしげる
「あのそういえば沢村の球見させてくれるんですよね。オーバーワークになってしまう前に一球だけ見させてほしいんですけど…。」
「あぁ。そう言ってたな。」
するとクリス先輩はキャッチャーミットとプロテクトをつけ始める
俺はスイングしながら沢村が肩を作るまで待っていると
「そういえば春市と前園先輩は見たんですよね。沢村の球どうでしたか?クリス先輩が入ってからの。」
「……いや。俺にはわからん。しかしバッターが振り遅れとったんじゃ。」
「振り遅れる?沢村の球が?」
球速でいうと１２０ｋｍあればいい方の沢村の球に振り遅れる。ってことは
「……砂田入れ。沢村の肩ができたぞ。」
「は、はい。」

とりあえず入った方が良さそうだな。
そしてその一球を待つと沢村が振りかぶる
すると右手に壁を作り左手が
……は？見えない
体に隠れどこにボールがあるかがわからない
そして勢いよくボールが放たれる
スピンがよく回ったボールは真ん中に行った後加速したように見えて
クリス先輩のミットに収まった
「……」
バットを持ったまま立ち尽くす俺。
リリース点もわからない分タイミングが取りづらい
「……なんですかあのめちゃくちゃなフォーム。」
ボールが出るところがわからないからタイミングが取りづらいしさらに伸び上がったように加速するストレート
「……分かったか？」
「……分かったも何もあのフォームできるのってあいつぐらいしかできませんよ。反応すらできませんでしたから。それにフォーシーム覚えさせたんですか？」

「いや。あれはまぐれだ。」
「そうですか。」
ガックしとしてしまう
まぁ納得だな。こいつはものすごい武器を手に入れたからベンチ入りメンバーに入ったのか
「ありがとうございました。確かにこれは打席入らないとわかりませんね。」
変則フォームから投げられるムービング使いのサンスポー
「どうだった健斗俺の球は。」
ガハハと笑っている沢村に
「……気持ち悪かった。」
最高の賛辞を送ってやった
「気持ち悪い!?どういうことだよ。」
「その言葉通りだ。」
なんであんな投げ方できるんだよ
まぁでも
こいつが敵の高校じゃないだけマシだったか
俺はため息をついてわらう。

「本当気持ち悪すぎ。」
「……健斗くんそれ褒めてるの？」
「あぁ。まじでこいつの球は初見ではジャストミートはできないだろうよ。これからこいつがピッチャーする時内野陣が苦労するのが目に見えるよ。全国でもこんな奴は見たことねぇ。」
「えっ？」
「ぶっちゃけ。コントロールを磨いてアウトローとインコースに投げ分けることと緩急のつく変化球を覚えたら全国でも普通に通用する。てかこれで球速が伸びてムービングを操ることになったら。」
　寒気がする。どうやって打ち崩せるかじゃなくどうやったら当てられるかに変わってくる
「……本当にあいつは敵じゃなくてよかった。完成形を打ち砕くビジョンが浮かばない。」
「……!!」
「降谷に沢村。この二人が三年間で一度も甲子園制覇できなかったら完全に俺らのせいだぞ。」
　プレッシャーがかかる。多分こいつらが三年になる時にはほぼ二枚看板になるだろ

う

「そんなにやばいんか沢村は。」

「やばいってもんじゃないですよ。ぶっちゃけ今のままでも中堅校ぐらいだったら通用します。」

「……」

「沢村には内緒にしといてください。調子に乗らせない方がいい。」

「あ、あぁ。」

　でもこいつらと一緒のチームで本当によかったな

「前園先輩、春市素振り付き合ってください。ちょっと本当にシャレになってない。」

「お、おう。」

「だ、大丈夫？健斗くん。」

「やばい。こんなん見せられて燃えない訳ないだろ。」

「……ダメやこいつ完全にあの時の沢村みたいな目をしとる。」

　呆れたように前園先輩は俺を見る。

「ほら。早く行きますよ。」

「ちょ、ちょっと待てや。」

「……」

やばい。本当にやばい。
こんな投手がうちに二人もいるのだ
絶対に甲子園制覇しないと
その期待に胸を弾ませながら
俺は素振りへと向かうのだった

一球

カキィィィンと大きな音がなり弾丸ライナーでライトフェンスに吸い込まれるボール

「……おいおい。マジかよ。」

「すいません。もう少しお願いできますか?」

合宿一日目俺はフリーバッティングに参加することになっていた

「おいおい。砂田気合入っているな。」

「……てかこいつ一年だろ?どうしてあんなにボールが飛んでいくんだよ。」

そんな声が聞こえてくる

昨日のあいつの投球

もし打つとなったとしたら

ギリギリまで引き寄せてそこをコンパクトに振り抜く

するとライト線に速い打球が飛んでいく

そして何十球か打ち終えてから

「ありがとうございました。杉下先輩。」

「あぁ。別にいいさ。」
　俺は一回タオルで汗をぬぐい俺は息を吐く
「……どうした。やけに気合入っているな。」
　結城先輩がバットを持って話してくる
「いや、沢村の球を身近に見たら少しだけ気合入りまして。」
「ほう?」
「沢村のフォームあれ沢村以外投げれませんよ。あんな無茶苦茶なフォーム全国にもいません。ってかあんなフォームでストライクゾーンに入る方がおかしいですよ。」
　少しだけ笑ってしまう
「全国で通用する武器を作った同級生がいるんですよ。これで気合が入らない訳が無いじゃないですか。」
　沢村の努力は分かっていてそれを結果にしたのだ
「それに俺はスタメン争いも佳境ですから今週の大阪桐生、稲実、修北との試合で俺の背番号は決まりますからね。俺は一年からスタメンこれを未だに狙ってますから。」
　スタメンで試合に出ることは本当にいい経験になる。先輩たちには多くのことを学ばせてもらったしな。
　……それに少しでも恩返しがしたいし

入学してすぐに自分を一軍に受け入れてくれたこと
それは本当にいい経験になったから
この人たちにプレーで恩返しをしたい
少しでも長い夏にしたいんだ
「さて次は内野ノック受ける時間なんで行ってきます。」
「……あぁ。」
俺はBグラウンドへ向かう
せっかくグラウンド広く使えるんだからのびのびやらねぇと
「春市。」
その一言で俺にバックトスをする春市。そのボールを素手でとり一塁へ送球する。
「ナイス春市。」
「うんそっちこそ。」
冬休み中俺と春市はノック時にコンビを組んでいた。最初は送球に遠慮しがちな面があったのだが遠慮されるとやりずらいからやめろときっぱりいった後春市に積極性が生まれ元々守備にこだわりのある俺たちだったので自然と合うようになったのだ。
「お前守備でも化け物かよ。」
倉持先輩が驚いているけど

「俺中学のときは本職こっちですよ。でも自分の持ち味が一番活かせるのが外野なので外野希望しただけなので。」
「……お前本気で洒落になってねぇぞ。」
　正直のところファーストは少し苦手だが基本どこでも守れる。
「でも少し春市飛ばしすぎですかね。よくて3日悪くて明日あたりから小湊先輩と差が出てくるんじゃないですか?」
「……それをいうならお前も飛ばしすぎなんじゃないんか?」
「いや。俺少数精鋭の中学校だったのでこれくらい中学校の合宿に比べたら問題ないですよ。まぁさすがに3日目辺りからプレーは落ちると思いますけど。それでもちょっとだけ地獄をみたら元通りになるので。」
　今年も合宿のたびにあれを受けないといけないとなると少しだけげんなりする
「お前大丈夫か?」
「いや。少しどころかちょっとあれを思い出すと」
　体が恐怖で震えてくる
「まぁ、今はノックに集中しないと」
　俺は首を振り忘れようとする。
　そしてショート前にボテボテに転がったグローブでとったら間に合わないと思い素

手で取りそのままノーステップのサイドスローでファーストに送球する。
「……本当可愛げのないやつ。」
その言葉に俺は苦笑してしまう。でも守備だけは誰にも負けたくないしな
そうしながら時間だけがすぎていった。
夕食の時間
「うぉぉ飯だ!!」
沢村が声を上げる。
「……そうだな。飯だな。」
俺は冷や汗をかく。どうやらマネージャーが作ったらしいってことは
「おい。美帆お前も作ったのか?」
「えっ? いや。私は沢村くんにコントロールのコツを教えてたから作ってないわよ。」
「あっなら大丈夫か。」
と俺はおにぎりを一つとる
「……どういうことよ。」
「そういうことだよ。」
料理下手なこいつはなぜか変なものをいれまくるのだ
前は肉じゃがにシーチキンだったり、昆布が入っていた時もあった

「てかいい加減に料理に無駄なもの入れんなよ。お前の無駄がなかった料理は普通に美味しいのに。」
「えっ？だって料理にもスリルっていうのを入れた方がよくない？」
「お前は料理に何を求めてるんだ。マネさんこいつにだけは絶対食材すら触れさせないでください。」
「……ちょ。なんでよ。」
「……えぇ。そうするわ。」
「ちょっと貴子先輩!!」
　すると笑い声がおこる。
　でも本当に触らせたら危ないし
「そういや沢村のフォームあれ見たってことだろ。どう思った？」
「……相当の化け物ね。あんなフォームできるなんて投手の私から見ても羨ましいわよ。あっ唐揚げもらうわね。」
「まぁ、確かにあの肩の柔軟さは羨ましいな。ってか唐揚げ奪うな。」
「いいじゃない。それでなんだけどある程度はコントロールできるとはおもうけど多分私がやっていた８１分割はできなさそう。」
「当たり前だあんなもんできるお前がおかしいんだよ。」

こいつはストライクゾーンを普通は９分割するのを９分割の一つをさらに９分割するっていういかれた制球技術を持ったピッチャーだった
「せめて３６分割じゃない？」
「……それでも十分だよ。それであいつに変化球覚えさせるんなら何がいいと思う？俺一つ思いついてるんだけど。」
「奇遇ね。私も一つ考えているわよ。」
「んじゃ同時で。せーの」
「「チェンジアップ。」」
てかその判断しか思いうかばない
あいつのフォーシーム及びムービング以外でリリースも腕の振りも変化しないのはムービング系の球とチェンジアップのみ
特にチェンジアップは沢村のフォームから放たれるストレートのタイミングをさらにずらすことができ
沢村のウイニングショットにはぴったりだからだ
「……いいなぁ。沢村くん。」
「お前な。なんでも欲しがるなよ。」
「いいじゃない。ピッチャーって案外欲張りなのよ。」

「今はマネージャーだろ？ってかなんでマネージャーのお前が沢村にアドバイスしてるんだよ。」
「クリス先輩に頼まれたのよ。コントロールを磨くにはどうすればいいって。」
「……お前のことだから死ぬ気で投げて体で覚えるしかないって答えたんじゃ。」
「なんでわかったのよ。」
　……似た者同士だな
「それに沢村くんは下半身は安定してきてるけど野球知識については全く素人だったから少しだけ厳しく明日から指導するつもり。」
「お前の少しはかなりってことだろうが。あいつ明日死ぬんじゃねーか？」
「大丈夫。少しくらい死んでもお母さん仕込みのアレ使うから。」
「……お前本当鬼だな。」
　笑顔でいうけどこいつ本気であいつのこと潰したりしないよな
「でもたった一球で去年の稲城実業みたいなこともあるんだよ。」
　去年の稲城実業の敗退した試合は俺も美帆も何度も見た
　だから確かに知っておくべきだろう。一球の怖さを
「たった一球の重みっていうのをこの合宿中には伝えるつもり。それを見てあの子がどう伸びるかはわからないけど。」

「それは降谷も同じことだろ。でもこれでコントロールの重要性をわかってくれたらいいけどな。四球の怖みも教えておいてくれ。俺たちの決勝戦、俺にだした四球以外は完全ピッチングだったんだぞ。それでも俺たちはその一人のランナーを返して勝ったんだ。」

「……全国は本当に一球の重みが違うわよね。」

全国制覇を成し遂げたもの同士俺たちは知っていた

一球の恐怖をそして一つのアウトにかかるプレッシャーを

負けられない物

合宿４日目終了時

「お前ら本当に体力ないよな。」

俺は俺以外の一年の一軍メンバーが倒れているのを見て。少し呆れたようにする。

夏の都大会までついに１ヶ月を切り俺はこの現状を少しだけまずいと思っていた

降谷は関東大会二回戦で投げているので先発の可能性があるのだが体力が致命的にないのが気になっていた

「……なんで健斗くんは立っていられるの？」

「いや。俺もっと少ないチームで合宿やってたし。それに思ってた以上に昨日の足つぼが効いたんだよ。」

美帆の母親直伝殺人足つぼマッサージ。美帆の母親は整体師なので効果はいいがただかなりの激痛が走る。

しかし体の疲労はかなり抜け一日目と同じくらい楽になっていた

「お前もやっておくか？１０分地獄を見るだけでかなり楽になるぞ。」

「いいよ。あの時の健斗くんを見てたらさすがに。」

「……同じく。」
まぁ10分くらい気絶するくらい痛いのだが
「まぁ、そういうことでさっさと風呂入って寝るぞ。明日も普通に学校と朝練あるんだからな。」
「……なぁ、今日健斗の部屋行っていいか？」
「沢村またお前あれ見るのか？」
すると頷く沢村に少し苦笑してしまう
こいつは俺の決勝戦を繰り返し見ていた。
打たれても打たれても要所を締める大門ナインを見て少し思うことがあったらしい。
伝えたかったのはそこじゃないんだけどな
まぁでもいい刺激になったのならばいいんだけど
「……ほら風呂行くぞ。」
「……」
「これまた3人背負っていかねぇといけないのかよ。」
俺はため息をつく。
明日はライトに入っての ノックだし練習の最終日
余力は残しときたいと思いながら一人づつ運んでいくのだった。

「沢村!!」
　伊佐敷先輩が沢村を呼んでいるが沢村はひたすら熱心に俺が入れたＤＶＤレコーダーを見ている
「すいません。俺が代わりに引き受けます。なんですか?」
「……いや。一体何を見ているんだって聞こうとしたんだが。」
「昨日と同じ奴ですよ。大門中対白金中の決勝戦です。」
　俺は苦笑する。
「本当は四球がどれだけ怖いか見せようとしたんですが。このありさまでして。」
「……まぁ、その試合は俺も見たんだが。確かにこの試合は異常だよな。四球の怖さがよく分かる。」
　俺が出塁して盗塁、そして次のバッターがバントを決め最後は犠牲フライ
　理想的な1点の取り方だった
「まぁ、準決勝も俺たちから見たら下馬評をひっくり返して勝ちましたからね。あの時もうちが完敗するって言われてましたから。」
「確か青葉中だったよな。」
「よく知ってますね。御幸先輩。」
「あぁ。コントロールのいいピッチャーがいるときいて調べてみたら女子だったから驚

いたよ。でも、あの正確なコントロールは正直驚いたな。でも青葉中もかなりの強さだったんだろ？」
「相手のピッチャーの本郷がかなり早い速球を投げてました。軟式でも１３０後半は出てたんじゃないかと。」
「マジか。そんなピッチャーがいるのか？」
「俺があった時はストレートだけだったんでなんとかなりましたけど、でも高校でも多分即戦力でしょうね。打った時軟式ですが手痺れました。重たくて伸びる。そして制球力もある。降谷の強化版だと覚えてた方がいいですよ。正直１点取れたらラッキーです。」
「それは今の打線でもか？」
「……多分テレビで見ましたが一年の時の成宮さんよりも大分怖いです。もしかしたら１４０後半はもう出ている可能性もありますしそれにスプリット覚えられたら。」
「確かに一年でそれは怖いな。」
「……それに全国準優勝投手石貝や決勝で投げた羽島はまだ中三ですからね。末恐ろしいですよ。でも、それだけでも全国大会に行った意味はありましたね。」
同世代次世代の怪物
それが会えただけでも収穫できた試合だった。

「そういえば、大門中といえばお前と前田って同級生だったんだろ？」
「はい。一応幼馴染ですが。」
「……ぶっちゃけ付き合ってるの？」
御幸先輩の言葉に疑問に思う
えっ？俺が美帆と付き合っているかって？
すると急に殺気が俺を襲う
「美帆ですか？いや付き合ってませんよ。」
俺はなるべく動揺しないように言う。これは回答を間違えると完全に先輩に殺されるパターンだとわかりきっていた
「へぇ～でも前に飯分け合ってたよな。それにお前前まで晩飯食うとき前田と食ってたじゃん」
「まぁ、幼馴染ですし。」
「その幼馴染って便利だな。」
「……てか元々親父と美帆の母さんがいとこ同士で仲良くしてただけなんですけどね。物覚えついた時から一緒にいたんで別に飲み物でも俺が口つけたもの普通に飲みますよあいつ。てか野球やってる時なんか飲み物分け合う時いちいち女子専用とか決めるの面倒でしたし。」

実際俺の飲み物を美帆が飲むことは多々あったし
「それにあいつ俺に毒味とか言ってはちみつレモンいりのおにぎりとか作ってきますから。」
「……それって美味しいか？」
「美味しいと思います？」
あれは本当にひどかった。意識が失うほどのまずさであればいいんだけど。じわじわとまずさが口いっぱいに広がっていた。
「まぁ、どちらかというとライバルって方が近いと思います。お互いに競い合うことが多かったですから。」
「……へぇ～。」
「一気に興味失せましたね。」
と言いながら各自遊んだりしていたけど
いつも騒がしいはずの沢村が変に黙り込んでいたのが気になった
「……お願いします。」
5日目俺はライトの守備についていた。
前園先輩が打ったボールは右中間深いところへ飛んでいく。
俺は全力ダッシュで最短距離を走りジャンプキャッチでとる

……やっと取れた
俺は荒れた息を吐きながら少し達成感に包まれる
さっきまで取れなかったギリギリの距離
それを繰り返し打ってもらうことによって守備範囲を広げていた
後はどうやって送球体制に入るか
それが俺が課題だ
汗をユニフォームで拭い俺はライトへと戻る
「おい。おい。こいつどんだけ守備範囲広いんだよ。」
「打って走って守れる。こいつ化け物か。」
そんな声が聞こえてくるけどまだ足りない
昨日言った選手はこの先絶対にどこかでぶつかる相手だ
そいつらからは本当に1点が重い
唸る豪速球
鋭く曲がる変化球
正確なコントロール
どれもすごい武器だ
そして俺たちのチームにも

長身から投げられる鋭いカーブ
コントロール抜群のサイドスロー
唸りそして重い豪速球
そしてムービングを使う変則フォームのサウスポー
……全国でも通用できるだけのピッチングができる投手が４人もいるんだ
「ライト。」
ボールが飛んでくる。しかしボールの勢いは死んでいて前に落ちそうな打球
俺はそれを追いかけボールを追いかける
……ピッチャー陣を支えるのは俺たち野手なんだ
ピッチャーが
メンタルが弱かろうと
打たれ弱けれど
どれだけ試合経験がなかろうとも
俺たちがピッチャーを助けるんだ
俺はスライディングをしてボールを掴む
歓声が聞こえるが俺は全く違う
負けてたまるか

置いていかれてたまるかよ
そして俺は立ち上がりセカンドに素早く正確に胸元に投げ込む
この俺の武器で負けてたまるか
ピッチャーやバッティングに関したら誰かに負ける
でも元大門中キャプテンとしてここだけは譲れない
「もう一丁お願いします。」
俺のところに飛んでこい
全部アウトにしてやるから
「変われ。俺が打つ。一年小湊は外れていろ。」
そしてついに監督がバットを持つ
そして始まる前園先輩より厳しいノックに俺は必死についていく
どんな鋭い打球でも体で止め
ギリギリで取れるボールには食らいつき
基本をしっかりこなす
体で覚えて来たんだ
どんだけ苦しいことでも
どんだけ狭き門だろうけど

俺はここだけは譲らない
「もう一丁お願いします。」
絶対に負けたくない
一年だからスタメンに入れない？
そんなことないだろ
足を動かせ
頭で判断するより先に体を動かせ
自分の限界を超えろ
「もう一丁。」
声を出せ
……生意気だけど
プレーで全部見返してやればいいんだよ
「もう一丁。」
どんだけ先輩が倒れようとも俺はここに立ち続けノックを受け続ける
もう限界にだけど
足がもたついてても
一年である俺が先にリタイヤしてたまるか

「もう一丁。」
「……砂田行くぞ。」
そしてボールが飛んでくる。真正面のボールを掴み送球する相手を探すと
「砂田。」
すると結城先輩がいつのまにか立ち上がりバックホーム中継の位置にいる
俺はそのミットの位置ドンピシャに送球を送る
「ナイス送球。」
「……ナイスガッツです。」
俺は拳を結城先輩に向ける
結城先輩の顔はまだやる気だ。
三年間の重み
俺にはそれはないけれど
一年や先輩方の代表としてここに立っているんだ
無様なプレーだけは絶対してたまるかよ
すると他のポジションの先輩方も徐々に立ち上がっていくのが分かる
もう手も足も感覚がない
それでもこのチーム一員であるために

「よしラスト一球。最後まで集中力を切らすな。」

「「「はい」」」

そうしてラスト一球俺がきっちりととり

地獄のノックが終わりをつけた

合宿７日目

合宿７日目

大阪桐生との練習試合の日になった

「……本当にやるんですか？」

「あぁ。沢村はとにかく降谷にはコントロールの大切さを教えさせるには丁度いいだろ。」

試合前に珍しく御幸先輩に呼び出された俺は今日の試合方針について話されていた

「まぁ。そうですね。今のままじゃただの速い球を投げる一年投手ですから。」

「お前も言ってること相当だぞ。」

「事実ですし。」

俺は顔色一つ変えずに言うと御幸先輩は笑う

「それにコントロールも高いですし毎バッターごとに全力投球。正直全員を三振に抑える気しかないんでしょうが。大阪桐生相手にそんなことは通用しませんしね。元々ストレート系に強いですし。外野ノック状態になりますね。何発かスタンドに運ばれるんじゃないですか？まぁ、沢村の相性は悪いとは思いますが。なんか最近美帆が沢村の

ことで隠しているんですよね。」
「……前田のことだよな。マネージャーの？」
「はい。クリス先輩に監督の許可のもと合宿中は沢村の面倒は美帆が見てたらしいですが。多分チェンジアップでも教えているんじゃないですか？」
「は？チェンジアップ？」
「前に沢村が覚えさせるべき変化球に俺と美帆はチェンジアップって答えたんです。沢村の投球スタイル的に直球中心になりますから緩急を織り交ぜると変則フォームでタイミングが取りづらいのにさらに緩急で相手バッターの打ち気をそらすことができますから。」
「……」
　すると目を見開く御幸先輩
「それと送球の送り方のためにフォーシームの握りだけ教えてあげました。」
「あっ。それは助かる。」
「まぁ全部の基本となる握り方ですし。フォーシームもムービングの一つですからね曲がらない速球として。」
　俺は少し笑ってしまう
「まぁ、沢村は正直低めに集まればいいんですが、甘いとすぐやられるでしょうね。一回

打席に立った時に球威は感じませんでしたから。できればインコースかアウトローで仕留めたいですね。」
「……へぇ～よく考えているじゃないか。」
「まぁ、あんな面白いピッチャーが同級生に二人もいるんですよ。さすがに気になりますって。正直受けている御幸先輩が羨ましいって感じます。」
俺もキャッチャーの適正があれば受けてみたかったし
「それで本題に戻りますけど、かなりハードですね。降谷はスタミナ面でも少し心配ですから。」
「だから二人で１試合投げ抜いてもらうんだよ。でもそうなってくると。」
「……まぁ、怪我ですよね。分かりました。降谷がランナーに出たらなるべく無理はさせないようにします。」
「悪い。助かる。最悪代走で出てもらうことになるから。」
「まぁ、大阪桐生戦に出れないのは残念ですけど明日の２試合出してもらえるのでそれで妥協します。」
まぁ、監督からも昨日から言われてきたことだしな。
昨日俺は監督に呼び出しをくらい今日の試合のことについて話されていた
俺は控えで疲れを抜くことを優先にすること

それで明後日の稲実との試合でプレッシャーをかけること
……無茶なことをいうなあの人
まぁ、確かに隠す意味はないけどさ
「後少しだけいいですか？」
俺は御幸先輩にあることをいうと驚いているようにしているが頷く
そして俺は試合前にあいつの元に向かっていった
一回の表
「健斗もう一球。」
「はいはい。三回までな。」
キャッチャー用のプロテクトを着けた俺が沢村に返球する。
こいつ分かりやすいな。
俺はただキャッチャーミットを構える
子供のようにはしゃぐようにボールを投げ込む
なんで普通のストレートが投げられるようになっただけで驚くんだよ
俺が構えているのは右バッターからみて胸元のインコースのみ
俺が教えたのはフォーシームの投げ方とスピンをのったボールを投げかた
そしてそれを身につけているっていうかスピンののった伸びのある綺麗なストレー

ト投げれるじゃねーか
「次。ストレート。」
と俺がいうと
カキィィィンと金属バットの音がきこえセンター前にボールが弾き返される
あらら。やっぱそうなるか。
全国区の学校で速球一つで戦うことは難しい
それは軟式も硬式もだ
「…えっ？」
流石に驚く沢村に
「……沢村みとけ。これが昨年甲子園準優勝校大阪桐生だ。」
俺は立ち上がり沢村に呼びかける
「……一旦ベンチに戻るぞ。後は投げたくなったら宮内先輩に受けてもらえ。でもお前も終盤あの人たちに投げるんだからな。」
俺はベンチへと戻る
大阪桐生高校
去年の夏準優勝今年の選抜出場の強豪校
……沢村と降谷が今年使えるかのテストには持ってこいの学校

てか贅沢すぎるともいうけど
「春市。一応降谷にドリンクだけ用意してやってくれ。あいつ体力ねぇし。」
「あ、うん分かった。」
俺はキャッチャーのプロテクターを外していると
「沢村の球はどうだった?」
監督が話しかけてくる
「そうですね。相変わらず気持ち悪かったです。なんで今日初めてフォーシーム投げるやつがあんなにスピンの掛かったボールを投げれるのか本当に不思議で。ただムービングが少し疲れのせいか曲がりが少なかったような気がします。」
「……そうか。通用はすると思うか?」
「今の降谷よりはすると思います。さっき受けてたらインコースに投げられたので後はアウトローは少し甘かったですね。それに多分マシンで打ち込んでるぶん沢村のフォーシームもムービングもそこそこは通用するかと。まぁ問題は金属バットってところですかね。」
芯じゃなくても飛んでいく金属バットは沢村にとって天敵と言っていいだろう
「でも、低めか沢村が強気の姿勢で一球でもインコースに投げこめたなら夏の本線でも使えると思います。」

あの打線は見れば見るほど恐ろしい打線だ。コンパクトスイングなのにスタンドに運ぶバッターまでいるし、
そんな高校相手にインコースをつけたのならばそれだけでも大きな収穫だろう
「そうか。分かった。」
といい試合に戻る片岡監督。俺も試合の方に目線を戻す
すると次のバッターがセンター方向への打球を打つでもそこは
小湊先輩がダイビングキャッチをしショートの倉持先輩に送るそして一塁転送してアウト
センター前がゲッツーにしちゃったよあの先輩
まぁ俺もできないってわけじゃないけどでもあれは信頼関係が成り立ってなければできないプレーだ
すると下を向く春市まぁ言いたいことはわかるけど
「ピッチャーを助けたいからあぁいうプレーができるんだよ春市。」
「えっ？」
「…合宿のつかれで疲れてるのは誰も同じだ。でも、今打ち込まれている降谷はもっと精神的にも疲れているんだよ。それをバックが助けてあげたいって思うことは当たり前だからな。それだからこそいつもと同じようなプレーを出来る。……まぁ、バックに

は俺たちがいるからもっと思いっきり投げろって言っているんだよ。プレーで語るっていうのはこういうことだろ。」

疲れている時こそ守備は投手を助けようとする

「…だからこそプレーに気遣われると嫌なんだよ。自分だけがピッチャーを助けようとしているのかって考えてしまうから。」

「……」

「お前も小湊先輩と倉持先輩のプレーをよく見とけ。もし小湊先輩が怪我をした時出場するのはお前なんだから。」

俺はそう言ってヘルメットをかぶる

さて俺は俺の仕事をしようか

4回の表

……開くとは思ってたけど流石にここまでくると流石に手を出したくなるな。

俺は試合展開を見ながらそう思う

11対2

ほぼ四球のランナーがたまりそれをちゃくちゃくと返される

……こいつにコントロールのファーボールについてもう少し口すっぱく言っておくべきだったか。

俺はため息を吐く。
てかこいつ都合のいいこと以外は無視するしもう少し話を聞いてくれればいいんだけど
まぁ、エースとしてはいいことなんだが
球数も１００球を超えてるし
「監督。一応アップしてきます。」
「あぁ。」
昨日言われたことを思い出す
１０点差ついた時に限り白州先輩と交代する
…正直このまま引きずってほしくはないけどな。
俺は試合には出たいがさすがに立ち直って欲しいって気持ちが強かった
しかしどうしようもないので俺はブルペンへ行く
「春市悪い変わってくれ。」
「えっ？うんいいけど。」
「沢村アップするぞ。」
すると悔しそうにマウンドを見つめる沢村。どうやら降谷の実力は認めていたらしい。

「……うぅ。う。」
とプルペンに去る沢村にため息を吐く、本当俺の話聞いてくれよ
「悪い。春市。」
「あっ。うんいいよ。」
そうしてキャッチボールを始める。
そうしてアップしていると
「タイム。」
ランナー一、三塁になったところで
すると御幸先輩が慌てたように駆け出す
「どうしたんだろ?」
「降谷の気持ちが切れたか?でも置きにいったボールなかったしその前兆はなかったはずだけど。」
「……?」
そうして一度アップを切り上げて見ていると
急に御幸先輩が笑い出す。
……何話しているんだ?
そうしてしばらく経った後キャッチャーの位置へと戻って行く御幸先輩

そして初めてど真ん中ではなく外角に構えた
……課題クリアか。
どうやらどうやったら打たれないかかどうやったら点を取られないかのどちらかだろう
でも結局気持ちが切れなかったのは評価対象だな
そして初球
外角に勢いのあるボールにバッターが出てセンター定位置に飛んで行く
そしてとった瞬間サードランナーがスタートを切る
「う～死ねコラぁー」
と取ってから素早い動きでホームに早い送球が送られる
「……すげぇ。」
それはまさに矢のように一直線に御幸先輩のミットに吸い込まれ
「アウト!!」
サードランナーを刺した
さすが元ピッチャーだけあって肩が強い。
俺も元ピッチャーだけどコントロール重視してる分あそこまで早い球は投げれないし

それに。
「どうしたの？」
「あっ？いや何でもない。続けようぜ。」
俺はキャッチボールをするけど、
これ出番なさそうだな
多分もう崩れないだろうし
まぁ、サポートに回ろうか
「……てか沢村肩作らないでいいのか？」
「……さぁ？」
あいつブルペンに入れよ

リード

4回の裏
「笑っているな。」
「うん。笑っているね。」
俺はキャッチボールをしながら春市と話す
「……試合好きなのはわかるけど怖いな、」
俺たちが話しているのは大阪桐生のピッチャー館さんのことだ
笑い顔が本当に怖い
怖いっていうか恐ろしいっていうか
でも
「試合出たいなぁ。」
あんな風に笑ってたらこっちまで出たくなるな
「てか回が増すごとに球威上がっているな。」
「うん。さすが去年の準優勝投手なだけあるね。」
「尻上がりに調子を上げるピッチャーか。しかも多少甘いコースにいってもストレート

の力で押し切ることができる。それにあのスライダーもそうとうきれてるし。速球派ピッチャーとしてお手本と言っていいんじゃないか?」

まぁ少しだけ気になるところは

まだ一球も決め球であるもう縦スライダーを一球も投げていないってところか。

そして次のバッターの坂井先輩も三振してしまう。

立ち上がりも要所はしめてるし球数もここまで71球

初回の小湊先輩のが効いてはいるけどそれでもいいペースだ

「……ん。これくらいでアップはいいや。悪いな付き合わせて。」

「ううん。大丈夫だよ。」

俺と春市はベンチに戻る。9点差あるからいつでもいける準備はしてあったけど

まぁ、打たれないだろうな。

降谷は打たれないだろう

何か御幸先輩隠してるそうだったし

そして5回の表

先頭バッターは四番館さん

てか四番でエースか珍しいけど

実力は確かなんだよな

２打数２安打１四球
ストレート系を広角に弾き返せてライトフェンス直撃のツーベースを打たれている
「……ここ重要だな。」
感覚で分かる
この場面は流れが変わるターニングポイントだと
かなり打ち気なピッチャーだし
まぁ初球は見逃すからどのコースっていってもど真ん中だろう
そして初球
「……えっ？」
流石に俺も絶句してしまった
ゆっくりと山並みに投げたボールがキャッチャーのミットに収まる
でも意図は分かった
次は打ち気のバッターを沈む球で空振りを取る気だ
となると球種はフォークかスプリットどちらかだろう
……上手いなこの人
リードが強気で相手がこっちのペースに乗せやすい
さて御幸先輩はどっちを選んだんだろう

少し楽しみしながら俺は次の打席をみる
そして第二球目
ストレートのように早い速球のように見える
あぁそっちか
俺は見た瞬間確信する
そして打者の手元で急激に落ち、御幸先輩が捕れずに後逸してしまう
……やっぱりスプリットか。
もうこれで勝負は決まったのも同然だろう
「沢村、お前アップしとけよ。次の回からお前投げるんだから。」
「……」
するとジッとマウンドの降谷を見つめる沢村
「……こいつ。」
俺はため息をつく。本当にこいつら話きかねぇな。
そして思った通り館さんは高めの釣り球で空振り三振
てか、こいつ少し表情かたいよな
……もしかして緊張をごまかそうとしてるのか?
まぁ最初の登板でもあるし緊張するのも無理はないけどさ

ちょっと意外だなこいつ
案外緊張とは無縁そうなのに
そして降谷が三者三振させて帰ってくる。
こいつがペースにはまったら本当怖いよな
俺は笑ってしまう
「降谷ナイピッチ。次ピッチャー動揺しているから。初球の甘いストレート狙っていけ。」
「えっ？」
「一発打ってトドメ刺してこい。」
するとコクリと頷き打席に入っていく
さてと俺はランナーコーチはもう交代してしまったし少し沢村のことを御幸先輩と話すか
「御幸先輩。」
「ん？どうした？」
「いや。沢村が少し硬いんで少し緊張ほぐさないとまずいのとちょっとムービングのキレが上がっている分少しだけ変化が小さくなってます。その代わりといってなんですが、打者を立たせない場合にはインコースの球はフォーシームとムービングともに投げ

込めてたのでインコースはガンガン使っていいと思います。」
「……へぇ～」
「ってかインコース以外沢村は投げれる球ないと思います。」
　ぶっちゃけ沢村といえど甘いコースは厳禁。アウトローに構えると高めに浮くし、今のところできるのはこれで精一杯だ
「あとフォーシームなんですがムービングと同じで暴れますよ。俺完全捕球一回もできなかったので。」
「……お前がか？」
「……なんていうんですか？綺麗なストレートなんですけどムービング以上にタイミングが掴めにくいんですよ。どちらかというと沢村のフォーシームはジャイロボールに近いですから尚更取りづらくて。打席に立った時も急に加速したっていいましたよね？あれをどんどんテンポよく投げ込んできますから。……受けてみたら分かりますよ。沢村のストレート。」
　と話していると
　大きな金属音が聞こえてくる
　そして
「あいつ打つ方も化け物かよ。」

俺は笑ってしまう。あいつ凄すぎるだろ。
センター後方にぶち込みやがった。
結構冗談で言ったのにそれを実行する方も凄いよな
「……御幸先輩は初球難しい変化球打ってピッチャーゴロだったのに。」
「うっせ。」
「……すいません。口に出てました。」
まぁ、降谷を立ち直らさせたのは完全に御幸先輩のおかげだが
「すいません。時間とらせてしまって。」
「あぁ。大丈夫。沢村がテンパってるって情報はありがたかったから。」
「じゃあベンチに戻ってます。」
と俺はベンチへ戻る
そしてこの試合はついに後半を迎える

ピンチの時こそ

6回の表
沢村の初登板
「まぁ、緊張するなっていう方が無理あるよな。」
俺は笑ってしまう
一軍に上がって俺はもう2ヶ月半が経過した
俺は初打席にまぁヒット一本打ってから落ち着いたわけだし
ある意味プレッシャーはかかるけど
「まぁ、一つ目のアウト取れたら落ち着くだろ。」
とりあえず俺は沢村を見守る
ブルペンで投げたボールを投げられたら大阪桐生でも攻略は難しい
……気持ちのこもったボール
それが沢村の武器だからな
「……栄純くん大丈夫かな?」
「さぁ。まぁでも見守るしかないだろ。」

俺達はただ見ることしかでっきないし
まぁあいつの後ろ守ってみたかったけど
そして七球の投球練習がおわりボールが沢村のグローブへと納まる
そして沢村が後ろを向き息を吸う
どうした？と思っていると
「ガンガン打たせていくんで、おねがいしゃす。」
大声で守っている先輩方に向けて大声でそう宣言する
「……なぁ、春市？」
「……なに？健斗くん？」
「あいつよく恥ずかしがらずあんなことできるよな。」
俺じゃ真似できねぇぞこれ
「アハハ。でも士気は上がっているみたいだよ。」
「……まぁ、バックを信じて投げるって言っているもんだしな。……そりゃやる気出るだろ。」
俺だって、ぶっちゃけ単純だと思うけどやる気は出るし
「まぁ、落ち着いてはいそうだな。なんかバカっぽいところみると。」
「……相変わらずだね。健斗くんは。」

「…まぁ事実だし。でもどちらにしろ初球が重要だぞ甘いコースだったら捉えてくるからな。」
初球のムービングそれが一番大事なんだが。
そして沢村が振りかぶる。御幸先輩の構えるコースは当然インコース
そして初球沢村の投げたボールは
……甘い
少しだけうちに入ると思いきや少し少しだけインコースへ入っていき
御幸先輩のミットにおさまる
「ストライク。」
「ナイスボール沢村!!」
声を出し沢村を鼓舞する
初球からドンビシャかよ
さすがに震えが止まらない
緊張もほぐれてるし十分すぎる
てか相手バッターが驚いているのが見える
多分フォームのことだろう
まぁこの調子じゃ大丈夫か

と少し安心した矢先
「デットボール。」
二球目が打者のに当たる。
……あいつ何かやらかさないと気が済まないのか。
でも、攻めた結果なんだよなぁ
あいつのフォームは誰にも真似できないぶんさらに腕のしなりのせいで余計にコントロールが難しくなる
「沢村切り替えろ。攻めた結果だろ。」
「栄純くん落ち着いて。」
とりあえず死球を出したことは仕方ない
「ランナー出した後大事だぞ。とりあえずバッター集中。」
とりあえず一軍初登板だ。しかも相手は大阪桐生
一点覚悟で一つずつ取るしかないだろ。
正直牽制はここは得策じゃない。
牽制が苦手なことがわかれば積極的に走られるし最悪モーションを盗まれるきっかけとなる
それならバッター集中で一つとった方が得策だろう。

そして沢村が御幸先輩のサインに頷きそして
牽制？
沢村が投げたのは一塁。でも足はクロスしてただから
「ボーク。」
するとあぁっと声がする
観客のことだろうけどでもここは牽制だけはするべきではなかった
……今のでさすがの沢村も動揺するだろう
そして次のバッターの初球はインハイに外れボールになる
「……でもランナー気にしなくなっただけマシか。」
ランナーは二塁。キャッチャーは御幸先輩なだけあって三盗はありえないだろう
いきなりの勝負所だぞ
ここでまたインコースに構えるとすると頷く
沢村がなげると今度はちゃんとコースにくる
そして打者が打つとボールはショート前にボテボテのゴロが転がる
……打者がきちんと振り抜いているからこういうあたりになりやすいんだよな
倉持先輩がとるがどこにも投げられずノーアウトランナー一、三塁か。
ここは普通の公式戦だったら一旦マウンドに集まりたいけどな

俺は御幸先輩の方を見る。すると首を横に振る御幸先輩
フォーシームはまだ使わないらしい
……ここが多分勝負所だろうな
「……沢村。」
と呼びかけ落ち着けとジェスチャーする。それに頷くと沢村はまたピッチングへと集中する
こう言った時はジェスチャーや声掛けでどうにかするしかない
俺たちは一年だからこそできることがある
監督も俺たちに完璧なんて求めてないはずだ
だから前に進む姿勢を見せろ。
「……」
沢村は意外にも落ち着いているそれを見てまたインコースに構える御幸先輩
多分一塁ランナーは牽制がないってわかっているから走ってくるだろうし
そして沢村は一塁ランナーの方を見る。そして素早い動作でホームの御幸先輩へと投げた
しかしそれはど真ん中
あいつクイックになるとコントロール効かないのか

もちろん打者はそれを見逃さずに捉える。金属音がなり鋭い打球はワンバンして沢村のミットに入る

……そして沢村が目で三塁ランナーを牽制し三塁ランナーはホームに帰れなくなる

「沢村ボールセカン。ゲッツーとれるぞ。」

一塁ランナーはクイックがないと思ってたのか走ってなかった

沢村がショートに送りショートの倉持先輩がファーストに送球する

1ー6ー3のダブルプレーかよ

ミットに入ったのは偶然だし一塁ランナーが走ってなかったのは相手のミスだ

……運に助けられたな沢村

俺は少しだけホッとする

「沢村後一つ油断するなよ。2アウトでもランナー三塁だからな。」

ちやほやされている沢村に関してしっかりと締める

沢村も分かっているのか頷きマウンドに集中する

てかピンチの方が落ちついてないか？

そういえば大事なところで味方がエラーしてもこいつ笑って励ましてたな

……これも沢村の才能ってことか

やっぱ面白いなあいつ

そんなこと思ってしまう
それに今のあいつの姿試合で投げるのが楽しそうにしてるな
ピンチでもそれに負けない心は本当にすごいと思っている
そして次のバッターはインコースを詰まらせショートゴロに詰まらせこの回を凌ぎきる
まぁ、とりあえずは及第点だろう。

狙い打ち

「お前な。酷すぎたぞ。牽制は失敗するは甘い球多すぎるし、あのゲッツーだってほとんど運がよかっただけだぞ。」
「本当砂田の言う通りだぞ。全く。」
「ぐぬぬ。」
　と俺と御幸先輩が沢村を攻め立てると悔しそうな表情で俺を睨む
「……まぁ。インコースに決まった最後の球と初球は良かったけどさ。最初のデッドボール。攻めた結果としても先頭打者の四死球は絶対にダメだっていったろ。」
「でも。御幸先輩がインコースにしか構えてねぇじゃん。」
「お前今日俺が受けたアウトローが全部高かったから言ってるんだろ?せめて後ボール一個分は低くないと使えない。降谷の速球でさえあそこまで運ばれてるんだぞ。お前だったら最悪場外まで持っていかれるぞ。」
「じょ、場外?」
「それほど強いチームなんだよ大阪桐生ってチームは。だから今一番通用できるインコースを投げさせているんだ。」

大阪桐生のことを知らないのか知らないけど沢村は気づいた方がいい
これは沢村自身が夏の戦力になるかというテストなんだと
「……まぁ。大阪桐生のピッチャーを見とけよ。初回のツーベースの後は結城先輩は勝負を避けられてる。でも見とけほとんどインコースにしか投げないから。」
「えっ？」
「お前なんかリード詳しくないか？」
「俺追い込まれるまで狙い打ちしているんで。」
元々当てるのはファールボールだけで精一杯だし、追い込まれてからはヒットを狙わない。
「あぁだからか。」
「ついでに降谷のスローボールの後のスプリットも読めましたよ。」
「まじで？」
「マジです。それに一応元ピッチャーなんで俺。リードについてはよくキャッチャーと話してましたし」
「へ？」
と御幸先輩たちと話していると
「ファーボール。」

「結局インコース4つか。徹底してますね。」
徹底的なインコース攻め
「あぁ。この打席の増子さんアウトコースの球を打たされるな。」
「はい。多分インコースから外に逃げるスライダーってところですか?二打席凡退して力んでますし。」
「えっ?」
それも初球からな
そして思った通り初球低めにインコースから外に逃げるスライダーを打ち上げてしまう。
「な。いったろ?キャッチャーっていうのはどうやってアウトにとるか。どうやったらピッチャーを一番生かしてくれるかを考えてくれるんだよ。……ピッチングとリードって奥が深いだろ。御幸先輩はお前の持ち味を一番生かすリードをしてくれているんだ。お前はそれを信じて投げればいいんだよ。」
「……それ俺のセリフ。」
御幸先輩が苦笑しているが
「まぁ。御幸先輩は打席に集中ってことで。」
今日ノーヒットだしもうそろそろ打って欲しい

「砂田。一点足りないがバット振って準備してろ。御幸がでたら代打だすぞ。」
「はい。ってことで俺のチャンスのためにも頑張ってください。」
「うっせ。」
　そう言ってバッターボックスへ向かっていく御幸先輩
「……砂田って御幸と似てるよな。人付き合い以外」
「……聞こえてますよ。倉持先輩。」
　俺そんなに性格悪いかな？
「どちらかというと腹黒いと思うんだけどなぁ。」
「……自覚はあるのかよ。」
　とバッティンググローブをつける瞬間
「館、ランナー走って。」
「あぁ。完全盗んだな。結城先輩。」
　相手ピッチャー完全に見てなかったし
「……ランナー二塁か。」
　御幸先輩チャンスだと一気に出塁率上がるしなぁ。
　俺もチャンスには強いけど（中学時代１９―８）
　そして館さんが二球目を投げるとまぁ多分アウトコースで勝負かな

そして予想通りにアウトコースにストレートが来る。俺ならこの球を流すのだけれど

するとやっぱりよんでいたのか思いっきり足を踏み込み

外角のボールを無理やり引っ張った

「……マジかよあの人。」

力を力で押し切りやがった。俺には絶対に無理な方法だ

ライン線に引っ張って御幸先輩は二塁に到達していた

おっ？ラッキー。

次の狙い目の球がちょうどインコースだったので俺は少しだけ笑う

「すいません。代打砂田で。」

主審に告げると相手チームにその名前が伝わる

……実は大阪桐生からもスカウト来てたんだよなぁ

俺は少しだけ苦笑してしまう。もし青道にいかなかったら行こうと思っていた高校の一つでもあった。

俺はサインを見るすると

監督はノーサイン。

……まぁ信じてくれているってことでいいのかな

俺は少しだけ息を吐き集中力を高める
代打とは流れをひきよせたり、チャンスをものにする役割を持つ
今回はピッチャーの心を折ることだろう
それならもちろん一番ピッチャーが自信を持っている球を打つしかないよね
そして館さんが振りかぶる
さっきの御幸先輩のタイムリーでアウトコースは投げにくくなっているはずそれなら
インコースにストレート
それを俺は合宿中何度も同じように打ったポイントで捉えるように強振する
俺は思いっきりボールがバットに触れた瞬間だけ力を加えボールをはじき返す
やっぱり早いし重い
少しだけポイントが外れたし。
でも弾き返されたボールはライトの頭上を越えていきライトスタンドに突き刺さった
「……」
俺は片手を上げる
「入った!!」

「おいおい。マジかよ。」
そんな声が聞こえてくる
てか
気持ちいい
正直試合で初ホームランを打った感触は最高だった
ダイヤモンドを一周まわりホームベースを踏む
「ナイバッチ。お前狙ってたな。」
「はい。さっき御幸先輩はアウトコースの球を引っ張ってくれたおかげでインコース狙いやすかったです。でも結構しびれました。」
手を振り軽く笑う
「それにピッチャーは動揺してなさそうでしたけどキャッチャーは動揺してたらしいですね。普通は一球外しますし正直初球から入ってくるとは思わなくて少しだけポイントずれました。」
「十分だよ。」
とハイタッチで一回叩く。
「よっしゃ!!俺も続くぞ!!」
すると沢村が勢いよくバッターボックスに向かう。

「そういや、降谷はバッティングいいですけど沢村ってどうなんですか？俺沢村とバッティング一度も重なってないから知らないんですが。」
「ん？あいつ？見たら。」
「ストライクバッターアウト。」
「……早すぎません。」
と苦笑してしまう。
どうやら守備には門田先輩が付くらしく準備をしていた。
すると降谷のところで相手の監督が出てくる。ピッチャー交代らしい。
まぁとどめさせたし十分だろう
でも昨年全国準優勝投手から打ったホームラン
手応えがまだ手に残っていた
「今日はありがとうな。」
「はい。ありがとうございました。」
と相手チームのキャッチャーの小早川さんと握手する
「まさかわいの配球がよまれてるとは思わんかったわ。」
「いや。得意球をピッチャーは投げたいだろうと思ってたましたから。御幸先輩は外角綺麗に打ち返してたんで狙いが絞られましたから。それに大阪桐生の高校の練習に参

加させてもらっていい刺激になりました。」
「しかしまさか青道におるとは思わんかったわ。スカウトが監督に愚痴漏らしてたからな。」
「それっていいんでしょうか。それに結局うちの負けですしね。」
　あの後沢村はあの後もムービングだけで4回を投げ2失点の好投。降谷も課題はしっかりとしていて今後の活躍に期待できる
「しかしええなぁ。今日投げたピッチャー二人とも一年やろ？形の違うピッチャーがふたりおって砂田がいたら甲子園優勝狙えるんとちゃう？」
「あの二人に比べれば俺はまだまだですよ。今の所狙い球を絞って追い込まれたら俺は当てることが精一杯ですし。」
「謙遜せんでええで。」
「違いますって。……でも三年に上がるまでには一回は甲子園でお会いしたいですね。今度は館さんの縦スラ見せてくださいね。俺去年の夏の優勝投手の決め球楽しみにしてたんですから。」
「おぉ。それじゃあ次は甲子園でまた会おうな。」
「はい。お手柔らかに。」
　ともう一度握手をしてから小早川さんはバスに乗る

「……すげぇ。硬かったな。」
俺はさっき握られた手を思い出す
素振りとピッチャーの管理は大変だろうけど
それでもあの人たちはやっているんだよな
やっぱりキャッチャーってすげぇよ
俺には到底できそうにないポジションを御幸先輩は一年の頃からスタメンを守ってきたと思うと
大変で面白いポジションなんだろな
「……甲子園か。」
夏の予選まで後1ヶ月
俺たちの夏はどうなるのか分からないな

俺と美帆

合宿８日目
「川上先輩ツーアウトです。」
「ここで締めましょう。」
今日の第一試合稲実対青道
俺は四番ショートでスタメン起用されていた
ピッチャーは川上先輩でキャッチャーは宮内先輩
セカンドには春市が入っている
カキィィィン
鋭い音が聞こえる
鋭い三遊間の辺りに俺は飛びつくとグローブに収まる。
そして俺はすぐ立ち上がりファーストに送球する
「アウト。ゲームセット。」
５対４
なんとか稲実を振り払った

「ウオオオ。あのショート今日何個目だよ。」
「三回の4—6—3のゲッツーもさすがだったぞ。」
「倉持と亮介にも劣ってないんじゃないか？」
　と歓声が聞こえる
「ナイスプレー。健斗くん。」
「うわぁ。久しぶりにショートで出たけど。やっぱり結構飛んでくるな。」
「いや、普通取れないところでも全部取ってたからだと思うけど。」
「レフトに降谷いるしなるべく取っておきたかったんだよ。あいつ未だにゴロをトンネルすること多いから。」
　外野のエラーはかなり致命的だそれだからな。
「てか今日俺勝負避けられたし。結構走ったからな。ちょっと合宿の疲れも消えきってないし。」
　今日の成績は5打席2打数1安打1打点3四球2盗塁
　初戦だけでこんだけ走るって中学でもそんなになかったからな
「……5対4で青道の勝ち。礼。」
「「しゃー。」」」
　俺はベンチに戻ると

「……ありがとうな。」
川上先輩が急にそんなことを言ってくる
「今日は助けられたよ。」
「いや。これが俺の仕事ですから気にしないでいいですよ。」
とスポーツドリンクを飲みながら俺は苦笑する
「元々守備に関したら野手の仕事なので。それよりも川上先輩もう少しせめてもよくないですか？スライダーの配球が後半多いような気がしたんですが。」
「えっ？そうか？」
「後半少しスライダーに的を絞ってきてましたから。ストレートを首振っていた時ほぼスライダーでしたよ。」
実際のところ川上先輩はスライダーに頼りすぎているふしがあるからなぁ
サイドスローピッチャーは結構貴重だから腐らしておくには勿体無いし
試合でも最近は好リリーフだったからな
今日の丹波さん次第では……
それに丹波さんと俺ってあんま話さないんだよなぁ
合宿中のフリーバッティングの時も俺あの人から打ちまくってたし
せめて落ちる球が一球種あればな

まぁ、でもカーブは全国区並みだしな
軟式経験のある俺にとってスライダーとカーブそれとチェンジアップはよく中学の時に対戦経験があるけどな
あんなに曲がるカーブはそうそうないんだがストレートとカーブだけじゃ絞りやすいし
「ってか春市ベンチかたづけねぇと。修北すぐくるしダブルヘッターだから急ごうぜ。」
「うん。そうだね。」
と片付けて荷物をまとめすぐに外に運び込む
そうしていくと肩を伸ばし体を伸ばす
やばいな。体が重い
昨日はほとんどオフに近かったからいいんだけど、いつもよりも盗塁も守備も劣っているのを感じる
……最後のやつだって普通なら飛びつかないで普通に取れたのに
派手さより確実性を優先する俺にとっては少し納得がいかなかった
……やっぱり完成度高いな。
俺は稲実対修北の試合を見ながらそう思う
見ているのは稲実のエースの成宮さん。

俺が打ってみたいと思っていた一人だった
俺が対戦した時、稲実は第二ピッチャーの江口さんだけだった。
……それでもレベルが高いのに
俺はため息を吐く
１４８ｋｍのストレート
キレのいいスライダーとフォーク
本当完成度高すぎるんだよなぁ
去年のトラウマも払拭されているらしいし
厄介だなやっぱり
春の都大会も先発していたし完全に復活したと言っていいだろうな
「……本当に厄介だよね。」
「……お前な心の中よむなよ。」
とスコアブックを書いている美帆が話しかけてくる
「まぁ、お前とは違うタイプのピッチャーだよな。どちらかというと球威とキレで三振を狙うタイプ。まぁコントロールもいいんだけどさ。」
「……ふーん。けっこう余裕そうじゃん。」
「そうか？案外これでも余裕はないんだけど。」

「嘘ばっかり。大体打てる秘策がある時は健斗は笑っているもん。健斗今笑ってるし、何か策があるんでしょ？」
すると無自覚に笑ってしまっているのに気づく
「……まぁ、あることにはあるんだけどな。打てるかどうかは分からないけど。」
「……ふーんどんなの？」
「今はいったらダメだろ。」
俺は少しだけ苦笑してしまう
この試合を見る限り多分
俺は一つのことに気づいていた
まぁ、大したことではないが
……明らかに弱点になる要素がある
それも大きな弱点が
すると7回の最後のバッターを迎える
……修北のバッターこれ三振だな
ストレート一本狙いなのがよく分かる
そして成宮さんが最後の一球を投げる
ゆっくりとシンカー気味に落ちる遅いボールがキャッチャーミットに収まる

……チェンジアップかよ
縦と横それに緩急
それを見るけど
「……なんか嫌だな。あの見せ方。完全に舐められているみたいで。」
美帆がそういうと同じく頷く
「そうだな。それも一軍がいる中で見せられるが一番腹たつな。それもチェンジアップがあると印象付けたように見えたけど。」
「……多分あれは意識を引きつけるためのチェンジアップだよな。多分本当の試合でも1割投げればいいくらいの頻度で使うための。」
「うん。捨ててもいいと思う。」
成宮さんの決め球はストレートそれを生かすために緩急を覚えたのだろう
でもそれは見せたのは間違いだった。
「……ところでなんであんたはここにいるのよ。」
「スコアブック取りに来たからに決まっているだろ?今の試合のスコアブック見せてくれ。相手の配球見たいから。」
「あぁ。いつものね。」
といい俺は少し美帆の書いてあるスコアブックを見る

……綺麗にかかれたスコアブックには球種と別にマークが分けられていた

「……懐かしいな。それ。」

小学校の時よく美帆がいやいや言いながら書かされていたスコアブックの書き方だった。

「……そうね。私がまた書くとは思わなかったわよ。でも、今私ができるのはこれだけくらいしかないから。」

そんな声が聞こえる

「沢村に何か教えているんじゃなかったのか？」

「あれは善意よ。本当は私があのマウンドに立っていたいんだから。」

「お前、なんでマネージャーになったんだよ。」

苦笑してしまう

「お前それなら女子野球続けたらよかったじゃねーか。一応それじゃねくても草野球とか。」

「…だから健斗がいないと意味ないの。」

そんなことを言い出す

「言ったでしょ？私は健斗がいないところで野球やっても意味ないのよ。私がマウンドで立っていられたのは、健斗がいるからだもん。」

「……」

「健斗のところに打たせたら絶対にどうにかしてくれるんだもん。それに初めて全国大会へ出場権が得れる時だって一番気遣いして緊張やプレッシャーに真っ先に気づいてくれたのは健斗でしょ。」

「……何年一緒にいると思っているんだよ。それくらい気づくわ。」

俺はため息を吐く。生まれた時からほとんど一緒にいた。

美帆と俺は誕生日も1日違いで同じ病院、家も近く自然と一緒にいることの方が多かった。

スコアブックを書いていた美帆は少しだけ悲しそうに笑う

「……生意気で意地悪で自己中心的な考え方ばっかりでも監督もみんなも何も言わなかったでしょ？肘を壊した時だって諦めずに利き手を変更してまでピッチャーにこだわってたけど、あの秋大でピッチャーが私に健斗はセカンドに決まった時だって何も言わなかったよね。私を庇って肘を壊しちゃったのに。」

……まだその話を引きずっているのか

一年夏直前の5月

俺と美帆は一度俺の父さんが乗せた自動車で交通事故にあっている

美帆は抱きかかえて守ったので打撲程度無事だったのだがガラス片が俺の左肘に刺

さり俺はピッチャーとしての道を諦めないといけないことになったのだ。
「……あれはお前のせいじゃねぇよ。あの事故で生きてただけマシだろ。」
後部座席にいた俺と美帆は助かったからな。
「……そうじゃないわよ。ただ。私はそんな健斗を見ていけないといけないから。」
「……は？」
予想外の言葉に俺は呆気にとられる
「無茶して、こんどは右肘傷みかけたの忘れたの？」
「……」
「私はあの時の事件はもう気にしてないの。それよりも私にとったら今のことの方が大事だから。私は今は健斗のサポートをしたいの。」
「……まぁ、どうせ何言っても変えないだろうしそれで納得しているんならいいけどさ。」
嘘は言っていない美帆のことを見て納得したようにみせる。まぁバレてるとは思うけど深くは聞かない方がいいってことは分かっている
「でもなんでそんなに俺のことを気遣うんだよ。俺は恩返しでもないのに俺の進路に合わせるって。」
「……いいでしょ。別に。」

「まぁ、そうだけどさ。」
そこがよく分からないんだよなぁ
でも正直俺は美帆が野球をやれないことを残念に思う反面一緒に進学してくれたことを嬉しく思ってしまった
まぁ、一緒にいて楽しいしやっぱり幼馴染だからだろう。
妙に落ち着く。
元々気を使わないのだが、それでも悩み事や愚痴をこぼす時や何かあった時親よりも早く報告するのはいつの間にか美帆だった。
お互いに信用しあっているとは思っているんだけど
よく鈍感って言われるんだよなぁ
「それよりもいいの？スコアブック見ないで。」
「いや、別にいいや。少し話したかっただけだし。」
「へ？」
「いや。なんか話したかったんだよ。気分転換っていうか。」
俺は少しだけ苦笑してしまう。
「……こういった会話するだけで自然と落ち着くんだよ。バカっぽい話でもシリアスなことでも。」

結果的に少し落ち着いているからな
少しだけむずかゆいけど
「……あんた言ってて恥ずかしくないの？」
「……恥ずかしいに決まっているだろ。」
少し頬をかいてしまう。今頃顔は真っ赤だろう
そしてしばらくは無言が続きスコアブックを書く美帆の隣で軽めに柔軟をする俺がいた
するとしばらくして9回に入る
「んじゃ。行ってくる。」
俺は立ち上がり軽く腕を伸ばす
「うん。頑張ってね。」
「おう。」
と手を振ると先輩方が見ていたバックネット裏へ向かう
……さてと
「やるか。」

アクシデント

修北高校との一戦
俺は８番ライトとして出場していた。
「お願いします。」
５回の第四打席先頭バッターとして打席に入る
ここまでは３打数３安打
絶好調と言ってよかった
……息を吐き集中を高める
視野がいつもより広くなり構えている状態でどこが穴になっているのかがよく分かる
『私は健斗がいないところで野球やっても意味ないのよ。私がマウンドで立っていられたのは、健斗がいるからだもん。』
……嬉しいこといいやがって
お前からその一言を聞いて俺はやる気が満ち溢れていた
俺にとって一番の投手は相変わらず美帆である

そんなこと言われて燃えないわけないだろ
するとピッチャーが振りかぶる
ボールの回転、向かってくるスピードがいつもよりも遅くみえる
……そしてインコースに厳しめに入ってきた球に対して俺はギリギリまで引きつける
ここまで全部流してヒットにしてきたのでインコース攻めに切り替えたのだろう
でもそれよんでたわ
ノーステップで振り出したバットは少し前で捉え金属音が響く。一塁線へ強く引っ張るとファーストが飛びつくが間に合わないでライン線に転がっていく
チッ少しだけ早すぎた
流し打ちシフトで右中間を狙ったのに
しかし打球は思った以上に早くライトの横を抜ける
これはついてる
俺は全力で走るがやっぱり体が重く思った通りに走れない
俺は二塁へ向かってランナーコーチを見るとランナーコーチの楠木先輩は止めている。
俺はオーバランを大きくとりそれで二塁に戻る

……クソ。
少し疲れが溜まってきている。中学校時代は７回までだったからダブルヘッターでも１４回までしかなかったからな。
少し息を吐きサインを見る
すると送りバントのサインが出される。
リードを取りそしてコツンとゴロを転がす丹波さんでも、
強い。と思いながら走る。
三塁ベースにスライディングをするとボールが一つに送られる。
ふぅと一息をつきサインをみると
……了解
俺はつばを一度触る
そして一球目
大きなリードをとりそして
足をクロスした瞬間走り出す
「スクイズ。」
そしてコツンと当てられたボールをピッチャーがとった瞬間に滑り込む
これでまた一点追加することになる

これで俺は今日８回塁に出て得点圏に全部進んでいる
……さすがに辛いぞ
ここまで当たることは俺は珍しかった
……でもその分足が動かないようになってきたけど
俺はベンチの戻ると先輩や春市や沢村から話しかけられた後に紙コップに入れた水を飲む
……さすがにきついな。
高校初めてのダブルヘッターの試合に俺は結構足にきていた
「……坂井準備しておけ次の回砂田と変えるぞ。」
「は、はい。」
「砂田はダウンをしっかりしておけ。足に疲労が溜まっているだろうからな。」
どうやら監督も気づいていたらしく坂井先輩に声がかかる
「……」
正直俺は限界に近かった終わった途端に一気に疲れが押し寄せる
悔しさはあるけど、とりあえず今日はアピールを続けてきた。
６ー５
そして四球３つに盗塁３つ

……こんなにも疲れが出るものとはな

「健斗くんお疲れ様。」

「ん。でも、結構辛いなやっぱり。」

「そりゃあんだけ走ってたら疲れるだろうよ。」

と倉持先輩が珍しく俺の方へ来る

「大丈夫か。後半結構スピード落ちてたと思うが。」

「怪我とかはないのでただのスタミナ不足ですね。合宿中の疲れがまだ昨日だけじゃ抜けっきってなかったので。」

「お前大阪桐生の練習にも参加してたからな。まぁ、でもいいアピールにはなったんじゃないか?」

「……まぁ、そうですね。」

と素直に頷く

でも、もうちょっとスタミナつけないとな。

疲れ切った体を見てそう思う。

……でも2試合持ってないんだよなぁ

「そういえば。これ。」

「ん?」

すると黄色い液体の入ったペットボトルが春市から渡される。
「何だ？」
「前田さんからスポーツドリンクだって。」
「……美帆から？」
「うん。」
あぁ、あれか
俺はそれを開けると一口飲む
程よい酸味と甘みが疲れた体に丁度いい
「……なんでスポーツドリンクはうまいのに料理は下手なんだろう。」
レモンと蜂蜜、それに隠し味で季節の柑橘系の果物の搾ってあるスポーツドリンクはとても美味しい
ついでに俺の好物の一つでもある
「……美味しいの？」
「あぁ。俺は好きだな。あまり甘いスポーツドリンク好きじゃないから。」
「えっ？そうなの？」
「あぁ。だから美帆がよく作ってきてくれてたんだよ。あいつはジュース自体飲めないから。」

甘いのが嫌で自家製のスポーツドリンクを作っていた
すると金属音が聞こえフェンスに直撃する音が聞こえる
「……相変わらずすげぇ打線。」
俺は結城先輩の姿を見て苦笑してしまった
6回の裏
「まずは先頭切っていきましょう。」
と大きな声で声援を送る
……丹波さんが崩れるとしたら後半
狙い球を絞ってくるころだ。
そして相手打者に対して一球目
丹波さんが投げたボールがストンとシンカー気味に落ちる
「……えっ？」
俺は目を見張る
ストンと落ちたボールを俺は初めて見た。最近宮内先輩が丹波先輩の新しい変化球を受けにいくのが多いことは知っていたけ
なんとか夏に間に合っていたのか
すると勢いに乗った丹波先輩はこの回を三者凡退で押さえ込む

「ナイスピッチです丹波さん。」
と水を渡す川上先輩
その姿を見ながら一塁ランナーコーチをするために出る
俺はヘルメットを被り一塁へと向かう
……本当いい投手だよ
元々力を出し切ればいい投手だと思う
メンタル面が少し弱く一度打たれ始めたら止まらなかったけど
どうどうと投げ込めているしな
今年のエースはほぼ丹波さんで決定だろうな
チームからの信頼感
それが圧倒的な支持となる
……それがどんな形でも
同じように苦しみ、蹉きそして試練を乗り越える
……その隙間に俺は入ることだできない
たった3か月であの隙間に入ることは本当に不可能だ
するとプレイと審判の声が聞こえる
さて、俺は俺のできることをしないと

バッターは白州先輩。さっきは御幸先輩の三振でイニングを終えたからな
すると初球の甘く入ったボールをセンター前に弾き返す。
「ナイバッチです。」
「あぁ。」
「結構甘い球多くなってきたんでライナーゲッツーだけ気をつけてください。」
得点差が離れているので盗塁のサインはないだろう
そして次の坂井先輩も初球を捉えるが
サードの真正面に飛んでいく
「バック。」
すると白州先輩は戻る。サードライナーでワンナウトランナー一塁。
普通ならバントだろうけど
バント下手なんだよなぁ丹波さん
俺はサインを見る
監督からのサインは
ノーサイン
多分三振狙いでよほど疲れを溜めないためだろう
でも一つだけ気になるといえば

めちゃくちゃ打ちにいくよな
「……あっ!! いつのまに白州先輩が出塁してる。」
「見とけよ。」
「綺麗なセンター返しだったぞ。」
沢村の言った言葉に白州先輩にさすがに同情してしまう
一見地味に見えるがかなり、丁寧なプレーをする
出塁率も高く守備範囲も広い
まるで外野手のお見本みたいな選手だ
「……そして坂井先輩はベンチに。」
「サードライナーで悪かったな。」
いや、いい当たりだったんですけどね。
まぁアレは普通ならセンター返しした方が良かったけど
……まぁせめてライト方向に飛ばしてほしかったけど
そしてリードを取り始める白州先輩
俺はモーションを盗んでいるから盗塁のサイン出されたら大体の人は成功させられると思う
「……」

そしてフォームに入る前に
「ＧＯ」
と一言言った瞬間ピッチャーが投げる
投げたボールは一直線に丹波さんに向かっていき、

丹波さんの顎に直撃した

「……えっ？」
それは声をあげる暇さえなかった。
俺はただ少しだけ呆然としながら
それでなぜか冷静だった
全員が駆け込む中で
「秀明、信二タンカー持ってきてくれ。」
「……えっ？」
「いいから。あの調子だと動けないし何より……早急に病院に連れていかないとまずいから。」
「……あ、あぁ。」

「できれば救急車も。悪い。今携帯持ってないから。」
「……あぁ。」
とそうした中で急いで二人は行動に移す
夏の予選まであと二週間
暗雲が青道野球部に押し寄せるのだった

勉強

室内練習場に集められた俺たち
組み合わせ抽選会の結果と昨日の丹波さんの怪我についてのことだった
「うぉこんなにあるのか。」
「まぁ東西分かれているぶんまだマシな方だよ。」
「大阪や神奈川とかはこれ以上だからな。５回勝てば全国大会出れると思えばまだマシだ。」
と俺はトーナメント表を見ると
準々決勝で薬師と当たることが分かる
「……準々決勝小柴のいる薬師か。」
「えっ？市大じゃないの？」
「いや。わからん。なんか学校側が結構本気で甲子園を目指しているらしいぞ。今年から野球推薦枠を設けてきたらしいし、中学の時有名だった三島と秋葉が薬師に言っている。油断していると喰われるぞ。」
あの二人も野球センスに関してはずば抜けていた

何よりも本当に小柴の勝負強さには何度も助けられていた
俺たちのほとんどは俺と小柴がとった点だ
……負けるはずがねぇよな。
俺はあいつのことは信頼していた
「……でも心配なのは先輩達だろうな。」
「……うん。」
さすがに引きずっているらしいし。
……大丈夫かな
「お前らも聞いているだろうが、昨日のデットボールで丹波の顎の骨にはヒビが入っている。」
監督の言葉に全員が苦しそうにしている
全治3週間
脳は無事だったので少し安心だったのだがそれでも昨日のことは全員がどこか思っていることがあるだろう。
話を聞いているけど、それでも
……丹波さんがいないのは本当に士気が低くなるよな
それでも今年の夏はもう始まってるし今更ごたごたするのは筋違い

この中の戦力でどう戦うのかが問題だ
「……これはチームの監督としての意見であり、決して一個人の感情としての意見ではない。」
と言ったあと
「エースナンバーは丹波に渡す。あいつが戻ってくるまでチーム一丸となって戦い抜くぞ。」
すると一気に全体が引き締まる
全治三週間か
今大会で復帰できれるか微妙だな
でも士気は少しは高まっているし少しの間は持つだろう
それには沢村と降谷にも出番が回ってきやすくなる
これはスタメンに執着するよりも沢村達の練習に付き合う方がいいかもな。
「……頼んだぞ。」
「「はい。」」
「……沢村そこ違う。公式をしっかり覚えとけよ。」
「ぐぬぬ。」
「ねぇ。降谷くんそこの公式違うって言ったよね。」

と食堂に降谷、沢村、春市と秀明、信二と美帆、そして吉川さん勉強会を開いていたと言うものも中間テストの成績を俺が見てたんだが
全部赤点と言う偉業をこの二人は成し遂げていたのだ
「お前ら学生の本業が勉強だとわかっているのか。」
「本当やる気あるの？これ乗り越えないと追試があるんだよ。練習時間が減ることがどれだけ無謀なのかがわかっているよね。」
「……健斗くん、前田さんそれくらいに。」
と春市が止めるけど
「……全く。こいつらは多少厳しくしないと言うこと聞かないからな。降谷は前科があるし。」
「あはは……」
と苦々しく笑う春市、もうフォローする気は無いようだ。
「お、おい。俺から頼んでおいたのはいいが、そんな厳しくしなくても。」
「でも、仕方ねぇだろ。丹波さんが怪我している中だったら必然的にこいつらにも出番は回ってきやすくなる。そのために補習なんかなられたら困るんだよ。」
俺がそう言うと美帆も頷く
「そういや、お二人は成績って確かいいんだよね。確か砂田くんって中間の時にクラス

で一位だったよね？」
「えっ？そうなの？」
　美帆が意外そうな顔をしているけど
「それを何で吉川さんが知ってるの？」
「……沢村が怒られた時に俺と比較されてるんだよ。お前のせいで俺のプライバシーがなくなりつつある。」
「実際野球部のお手本として先生受けいいからな。」
　信二の言葉に意外そうにする降谷
「まぁ、普段の俺から見たら信じないだろうけどな。」
「……でも、意外ですね。強豪校って沢村くんみたいに寝ている人ばっかりだと思ってました。」
　吉川さんの言葉に苦笑してしまう
「まぁ、確かにそうだな。あんまりそう言う人は少ないかもな。……でも、俺にはそれができないわけがあるからな。」
「できないわけですか？」
「負けたくない奴がいるんだよ。」
　俺は苦笑する。

「……そういや、何で食堂なんかで勉強会しているんだ？」
「いや、マネージャーは入りにくいだろ？降谷と沢村教えるためにはさすがに美帆の力が必要だったし。」
「……まぁ、そうだけど……」
「てか、信二が沢村にあんなこと言ったのが驚いたけど。」
　こいつも普通なら悔しいはずなのに沢村の勉強に付き合ってあげていた
　沢村を一年の代表として認めたのだ
「まぁな。こいつが頑張っているのは知っているしな。」
「その頑張りを少しでも勉強が普段の態度に生かしてくれないかな。」
　美帆がそんなことを言う。
「ほら期末まで後少ししかないんだ。死ぬ気で叩き込め。」
「降谷くんももっとスパルタでいくからね。野球も学校生活も、勉強も。」
「……鬼だ。」
　秀明の言った言葉に俺らは顔を見合わせる
「まだまだぬるいだろ（でしょ？）」
「沢村くん、降谷くん頑張って。」
「天使や天使がおる。」

そうして、大会前の俺たちは勉強に費やす羽目となった。

夏の始まり

「春市。」
「健斗くん。」
バックトスで渡されたボールに俺は取りセカンドベースを踏みそして一塁に転送する。
「ナイスプレー。」
「そっちも。」
とグローブを軽くぶつける
俺は息を吐きショートからライトへと移動する
「お願いします。」
相変わらずのユーティリティープレイヤーとしてほぼ全ポジションのノックを受けていた
俺の1番の武器は守備
どこでも思い通りの守備をできること
……まぁ、調整期間だから今は意図的に調子を落としているんだけど

俺が調子悪い時はバッティングではなく走塁と守備にでる。
あまり変わらないように見えるがスタートが少しだけ遅れてしまうのだ。
今は正直調子が悪いけどそれでも大体のボールは撮ることができる。
大会まで後一週間
最後の追い上げに俺は息を吐いた
「ウォオオ!!奇跡だ。金丸、健斗見てくれ、見事な赤点回避。」
「……」
俺と信二は沢村のテストの点数を見て少しだけ絶句していた
全部赤点から１０点以内で赤点回避をしている沢村にため息を吐く
「やま張らして正解だったな。」
「あぁ。」
物覚えの悪い沢村に先輩から過去のテスト傾向を聞いてそれだけを重点的にやらせたのだ
「ついでに健斗は?」
「全教科９５点以上だけど。」
俺は総合三位と言う高得点で期末を終えていた。
ついでに学年一位は美帆だったらしい

……あいついつ勉強しているんだよ。
物覚えがいいのは知っていたがマネージャーの仕事に勉強もできるとか
「……はぁ、問題は降谷だけど。」
「……大丈夫だろ。美帆が見てたし。」
「そういえば姉御と健斗っていつ勉強してんだ？」
「……姉御？」
沢村の言葉に首をかしげる
「あぁ、そういや健斗は知らないのか。前田のことを沢村は姉御と呼んでいるんだよ。師匠はクリス先輩だから。」
「……へぇ～。美帆に姉御って今度呼んでみようかな。絶対嫌がるだろうけど。」
「やめたほうがいいと思うよ。美帆ちゃん怒ると怖いから。」
「そんなもん幼馴染だから知ってるって。」
笑ってしまう
「まぁ、冗談だけど降谷が赤点なければ一安心なんだが。」
するとポケットからスマホのバイブが一回なる
多分美帆からだろう
「信二ちょっと壁になってくれ。」

「お、おう。」
一応校則違反だし周りを見回してからスマホを素早く操作する
そして結果を見ると英語とたった一言書かれていただけだった。
「……うわぁ。美帆かなりキレてる。」
「……どうしたんだ。」
「降谷英語赤点だって。」
すると全員が固まる
「……降谷死んだな。あいつ追試クリアするまでかなり勉強漬けにされるぞ。」
「……美帆ちゃん教える時スパルタだもんね。」
苦笑している吉川さんにため息をつく
その後追試合格まで部活動終了後に屍になった降谷が見かけられたのはまた別の話。
そして期末が終わり7月半ば
「今から背番号を渡す。呼ばれた者から順に取りに来い。」
監督の言葉に緊張感が増す。呼ばれるとわかっていてもやっぱりこの瞬間だけは本当に緊張するな
「まずは背番号1。丹波光一郎。」
すると驚いているのか少しの間動かない丹波さん。

「……どうした。取りに来い。」
「は、はい。」
まぁ意外だろうけど当たり前の結果だろう
そして一言添えてから背番号を渡される
そして背番号が順に渡されていく
背番号２　御幸一也
背番号３　結城哲也
背番号４　小湊亮介
背番号５　増子透
背番号６　倉持洋一
内野手の言った後に俺は緊張感が増す
これで俺と坂井先輩のスタメン争いが決着するのだ
白州先輩だったら俺は多分９番になる
そして監督の言葉を待つ。そして淡々と告げた
「７番白州健二郎。」
その一言に全員が空気を飲む
監督の一言に全員がわかってしまった

この夏の外野手の主力メンバーが
「８番伊佐敷純。」
「しゃー。」
と呼び終え背番号を渡されるとそして次ラストの背番号
「９番砂田健斗。」
「はい。」
と監督の元へ向かう
そして背番号を受け取ると監督が笑う
「……任せたぞ。」
「……はい。」
そうしてガッツポーズを決めたがったが俺は我慢する
さすがに嬉しかった
そして背番号はどんどん呼ばれていく
背番号１０　川上憲史
背番号１１　降谷暁
背番号１２　坂井一郎
背番号１３　宮内啓介

背番号１４　門田将明
背番号１５　樟木文哉
背番号１６　樋笠昭二
背番号１７　田中晋
背番号１８　山崎邦夫
背番号１９　小湊春市
背番号２０　沢村英純

この二十名がこの夏の青道高校野球部のメンバーだった

「記録員はクリス。お前に頼む。」

「はい。」

とクリス先輩は記録員。そして終わるかと思いきや

「それからマネージャー。お前たちも本当によく手伝ってくれたな。」

と言って監督が取り出したのは試合用のユニフォーム。

「お前らもチームの一員としてスタンドから応援してくれるな。」

すると三年生の先輩は涙を堪えられないでいる。すると美帆と目が合うと笑顔になっている

「皆もわかってると思うが高校野球に次はない。日々の努力も流してきた汗も涙も全て

はこの夏のために。」
　すると全員が緊張感のあるいい顔になっている。士気も高い。これなら大丈夫だろう
「よしいつものやついけ。」
「はい。」
　と自然と円陣を組み右手を左胸に持ってくる
「俺達は誰だ？」
『王者青道!!』

「誰よりも汗を流したのは？」
『青道!!』
「誰よりも涙を流したのは？」
『青道!!』
「戦う準備はできているか？」
『おおおおおおおおおおお!!』
「我が校の誇りを胸に、狙うはただ一つ、全国制覇のみ!!」
「行くぞォォォォ!!!!」

『おおおおおおおおおおお!!』

あの時とは違い一年やマネージャー含め全員が一致団結し声を揃えている

……なんやかんや色々トラブルは起こったがなんとか間に合うことができた。

そして青道の夏が今始まる

開会式

「降谷、ふざけんな。」
東京都大会開会式終了後沢村が降谷を背負っていてぐちぐち文句を言っていた
とは言うのもスタミナがない降谷が開会式中ずっと沢村の方に倒れていたのである
「……お前よくそのスタミナでピッチャーできるな。」
「……」
汗の量が凄いな
少し酔っていてもやっぱり北海道からきただけはあるか
東京の暑さには慣れていくしかないからな
しばらく歩くと肩をトントンと叩かれる
後ろを振り返ると胸にYと書かれたシンプルなユニフォームを着た見た目が完全に女子みたいな小柄な男が立っていた
「久しぶり、キャップ。」
「……おう。久しぶりだな。小柴。」
そこには元チームメイトの小柴がいた

「……お前また縮んだか？」
「変わらない。キャップが背が伸びただけ。」
「お前本当に変わらないな。」
「野球では変わっている普通の打率も3割程度なら載せられるようになった。」
「……お前それ絶対他の人に言うなよ。」
　3割打てない人結構いるぞ。
　まぁ俺も打率は6割超えてるけど
「そんで、何の用だ。」
「……別に見かけたから。挨拶しにきた。」
「あぁ、そう。」
「そうなのだ～。」
「そうなのか。」
「うん。そうなのだ～。」
「無限ループになるからやめようぜ。」
　のんびりとした性格だから小柴に合わせてたらきりがない。
　でもこう見えても勝負強いバッティングをするんだよなぁ。
「む～。楽しかったのに。」

顔を膨らませているけど
「……お前の価値観いつに立っても分からないわ。」
マイペースすぎて本当に分からない
「でも、久しぶりに会えてよかった。最近ＬＩＮＥしか話せなかったから。」
「おう。こっちも練習や期末あったしな。それで、そっちはどうだ？」
「うん。楽しいよ。バッティング練習多いし。」
「お前本当バッティング好きだよな。」
「ノックのほうが好きな変態はおかえりください。」
「……お前ぶん殴るぞ。」
「……そうしたら女声で痴漢だって叫ぶけど？」
「ちょ。」
「冗談だよ。キャップにそんなことする訳ないよ。」
と笑う小柴に
「俺じゃなければやるんだな。」
とため息をつく。
ってかこいつ本当に女に見えるけど男なんだよなぁ
好きな食べ物はレバニラ炒めと餃子というかなりオヤジ臭い点を除いては

「……はぁ、まぁ今度会うのは準々決勝か。どうせ上がってくるんだろう？」
「もちろん。僕たちには秘密兵器がいるから。」
「……秘密兵器？」
「うん。楽しみにしてて。僕たちは青道にも負けるつもりはないから。」
　といってまたフラフラと人ごみの中に紛れていく小柴
　あいつ大丈夫かよ。と前を見ると
　……やばい逸れた。
「今日は本当にすいませんでした。」
　戻った後こってり監督から絞られた後に俺たちは練習後食堂に集まっていた
「別にいいけどよ。お前って時々抜けてるよな。」
　伊佐敷先輩の言葉がぐさっと刺さる
「小柴くんって薬師に来てたんだ。」
「お前知らなかったのか？」
「うん。私興味なかったし。」
「…まぁお前がそういうやつってことは知ってたけどさ。」
　こいつなもう少しチームメイトに興味持てよ
「でも最悪に近いね。小柴くんが同地区なんて。」

「そうだな。」
「はぁ？どういうことだ？」
「……１０人で全国制覇できたのはほとんど小柴のおかげなんですよ。……あいつ打撃に関しては御幸先輩の強化版みたいですから。」
「私たちのチームで唯一得点圏で期待のできるバッターでした。特に三塁にランナーがいた時の打率は７割５分ありましたから。」
「なっ。」
　伊佐敷先輩が驚く。俺でもあの得点圏に強いバッティングは不可能だ。
「あいつ守備も走塁も俺らのチームでは下の方でしたが、約８割型俺と小柴でとった点です。それに得点圏では最低限の仕事はちゃんとこなす。……俺たちのチームって個性的なメンバーばかりでしたが小柴は別格ですよ。」
「……でも、それならなんで薬師に行ったの？他にも推薦があったんじゃない？」
「…俺たちのチームは守備のチームでしたし。それに守備に関しては県大会レベルだったのが原因だと思います。後長打はめっぽう打てないですし、それにランナーいなかった時のあいつは打率１割ないですから。」
「本当御幸みたいな奴だな。」
「それに小柄でしたのも原因だと思います。でもランナーいないと打てないことを自覚

してるから追い込まれるまで絶対に振らないんだよね。……私も嫌だったな。小柴くんに投げるの。」
　美帆が嫌そうな顔をする
「出塁率は高いからなぁあいつ。しかもランナーいなくても打てるようになったとか言ってたし。元々バッティングセンスは俺以上ありますから。」
「……大門中って化け物の集まりかよ。」
　伊佐敷先輩が口を開けたまま固まってしまう
「そういや。そっちは稲実とあってたんですよね？」
「あぁ。相変わらずだったけどな。」
　と俺が離れていた時に稲実の主力組と話していたらしい
「いいなぁ。カルロスさんと話して見たかったな。」
「……はぁ？鳴じゃなくカルロス？」
「はい。同じタイプの先輩なんで話してみたかったんですよ。それに成宮さんとは絶対に相性悪いってこと分かっているんで。」
　元々あぁいう人は苦手だ。ちやほやされアイドルみたいにもてはやされてる人はなんていうか
　……なんか見下されているように見えるから

「あまり人付き合い得意じゃないですし。」
「……まぁ、それは分かる。」
「自覚はあるんだね。」
　春市が苦笑している。
「まぁ、弱いところは全部美帆に押し……任せてましたから。」
「今押し付けたっていったわね？だから私のところに取材ばっかりきて健斗には取材はほとんどなかったの？」
「……お前は目立つのは好きだろ？俺はジメジメした暗いところで黒子に徹したいの。面倒だったし。」
「……健斗後から帰る時じっくり聞くから覚えておいてね。」
「相変わらず仲良いなお前ら。」
　御幸先輩が苦笑する。いつの間にか美帆は先輩たちとも仲良くなっていた。
　こう言った社交性は美帆が優れているよなぁ
「……まぁ、幼馴染ってこういうものだと思いますよ。」
「私たちは仲良すぎるって言われるけどね。」
「そうだな。喧嘩ももう何年もしてないし。」
「ってか喧嘩したことあった？」

「……いや。覚えている限りではないな。」
「どんだけ仲いいんだよ。」
「まぁ、それでも時々意味分からないけど蹴られたり殴られたりしますけど。」
　本当に時々訳わからないんだよなぁ。
「ん？そうなのか？」
「はい。吉川さんと同じクラスだから話したり、同じクラスの女子と話しているとなんか意味不明だけど叩かれたり不機嫌になるんですよね。」
「「……」」
　すると全員が黙り込んでしまう。
「あれ？なんか変なこといいました？」
「……健斗、前に聞いたけど健斗が告白されたらどうする？」
　美帆が急にそんなことがいいだす
「……なんで恋話？」
「いいから。」
　まぁいいけど
「……まず俺みたいな野球バカ好きになるやつなんていないだろ？告白された時考えるだろうけど今は多分断るかな？ちゃんと考えないと相手に悪いだろうし、生半可で付き

合ったらさすがに相手に失礼だろうし。」
「……うわぁ。めんどくさいね。」
小湊先輩が可愛そうな目で俺を見る。
「あれ？だって俺みたいなめんどくさいの好きになるやつなんていませんよ。見た目だって優れている訳じゃないし。」
「……これ本気で言っているからたち悪いんですよ。」
「……前田さんも大変だね。」
「……？」
首をかしげる。どういうことだろうか。
「まぁ、いいや。帰る前に美帆素振り見てくれないか？なんか大阪桐生との試合以来少しフォーム崩してるように感じているから見て欲しいんだけど。」
「それならトップの位置が少しだけ前になっているわよ。後引っ張ろうと意識しすぎ。もう少し引きつけないと。」
「……なるほどな。」
「健斗は塁にさえ出れば無敵だから強く叩けばいいのよ。長打になるのは結果でしかないの。ホームランで入る一点でもタイムリーで入る一点でもどんな形でさえ一点には変わりないんでしょ？」

「……本当おっしゃる通りです。」
「最近長打多かったけど元々はチャンスメイカーなんだから。欲をかかずに塁に出ることだけを考えればいいの。」
「……はい。」
正論すぎることを言われて自然と頭が垂れる
「……なんか完全に尻に敷かれてるね。」
「正論なんだから仕方ねぇだろ。」
一通りの説教を受けた後俺はため息を吐く
何よりも近くにいたことだから気づくことはたくさんある
……あいつも俺なんかのことばかり構ってなければ青春できると思うんだけどなぁ
はぁと息を吐き体を伸ばす
「送るぞ。」
「へ？まだ8時じゃない。」
「いいから。それとちょっと待ってろ。グラブ持って来るから。」
不思議そうにしている先輩方に少しだけ苦笑してしまう
「……久しぶりにキャッチボール付き合えよ。美帆。」
すると嬉しそうに顔を明るくする美帆に苦笑してしまう

本当単純だなこいつ
「別にいいけど何よ急に。」
「別に。なんでもねぇよ。」
「……変な健斗。」
クスクス笑う美帆にこっちも笑顔になる
やっぱり俺は幼馴染離れが未だにできずにいる

一回戦

一回戦が終わって対戦校が決まったところでビデオを見る
初戦の相手は米門西高か
「……」
ビデオを見ると対戦校の姿があった
見終わると俺は息を吐く
コントロールが良くないピッチャーに守備が上手い選手を重ねている守備のチーム
と言っていた。
１２０ｋｍ後半のストレートにスライダーとカーブ
つまりは軟式野球で見慣れた球種を使ってくるはずだ
「……」
いつも通りの力を出せば打てる
そう判断していた
ただやはり一番の問題は緊張と油断
やはりそれだけは避けられないのも事実だった

「……おいおい。左のエースじゃねーのかよ。」
八番バッターの倉持先輩が呟く
今日の先発は背番号１０のアンダースロー投手だった
「多分こっちの方がエースなんじゃないですかね？多分強豪校と当たった時の隠し球みたいですし。」
「……へぇ～どうしてそう思うの？」
「…いや、純粋にこっちの方がチームの方針とあっているんですよ、クリス先輩曰く守りのチームらしいですしそれならコントロールがいいピッチャーの方が戦術があっているんですよ。低めと外角に集めればフライをあげることができますし。」
「……へぇ～。よく見てるじゃん。」
「小湊先輩球数稼ぐの任せていいですか？まずランナーに出ることが優先だと思うのでちょっと初球から狙っていいですか？」
と今日は一番を任された俺が言うと
「……うーん別にいいけど。なんで？」
「いや。もしかしたらなんですけど。俺が話した癖って覚えてますか？」
「うん。覚えているけど……」
「もしかしたら同じような動きをしてくる可能性があるんで。そこを狙い打ちしたいん

ですけど。」
……私高都低
今は私立校有利な高校野球だがどこの高校も勝ちたいと思う気持ちは同じである
だからどんな形でさえ勝つことにこだわってくるはずだ
……それが狙い目になるとも知らずに
「……まぁ、突破口を開くにはいいかもね。」
「すいません。今日の先発は降谷なんでなりふり構わず一点とっていきたいので。」
と今日のスターディングメンバーは
一番　砂田　ライト
二番　小湊（亮）セカンド
三番　伊佐敷　センター
四番　結城　ファースト
五番　増子　サード
六番　御幸　キャッチャー
七番　白州　レフト
八番　倉持　ショート
九番　降谷　ピッチャー

となっていた。
丹波さんが戻っての間降谷が先発に抜擢させた。
一年で初先発
……さすがに一点は取っておきたいんだけどなぁ
こいつの場合弱点解析されたら速攻やられるしなぁ。
『一番、ライト砂田くん』
アナウンスが流れる
「お願いします。」
俺はバッターボックスの入るとあえて前気味に立つ
そして守備位置を見ると
……やっぱりそうか
俺は確信に変わる
セカンドがセカンドベース付近までいる流し打ちシフト。
やっぱり研究はしているらしいな
……まぁ、意味ないけど
俺は集中しボールに集中する。
さっきの投球練習から浮き上がるボールではなく落ちていくボールなのはわかって

いる
するとブラスバンドが聞こえてくる。
聞こえる曲を聞きながら主審の一言を待つ
この緊張感がたまんない
「プレイボール。」
このキャッチャーは四番などの強打者にはアウトコース中心で打ち取り守備でも流し打ちしか警戒してないシフトになっているのはわかっていた。
だからその初球
下から放ってくるボールに多少ボールでもいい
外角にきた球を上から強く叩き引っ張る。
金属音を響かせ甘いコースに入った球を逃さなかった
すると一二塁間に強いゴロが転がり抜けていく。
一塁ベースを大きく回ったところで止まりそして一塁に戻る
ライト前ヒット
まぁ先頭バッターとしての役割は果たせただろう。
「ナイスバッティング。」
プロテクターを外し俺は門田先輩に渡す。

「……予想以上に打ちづらいですよ。あまりあげない方がいいですね。低く鋭い打球を心がけないと。」
「それで初球からいくのか？」
「当然です。」
サインを見る
俺専用に最近強制盗塁のサインができたのでそれを見ると
……もちろんのように盗塁のサインが初球から出される。
リードは小さめでいいか
見たことないピッチャーだしな
それならノーリードの方が走りやすい
そして一球目からスタートを切る。一気に加速し俺はスライディングをする。
キャッチャーは投げては来ずにただ呆然としていた。
「いいぞ!!砂田!!」
「さすが。青道の韋駄天。」
「ってか足早くね。倉持以上にあるんじゃないのか？」
とかと二塁から声がきこえてくる。
でも、やっぱりクイックは少し遅いな。アンダースローは下半身の負担とヒジ関節が

柔らかいとできない
そして二球目からは後は先輩たちに任せる
無理にして三盗する必要はない
一点を確実に
それは監督も同じ思いだったらしくバントのサインが出される
それに頷くと小湊先輩は初めてみるスライダーを確実に転がし俺は三塁へ進む。
ここは形はなんでもいい
内外野は長打警戒
……まぁ外角にしか投げなさそうだけど
伊佐敷先輩を見るとこっちと目を合う
すると分かってると言われたようにこっちと見て頷く
大きいのはいらない
鋭く低く
そして初球から
「誰が青道のスピッツじゃ!!」
大振りしてからぶっている伊佐敷先輩がいた
……何しているんだあの人

どうやらスピッツって呼ばれたくなかったんだろうな
すると今のでもう少し下がったのが分かった
……今のが狙い目だな
そして二球目
「ダッシャー。」
と打った打球は逆らわず一二塁間を破る
毎日素振りを欠かしていないからこそできるのだ
俺はゆっくりと先制のホームを踏む。
「ナイバッチ伊佐敷。」
「純さ～ん!!」
とアルプス席から歓声が聞こえてくる
「ナイスバッチ。」
結城先輩の手を出してきたので軽くハイタッチをする
「結構思った以上に遅いですよ。ギリギリまで引きつけ引っ張るのがベストだと思います。」
「…あぁ。」
苦笑しながらバッターボックスに向かっていく

ベンチに戻ると
「悪い。無茶言ったな。」
御幸先輩が俺の方を見て謝ってくる
「別にいいですよ。」
元々部屋で先取点が欲しいと言った御幸先輩が俺に対して言ったことだった
「まぁ、形がどうであれ。先制点は取れましたし、少しは力抜いて投げてくれると嬉しいんですが。あいつ多分ペース配分無視して投げますよ。」
「しかしよく初球から打てたな。」
「まぁ、配球はよんでいたよりワンパターンですから狙いやすかっただけですよ。」
「……お前がいうと嫌味しか聞こえないな。」
伊佐敷先輩がベンチに戻ってくる
結城先輩の二塁打で一点を追加したらしい
「ナイスバッティングです。」
「おう。」
その間にもどんどん点が入っていく。小技を駆使したと思えば御幸先輩の力で押し返したりなど簡単に点が入っていき。
一回打者九人の猛攻で5点を先制する

一回捕まったら止められない打線は健在だった

ネクストバッターサークルから戻ると三振で終わった降谷に話しかける

「三振は気にするなよ。点差はあるけど、序盤から全力で捻じ伏せろ。」

「……えっ？」

「一応お前ちゃんとした先発では大阪桐生戦から2回目だし、下手なコーナーを狙ったピッチングはお前不器用だからできないだろうからな。それなら全力で相手をねじ伏せてやればいい。お前の後ろには先輩方プラス俺がいる。……口は悪いけど相手は一年だからって油断しているからな。……てめぇのピッチングで相手ベンチを黙らせろ。」

俺が笑うと降谷は複雑そうな顔になり

「性格悪いね君。」

「……よく言われる。沢村とかのヤジは気にしないでいいからな。」

「元からそのつもりだから大丈夫。」

「なら大丈夫か」

まぁ、野球では素直ではいられない

汚いだろうが地味だろうがそれでもフェアプレイであればとことんその隙をつくのが野球ってスポーツだ

甘い事言っちゃ食われるのは俺たちの方だぞ
そうした中で俺はライトに着く。
「……」
やっぱりこの感じが落ち着く
そうした中で降谷が投球練習を見ると控えめで投げていることがわかる
……さて、どんな顔をしてくれるのかな？
俺はそうしてプレイボールを言われるまで待つとやっと一回の裏の攻撃が始まる
そして一球目
ズバーンと外野まで響くミットの音
それにつられて腰の引けたバッター
……ナイスピッチ
俺は苦笑する
ボール球だけど勢いと伸びのあるボール
恵まれた体から出される速球は才能だ。
そしてテンポよく出される速球に空振りしているバッター
……そして三者連続三振に打ち取った
「ナイピッチ降谷。」

「ほとんどがボールだけどな。」
と盛り上がる青道ベンチとは対象に
意気消沈気味の米門ベンチ
……決まったな
これでもうこの試合は動かないだろう
「沢村、準備しとけ。お前の出番もあるかもしれないぞ。」
「……えっ？」
すると降谷が驚くけど
「……お前一人しか先発できるやつはいないんだ。丹波さんが帰ってくるまではお前一人で回していかないといけないし、怪我でもされたら困ったもんじゃない。……お前は一応丹波さんが戻ってくるまではエースなんだ。」
「……なっ？」
「……そうだな。」
すると御幸先輩も乗っかってくる
「……休めるときはゆっくり休んで力を蓄えるのもエースの役割だぞ。今日だけじゃない。今日勝てば次の試合だってあるんだ。それに他の投手だって調整登板だってしないといけないときだってあるしな。……てめぇ一人で戦えるほど夏は甘くねぇぞ。」

するとビクッと反応する降谷と少し驚いたようにする御幸先輩
「……まぁ、口だけじゃダメだからな姿勢で示すよ。……ちょっと、塁に出てくるわ。」
少しだけ息を吐き
心を落ち着かせる
……全てをリセットする
……悪いけどチームバッティングを無視させてもらうぞ
よみ打つんじゃなくて体で反応させろ
……ふぅ
バッターボックスに入ると俺は自然体に戻す
力を抜けただ一点そこに来た時だけ思いっきり振る
そして一球目外角に外れボール二球目もインローに外れる
そして三球目
来たアウトローへのストレート
俺は足を踏み込み完璧に捉える
金属音の甲高い音が聞こえ打球は鋭くライナーで逆方向に伸びていき
レフトスタンドに突き刺さった
そしてバットを置きベースを一周する

少し上がったなぁ
結構叩いたつもりだったのになぁ
俺は一塁ベースを回ったところで歓声が聞こえる
「すげぇ。あのコースをスタンドまで持っていきやがった。」
「あいつなんなんだよ。」
とか観客席から聞こえるが納得はしていなかった
俺が肩を落として戻ると
「狙っていたのか？」
監督が話しかけてくる
「コースは狙ってましたけど、ホームランになるのは予想外でした。」
アウトローが好きだからこそあそこのコースは中学時代から大好物なんだけど
なんか思っているよりも伸びるんだよなぁ
硬式に入ってからは思った以上に打球が伸びるのが少し悩みのタネになっている。
……ボールのコントロールが聞き辛いんだよな
「……」
首を傾げている。でも、あのホームランは多分マグレだろう。
……切り替えないとな。

そしてため息を吐くと目の前に水の入ったペットボトルが出される
「ナイスバッティング。」
と一言降谷が渡してきた。
「おう。ありがと。」
と受け取り水を飲む
そしてその後は試合は淡々と進む
降谷は三回をしっかり抑え九人を完全に押さえ込み
その後沢村がデットボールが一つあったものの一回を無失点で抑える
打っては２３安打１７得点で俺は３打数２安打１本塁打１盗塁１打点
４回の守備からは坂井先輩と交代
そして今５回２アウト
「川上先輩後一人しっかり抑えていきましょう。」
沢村のクールダウンに付き合いながら俺は声を出す
「……健斗何言っているんだ？まだ５回だぞ？」
沢村がキャッチボールでアイシングをしながら言っているけど
「野球はコールドっていう規制があるんだよ５回以降１０点差それか７回以降７点差以上つけられた時点で試合が終わるんだよ。……他の地区とかだったら実力差が開きす

ぎて２０点差つくって学校もあるくらいだしな。」
「……」
そして、スパーンとミットの音が聞こえる
「ストライク。バッターアウト。ゲームセット。」
最後の審判の声が聞こえる。
「……苦しいだろうが励ましたり同情するなよ。……勝った奴が負けた相手にいうことなんてないんだから。」
すると沢村が黙り込む
……悪いけどこれが勝つということだ
整列し礼をした後、手を差し出される
「頑張れよ。絶対甲子園に行ってくれ。」
背番号１０をつけた今日先発していた人だった
「……もちろんです。」
それを笑顔で受け答えする
そうして夏の一回戦は青道の圧勝で終わったのであった。

期待

予選一回戦が終わって2日後の昼休み
俺は屋上のベンチで休んでいた
……はぁ。休まる暇がねぇ。
最近一年生の間では二つのグループができており
スタメンの俺と降谷は上級生や同級生から見世物扱いされていた
降谷はいつも通りのんびりしていたが俺は一応優等生で通っている
だから基本的な受け答えや模範的な生徒を演じてきたのだが
……背番号九番
スタメンって周りの期待ってすげぇな
俺はただため息をはく
それに同じクラスのチア部の人が前の試合のことを話したのかいきなりスター扱いされているんだよなぁ。
一年での一桁背番号は重い
それは分かっているつもりだった

「…やっぱりここだったの？」
　すると美帆が屋上に入ってきた
「……ん？美帆？どうした？」
「もうそろそろストレスたまってきているんじゃないかって思って。先生に聞いて屋上避難させたって言ってたからね。」
「…そっか。それでどうした？」
「あんた一人で昼飯はかわいそうだから一緒に食べにきたのよ。それと薬師の結果も知りたいでしょ？」
「…薬師は知っている。５回コールドであいつの姿はなし。全員を背番号道理に固めていたからな。」
「そう。やっぱりあんたは面倒見はいいわね。」
「その一言は余計だ。」
　軽く頭を叩くと舌を出す美帆に軽くドキッとしてしまうが
「……今ちょっとドキッとしたでしょ？」
「……やっぱり美帆だな。一言余計だ。」
　ため息をつく。すると顔が一瞬で真っ赤になる美帆
「……なんだよ。」

「なんでもないわよ。」
　と笑っている美帆に首をかしげるが
「でも、どう？調子は。」
「最悪ではないけどまだあがりきっちゃーいねーよ。あのホームランは一番ダメな例だろ。」
「まぁ、健斗上げるのは論外に近いからね。一打席目もらしくなかったし。」
「あれは頼まれたからだよ。無理やり打ちにいった結果だ。」
「頼まれてヒットを打てるってやっぱり健斗は健斗よね。」
「あのな。そんな化け物みたいに扱わないでくれないか？俺だって打てない時くらい。」
「でも、健斗気づいてないかもしれないけど……高校入ってから、未だ出塁していない試合がないよね。」
「は？そんなわけ。」
　と言われてから思い出す。そういえば俺練習試合や公式戦でスタメン時はもちろん。代打起用時も全打席出塁している。
「……あれ？」
「まさか気づいてなかったの？」
「……気づいてなかったな。てか気付かなかったってより必死だったから。」

「……本当どこか抜けてるよね。」
とはいうものの
「正直レベルが高すぎるんだよ。ここ。そんな暇はねぇよ。」
「はぁ、そういうと思って。」
と俺はプリントを渡される
そこには今の欠点とスイングについての修正点。そして今週末に戦う村田東のデータがぎっちりと記載されてあった。
「……私が作ったデータ。どう。」
「……お前って家事以外は本当に何でもできるよなぁ。」
「うっさい。」
「でも……助かる。」
俺はデータを見つめしっかりと修正点を見る
そうしながら昼休みの休暇を過ごしていた
村田東戦
カキーン金属音の響く音が響く
俺は打った瞬間抜けると思い走り出す
打った打球は一二塁間を飛んでいきライト前に転がっていく

一塁を少し回ったところでストップしこれで３安打目
俺は少しだけ手応えを感じていた
今日はこれで３打数３安打で猛打賞
盗塁はゼロだがそれでも十分過ぎる働きだと思ってる
「ナイスバッチ。調子いいな。」
まぁ、調子はまだ上がりきっていないんだけどな
「まぁ、それなりですかね。」
とプロテクターを預けると
『九番降谷くんに代わりまして代打坂井くん。』
というアナウンスが流れる
これ次の回俺も交代かな
てか今日は疲れもないしまだやれるんだけど疲労を残さないようにここで切り上げだろう
そして思った通り４回の裏に坂井先輩と代わりベンチに回る
試合は１０対０
コールド勝ちはほぼ確定だった。

勝負

「「健斗く～ん。」」
「砂田。期待しているぞ!!」
「……えっ?」
俺は試合終了後、次の試合の偵察にいく途中俺はきょとんとしてしまう。
「あの、御幸先輩?これって。」
「あ、あぁ。お前早いな。」
女子やクラスメイトの言葉に少し俺は御幸先輩に少し聞くと
「追っかけだよ。お前は初めてか?」
「生憎長野のかなり山奥出身ですしね。」
俺は苦笑してしまう。
するとまた歓声が上がると俺はため息を吐く
……野球で目立つのはいいんだけど、こういうの本当に苦手なんだよなぁ。
元々野球部以外のメンバーとは話さないしな
「よし、揃っているな。」

すると監督が来る
「各自ストレッチが終わったら、スタンドで食事を摂れ。」
「「はい。」」
「次の第3試合全員で観戦するぞ。勝ったほうが次の対戦相手だ。」
監督の言葉に緊張感が高まる
もう次の対戦はすでに始まっていた。
都郡山対明川の試合は圧倒的な違いがあった
台湾からの留学生か。
楊舜臣。
俺はスタンドで見ていると遠目でも分かる。
……本当に正確なコントロールだな。
速さや鋭くキレる変化球よりも面倒なのはコントロール
それを俺は軟式野球でわかっている
特に低めに投げられてゴロを打たせるよりこのピッチャーは三振を取っていくタイプ
「……嫌な投手だな。」
俺がぼそっと呟く

ボールコースを一杯に使っての留学生は今までの相手とは格が違うようだった。

カーン。

心地よい金属音が鳴り響く

鋭い打球がライト方向へ飛んでいくとそのままスタンドに突き刺さる

「砂田。ラストな。」

先輩がいうと俺は頷くとインコース低めにボールがくると腰を回しコンパクトに振る

するとファースト頭を超えライン上にボールが落ちる

「ありがとうございました。」

するとバッターボックスをならし場を整えると俺はため息をつく

やば、また取材が来ているな

ここのところ活躍したせいか取材が殺到しているんだよなぁ。

特に降谷が取材断っているせいかそのせいで俺ばっかりだ

生憎練習時間が減るのだがそれでも応援してくれる人を増やすっていうのは大切なんだが

さすがに俺もこれ以上の取材断ろうかな

試合に集中したいしなんか練習が最近足りてないんだよなぁ。
「守備練してぇ。」
ぼそっと呟く。最近バッティングメインになっているせいかノックが少なくなっていた。
「お～い。健斗!!」
するとユニフォーム姿の美帆がやってくる
「お前、何でユニフォーム着ているんだよ。」
「監督に許可もらってバッティングピッチャーやらせてもらうことになったの。私だったら明川にいいでしょ。」
「…はぁ?お前バッティングピッチャーやるのか?」
「いいでしょ。全力で投げていいって言われているし。抑え込むつもりで投げるから。」
「……いつから。」
「これから。先輩変わる予定。」
マジか。それなら
「ちょっと監督のとこ行ってくる。」
「大丈夫よ。スタメン相手に3打席ずつ勝負するらしいから。」
「……へぇ～打たれて凹んでも知らんぞ。」

「そっちこそ抑えられて調子崩しても知らないから。」
やろう。あいつ絶対に凹ます。
そしてマウンドに向かうライバルに俺は息を吐く。
……そういえば、打席に立つのは久しぶりだな
あいつのピッチング練習に付き合ったりは青道に来てからもあったけど実際に打席に立つのは半年ぶりだ
すると観客からざわざわとした声が上がる
まぁ普通なら女子がピッチャーマウンドに練習とはいえ投げることはまずないしな。
「えっ。もしかして前田さんが投げるの？」
春市が驚いたようにしているけど
「まぁ、監督の許可はもらったらしいしいんじゃね？」
「でも、大丈夫かな？前田さん。打たれて凹んだりは。」
「あ～。それは大丈夫だと思うぞ。」
するとバンと大きな音が聞こえ白州先輩も誰もが固まる
アウトロー一杯のストレート
相変わらずのえげつない球投げるなあいつ。
そして白州先輩に対してテンポ良く投げ込む

インハイ。アウトハイ、インロー改めていいスピンがかかっているのが分かる
「あいつも野球に関しては人一倍負けず嫌いだから。」
「……お互いにいい刺激になっているね」
「あいつは俺のライバルだし当然だろ。…逆に先輩たちが凹まないといいけど。」
そして白州先輩がたった1２球で３打席が終わる。
「……やっぱいいピッチャーだよなぁ。あいつ。」
「うん。」
「そうだな。本当にうちのピッチャー陣に見習ってほしいよ。」
するといつのまにか来ていた御幸先輩。確か降谷と一緒のメニューだったはずだが
「どうしたんですか？」
「降谷知らね？ランニングの場所探したんだがいないんだけど。」
「降谷？すいません見てません。」
俺はふと思い出す
「もしかして。あいつ北海道出身でしたよね？」
「えっ？あぁそうだけど。」
「……降谷。少し涼んでいる可能性がありますね。あいつ多分こっちの夏初めてですよね？」

「…なるほど。こっちの暑さに慣れてないってことか。」
俺は頷く
元々スタミナ面で課題がある降谷だ
「丹波さんも最悪出番あるかもしれませんね。」
「あぁ、それだけの厳しい試合になることは違いねぇな。」
すると歓声が湧く。
「すげぇ。哲さんを三球三振。」
「あのピッチャー何もんだ。」
「うわぁ。あいつマジで抑えにきているよ。気持ちののったあいつの球かなりきついからなぁ。」
「てか、前田何球種もっているんだ?俺が見た限り6つはあるぞ。」
「俺が知っている限りじゃ8球種ですね。全部あんまり曲がらないけどコントロールや緩急で抑える。……軟式の肘の柔らかさと努力であいつは全国大会と世界大会を投げぬきましたから。」
「なんで健斗くんが自慢げにしているの。」
そりゃ一番自慢の幼なじみですし
「あいつのライバルだから仕方ないじゃないですか。」

男子とも渡り合えるピッチャーにワクワクしてしまう
やばい。久しぶりに楽しみだ。
そしてしばらく見ていると鈍い音ばかりが響く
ここまで捉えたのは結城先輩のシングル一本と小湊先輩のシングル、そして伊佐敷先輩のボテンヒット
明川の投手と異なるのはほぼ低めでゴロを打たせにいっているところか。
高めは滅多に投げたがらないもんなこいつ。
でも、それでも打たれないのがこいつだ
そして俺の打席になる。
するとネット越しに笑っている美帆
俺は息を吸いそして一人のピッチャーに集中する
きた球を打つ
それだけだ
そして初球。
パーンとミットの音が聞こえる
「……やば。」
インコースギリギリ一杯のストレート

全く手がでなかった。
急速は１３０ｋｍくらいだろうか。でも手元でかなり伸びてくる
久しぶりだなこの感じ
強いピッチャーと本気でやり合うのって
そして２球目。
アウトローにボール半個外れてるスライダーのボールを打ってしまう
あれ美帆の性格からいうと入れてくると思ったんだけどな
コーンと弱いゴロを打たされ１打席目は凡退してしまう
そして２打席目
狙い球の初球のインハイのボールを捉える。
カーンといい金属音が響き渡りスタンドまで持っていく
あいつの癖は分かっているしな
アウトローを投げた時美帆は俺の時はほぼ次の球をインコースに投げる
アウトコースのボールは得意なので無意識に投げたがる癖があるのだ
……てか、本当に球は軽いよなあいつ
硬式になってより明らかになる弱点
それが何となくわかる気がした

次が第三打席目
周りの声は何も聞こえずただ目の前の美帆を見つめる
初球
インローに来たフォークを捉えるがわずかにボールが切れる。
あんやろー何であんなにすれすれにフォークを投げることができるんだよ。
そして2球目
アウトローにスライダーの釣り球を見逃す。
入ってくるボールなので最悪絶好球になるのだがコントロールがいいだけでものすごく捉えづらくなる
そしてテンポよく投げ込んでくる美帆
やば
直球だと絞っていたのだが遅い球を振らされてしまう。
くそ、変化球攻めかよ。
たしかに俺は直球に比べ変化球はそこまで得意ではないのだが
そして4球目もスライダーをカットしてカウントは2ー1
……ふぅ
俺はただそのピッチャーを打ち崩すことだけを考える

ストレートだけ捉えそのほかはカット。
5球目ボールがくると直球の速さでボールがインローへくる
来た
俺はコンパクトにバットを振り抜く。完璧に捉えたとはずだった
そのボールが沈むまでは
コツンと当たったボールはセカンド真っ正面に転がる
……やられた
ツーシームだと気づくのが遅すぎた
すると美帆も不機嫌で納得いってない様子だった
多分ホームランのボールを悔やんでいるんだろう。
「……くそ。」
小さく呟くと俺は弱点も見えてくる
変化量の少ないストレートとほぼ同じ速度の硬式ボール特有の変化球
それが明らかになったといってよかった
「ありがとうございました。」
とバッターボックスをならした後ため息を吐く
……なんか本当に悔しいな

弱点を見抜かれたこと
そして的確に相手の癖を見抜いてくるピッチャーに完敗としかいいようがなかった